

中国浄土教における唯心浄土思想の研究(二)

柴 田 泰

はじめに

第一章 従来の見解と問題の所在

第二章 経論に説かれる弥陀浄土思想と唯心浄土思想

第三章 唯心浄土思想成立以前の先行思想

第四章 唯心浄土思想の成立 — 永明延寿の浄土思想 — …………… 以上第 22 号

第五章 唯心浄土思想の確立 — 宋代の唯心浄土思想 — …………… 1

第一節 従来の見解と問題の所在…………… 1

第二節 唯心浄土思想の諸資料 — 『樂邦文類』の関係資料 — …………… 5

第三節 唯心浄土思想の形成過程 — 宋代までの唯心浄土思想資料集成 — …………… 14

第四節 唯心浄土思想の諸形態…………… 30

要 結 …………… 61

第六章 唯心浄土思想の継承 — 元明清代の唯心浄土思想資料 — …………… 64

結 論 …………… 89

第五章 唯心浄土思想の確立 — 宋代の唯心浄土思想 —

第一節 従来の見解と問題の所在

前号では、中国において初めて成立した唯心浄土思想について、所依の経論、先行思想、そして成立と論述した。とりわけ、唯心浄土思想の成立については、最初の提唱者とされる永明延寿(904-975)の浄土思想を可能な限り分析し考証した。その結果、確かに彼は唯心浄土思想を主張したが、しかし、彼の考えた唯心浄土は十方に周遍する諸仏浄土で、殊更、唯心の弥陀浄土を意図したものでなかった。有相の弥陀浄土は、それ以前の諸師と同様に、劣った人々の往生と説く。従って、それと関連して、従来の見解で高く評価される禅浄双修の代表的思想家、とりわけ有名な「参禅念佛四料揀」の永明延寿像も史実ではなく、後世の見解であることを論証した。そこで大きな課題が残された。それでは諸仏浄土ではなく、弥陀浄土に限った唯心浄土を主張したのは一体誰れかという課題である。さらに様々な先行思想を継承し確立した唯心浄土思想の諸形態は何かという課題も未解決である。本章では、宋代に確立した唯心浄土思想について、まず従来の見解から問題の所在を設定し、次いで関係資料を調査し整理し、そこに認められる諸形態を解明しよう。

そこで、従来の見解で知られる宋代の唯心浄土思想であるが、すでに第一章「従来の見解と問題の所在」で指摘したように、唯心浄土思想の総合的研究は未だ認められず、比較的多くの資料を提示しているのは『望月仏教大辞典』の「唯心浄土」「己心弥陀」の項目と柏原祐義「唯心浄土説の考察」であった⁽¹⁾。その中、永明延寿並びに彼以前の資料はすでに先行思想として考証したから、それ以降の資料を改めて調べよう。それによって、宋代以降の唯心浄土思想の全体的特徴とまた新たな問題の所在が見出せよう。

従来の見解で指摘された宋代以降の諸資料(抄出)

○「唯心浄土」『望月仏教大辞典』

『往生浄土決疑行願二門』遵式述(大正 47・146 上)

今は但だ直に疑情を決して、浄土の百宝荘嚴と九品の因果は並に衆生介爾の心中に在りて理性具足し……。是れ則ち十方を旁羅するも当念を離れず、法界に往来するも正しく唯心に協ふなり。

『観無量寿仏経疏妙宗鈔』第一、知礼述(大正 37・195 中)

此の観門及び般舟三昧の若きは、彼の安養依正の境に託し、微妙の観を用て専ら弥陀に就いて眞仏の体を顕す。彼の境に託すと雖も、須らく依正は同じく一心に居るを知るべし。……能造の因縁及び所造の法は皆悉く当処全く是れ心性なり。

『観無量寿仏経義疏』卷上、元照述(大正 37・280 中)

即ち知る、浄穢の身土は悉く是れ衆生の自心なることを。……

嗟、今の末学は唯心に達せず、但だ点霊を認めて便ち浄土と為し、自ら謂ふ心浄ければ土浄し、他求を仮らず……。弥陀を指して外物と為し、極楽を貶して他邦と為す。故に慈雲云はく、……釈して曰はく、子は心土の義を善くせず……。

「唯心浄土文」守訥(『樂邦文類』卷四、大正 47・208 上)

天衣懷禪師……学者に問うて曰はく、若し穢を捨てて浄を取り、此を厭うて彼を忻ふと言はば……乃ち是れ衆生の妄想なり……。復た自答して曰はく、生は則ち決定して生じ、去は則ち実去らずと。若し此の旨を明めば則ち唯心の浄土昭然として疑ひなけん。

又樂邦文類第五、廬山蓮宗宝鑑第一、第三、浄土或問……等に出づ。

○「己心弥陀」『望月仏教大辞典』

『観無量寿仏経疏妙宗鈔』第一、知礼述(大正 37・197 下)

大乘の行人、我が一心に諸仏の性を具すと知り、境に託して観を修せば、仏相乃ち彰はる。……心を全うして是れ仏、仏を全して是れ心なり。

又……観無量寿仏経疏妙宗鈔第四、観無量寿仏経融心解、浄土境観要門、楞伽经文句第五、廬山蓮宗宝鑑第十、浄土或問……等に出づ。

○柏原祐義「唯心浄土説の考察」『宗学研究』第 20・21 合併号(『親鸞大系』思想篇第一卷)

「唯心浄土説」道琛(『樂邦文類』卷四、大正 47・207 上)

或答、事理有異、約事須当往生、拠理即心而。

『観経妙宗鈔』卷一，知礼述(大正 37・201 上)

己界及法界，衆生界同等，己界即心法，法界即仏法，仏以法界而為体故，対衆生界即成三法，心生在因，仏法在果，三無差別故，云一界無別界。

『往生浄土決疑行願二門』遵式述(大正 47・145 下)

十方浄穢，卷懐同在於刹那，一念色心，羅列遍収於法界，並天真本具，非縁起新成，一念既然，一塵亦爾，故能一一塵中一切刹，一一心中一切心，一一心塵復互周，重々無盡無障礙。

その他，「唯心浄土文」守訥(『樂邦文類』卷四，大正 47・207 下)，『妙宗鈔』卷三，知礼述(大正 37・210 中)，『龍舒浄土文』卷一，王日休撰(大正 47・255 下)，「西資鈔揀資示偏讚西方」智円(『樂邦文類』四，大正 47・201 中)，『阿弥陀経要解』智旭(大正 37・371 下)等を指摘。

以上が従来の見解で指摘された宋代以降の主な唯心浄土思想資料である。

その数は極めて少ないが，これらの諸資料に限ってみても，われわれはそこにまた宋代以降の唯心浄土思想の特徴と新たな問題の所在を見出すことができる。

第一に，唯心浄土思想の総合的成果を意図した本稿第一章「従来の見解と問題の所在」の課題が本章でも妥当することである。すなわち，「唯心浄土」「己心弥陀」の用語の有無，弥陀と諸仏並びに弥陀浄土と諸仏浄土の峻別，先行思想と唯心弥陀浄土思想の明確化，そして新たな資料の調査と歴史に沿った諸資料の整理などである。上述の例文・参考資料は内容的に唯心浄土思想であるという前提で抄出されているだけで，なお，こうした課題に注意されていない。われわれは新たな関係資料を含めてこれらの課題を本章でも問題の所在としよう。

第二に，ここでは宋代以降の例文，参考資料を抄出したが，著者・書名を列記すると，例文では知礼『観無量寿仏経疏妙宗鈔』(三文)，遵式『往生浄土決疑行願二門』(二文)，元照『観無量寿仏経義疏』，守訥「唯心浄土文」，道琛「唯心浄土説」(二文)，参考資料では知礼『観経疏妙宗鈔』，『観経融心解』，智円「西資鈔」，王日休『龍舒浄土文』，宗暁『樂邦文類』，普度『廬山蓮宗宝鑑』，懐則『浄土境観要門』，惟則『浄土或門』，智旭『阿弥陀経要解』などである。われわれはこれらの資料によって，唯心浄土思想の関係資料は宋代に圧倒的に多いことを知る。とくに例文はすべて宋代の出典である。また参考資料をみても元明代は四書にすぎず，清代の資料は全く指摘されていない。われわれは，漠然とではあるが，本稿で宋代を唯心浄土思想の確立とし，元代以降をその継承と考えたが，そのことは必ずしも不当でなかったようである。

第三に，宋代の資料に限って見れば，知礼『観経疏妙宗鈔』，遵式『往生浄土決疑行願二門』，宗暁『樂邦文類』所収資料に集約されている。四明知礼(960-1028)，慈雲遵式(964-1032)は趙宋天台を代表する思想家であり，『樂邦文類』は天台僧宗暁の編纂(1200 年)である。このことは唯心浄土思想は趙宋天台を中心として確立したことを示唆する。もとより，諸宗の中で発展した宋代の融合的浄土教では，すでに指摘された律の元照・禅の守訥だけでなく，後に新たに認められるように諸宗にわたって唯心浄土思想家は輩出するが，その中でも天台浄土教が主流であることをここでは暗示している。従って，前号の考証で理解した第四章「唯心浄土思想の成立—永明延寿の浄土思想—」とは別の系統として，天台浄土教の先行思想，とくに『天台観経疏』『浄土十疑論』の展開であったことを改めて思い知らされる。宋代における唯心浄土思想の確立は成立の立役者永明延寿からの継承・発

展ではなく、天台浄土教からの発展であった。この正否はすべての資料を考証した後に自ずから明らかになる。

第四に、われわれは従来の見解から、宋代の唯心浄土思想の中心は天台浄土教にあり、とくに思想的には知礼・遵式に、資料的には『樂邦文類』所収資料にあることを知ったが、唯心浄土思想の総合的成果を意図する本稿では、知礼・遵式に限って詳述する余裕はない。両師の著述は多く、一書だけで独立した研究成果が認められるほどである⁽²⁾。そこで本章では、とくに知礼・遵式に注意しながら、当時の浄土思想資料を精選し網羅した『樂邦文類』の唯心浄土思想を調べることから始めよう。そこには今日散佚した貴重な資料が認められるだけでなく、宋代を中心としながらも、それ以前の先行思想も一部認められるからである。それを整理することによって、われわれは未だ明らかでない唯心浄土思想の歴史的形成過程をある程度描き出せるかも知れない。

第五に、上述の例文、参考資料に初めて「唯心浄土」の用語が明記されている。守訥「唯心浄土文」、道琛「唯心浄土説」である。いずれも『樂邦文類』所収であるから、その内容は唯心弥陀浄土と考えてよい。これは画期的な展開である。永明延寿の提唱した唯心浄土は十方に周遍する浄土、すなわち諸仏浄土で、殊更弥陀浄土を明示したわけではなかった。ここでの唯心浄土は明らかに弥陀浄土を意味している。それでは、彼等が最初の唯心弥陀浄土思想家であろうか。それはすべての資料を調査し整理した後に自ずから明らかになる。それと関連して、ここでも「己心弥陀」の用語は一つも認められない。結論を先取りして言えば、本稿では「己心弥陀」の用語は未だ見出していない。ここで連記される用語は「本性弥陀」あるいは「自性弥陀」である。「己心弥陀」の用語はどうも日本浄土教の造語で、中国には無かったようである。唯心浄土思想の展開はさらなる課題をわれわれに要求している。いずれにせよ、「唯心浄土」の用語を明記する『樂邦文類』の調査は全く新たな諸形態を提供してくれそうである。

以上の諸点は、従来の見解から知られた宋代浄土教に限った唯心浄土思想の特徴と問題の所在であるが、それによって本章論述の方法は自ずから次のように定められる。

まず次節「唯心浄土思想の諸資料」では従来の見解で指摘された資料以外の、おそらく遥かに多い新たな資料を調査しなければならない。その場合、「唯心浄土」「本性弥陀(あるいは自性弥陀)」を明記する資料とそれ以外の同じ意味の資料、唯心弥陀と唯心諸仏あるいは唯心弥陀浄土と唯心諸仏浄土、さらには先行思想と唯心浄土思想を注意深く判別する。資料的には、知礼・遵式を考慮しながら、とくに浄土教資料を集成した『樂邦文類』を精査することである。それによって、おそらく宋代浄土教における唯心浄土思想の関係資料は概ね把握できるであろう。

次いで、第三節「唯心浄土思想の形成過程」では、前節で知った関係資料から必然的に要求される諸師の現存資料を加味し、これら関係資料を先後関係、影響関係に気をつけて、可能な限り年代別系統別に分類し整理しよう。われわれはそれを辿ることによって、宋代に確立した唯心浄土思想の形成過程を容易に知るだけでなく、前号までの考察の是非も判定できよう。

以上が、資料研究であるとするれば、次いでなさねばならないことは第四節「唯心浄土思想の諸形態」である。そこで、初めに本稿執筆の原点に立ち帰って、中国浄土教における唯心浄土思想の意義を確認するために宋代浄土教全体との関係を明らかにしよう。次いで、本稿冒頭の「問題の所在」

から一貫して探り続けた「唯心浄土，本性弥陀(自性弥陀)」の定型句の有無，唯心の弥陀浄土と諸仏浄土，先行思想と唯心浄土思想等を解明する。そして最後に，具体的な思想形態とその依って立つ思想基盤，それによって新たに知られた諸問題を明らかにする。

以上の作業によって，宋代における唯心浄土思想の全貌は自ずから明らかになると思われる。それは本章「唯心浄土思想の確立」とどまらず，本稿全体で意図した総合的成果の最後の集大成にもなることを予感させる。

- (1) 前号第一章「従来の見解と問題の所在」『札幌大谷短期大学紀要』第22号，5-6頁。

本稿執筆中に宋代の唯心浄土思想を扱った次の論文が発表された。

柏倉明裕「趙宋時代の浄土観」(レジュメ)『宗教研究』第295号(平成5年3月)。

同 「趙宋時代の浄土観」『真宗教学研究』第17号(平成6年2月)。

福島光哉「趙宋天台における唯心浄土論」『日本仏教学会年報』第58号(平成5年5月)。

柏倉論文2点は宋代までの主な浄土観の展開を概観し，延寿・知礼・遵式・智円・元照の唯心浄土思想の要点を指摘する。福島論文は智顛仮託『天台観経疏』『浄土十疑論』から知礼・遵式に論及した後に，主に楊傑と陳瑾の唯心浄土思想を論述する。いずれも著名な唯心浄土思想家の解明で参考となる。就中，柏倉論文は本稿と同じく唯心浄土思想の総合的成果を意図しているから従来の見解として紹介すべきであるが，著名な唯心浄土思想家に限定という点で資料的に従来の見解の延長線上にあり，註記にとどめる。本稿で意図する総合的成果とは未だ指摘されない関係資料を含めた唯心浄土思想の解明という意味で，従来の見解とやや異なる。このことは次節以降の関係資料で立証する。

なお，宋代の唯心浄土思想に関連する浄土教関係研究成果としては，

望月信亨『中国浄土教理史』342-410，429頁。

高雄義堅『中国仏教史論』162-188頁。

安藤俊雄『天台思想史』175-177，217-219，334-336頁。

同 『観無量寿経疏妙宗鈔概論』(真宗大谷派安居講本，後に『天台学論集』に収録)12-24，80-89，119-122頁。

山口光円『天台浄土教史』135-196頁。

中山正晃「趙宋天台と浄土教」『龍谷史壇』第56・57合併号。

同 「趙宋天台と浄土教(続)」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』第7集。

同 「趙宋天台と浄土教—その実践面について—」『印仏研』第34巻第1号。

日置孝彦「靈芝元照の浄土教思想」『印仏研』第24巻第2号。

同 「楊傑の禅浄融合に関する一考察」『印仏研』第25巻第2号。

同 「長蘆宗蹟にみられる念仏の理解」『印仏研』第26巻第2号。

福島光哉「四明知礼の浄土教」『大谷大学真宗学総合研究班研究紀要』第3号。

同 「慈雲遵式の浄土思想」『大谷学報』第70巻第3号。

同 「天台浄土教の二つの側面—知礼と遵式の念仏三昧をめぐって—」『仏教学セミナー』第54号。

柏倉明裕「四明知礼と慈雲遵式」『印仏研』第40巻第1号などがある。

- (2) たとえば，安藤俊雄『観無量寿経疏妙宗鈔概論』，駒沢大学天台典籍研究班(研究代表者池田魯参)『四明尊者教行録の研究』など。

第二節 唯心浄土思想の諸資料—『樂邦文類』の関係資料—

前節で知ったように，従来の見解では唯心浄土思想の諸資料は知礼『観経疏妙宗鈔』，遵式『往生浄土決疑行願二門』と『樂邦文類』所収資料に集中していた。その中，総合的成果を意図する本稿では，当時考えられる限りの浄土教資料を意図的に収録した『樂邦文類』を中心に考証することとし

た。そこに従来の見解以上の関係資料が見出されると予測したからである。

初めに『樂邦文類』の資料的思想的価値について簡単に確認し、この判断の正当性を明らかにしておく。

今日、中国浄土教研究の関係資料は約 300 部ほど指摘されている⁽¹⁾ その中でも宗暁が主に廬山と天台の宗風を再興しようと、苦心惨憺して関係資料を蒐集した『樂邦文類』5 卷(1200 年)は中国浄土教における唯一の資料集と言えるものであるが、資料集ゆえに資料の羅列として従来あまり評価されていない⁽²⁾ しかし、本書は資料集ゆえに客観性が保証され、高く評価すべきものである。本書の特色並びに中国浄土教史における意義について要点を挙げれば、第一に浄土教所依の経論を 34 部査定した点がある。第二に中国浄土教の系譜を蓮社始祖慧遠から継祖五師と定めた。第三に唯心浄土思想の確立である。これはそれまでの多種多様な浄土教を経論・人師・思想の立場から一本の太い線で繋ぎ、まとめている点で、それ以前の資料には無かった大きな特色である。さらに本書は宋代以降から清代に及ぶ浄土教に大きな影響を与える起点となった点で思想史的意義は極めて大きい。こうした本書の思想史的意義と前二点の特色については別に論考したが⁽³⁾ 本節は本書の特色の第三「唯心浄土思想の確立」を資料的思想的に立証しようとするのである。

以上は中国浄土教における『樂邦文類』の特色と意義の要点であるが、本書をさらに大きくインド並びに日本浄土教と比較すれば、インド→中国→日本浄土教の展開と相違が鮮やかに描き出される。インド浄土教の関係経論は漢訳では 290 部であり⁽⁴⁾ 浄土教の系譜はない。インドに唯心浄土思想が無かったことは第二章で論証したとおりである。日本では、本書(1200 年)と全く同時代に著された『選択本願念仏集』法然(1198 年)とは実に対照的である。『選択集』では、浄土三部経、善導流浄土五祖、(善導流の)指方立相論であり、本書は浄土経論 34 部、蓮社始祖継祖六師、唯心浄土思想である。それゆえ、本書はインドとも日本とも異なる中国浄土教独自の様相を見事なまでに示している⁽⁵⁾

当面、唯心浄土思想の確立に関しては、以下に指摘する豊富な資料がそれを雄弁に立証するであろう。

本書は編纂者宗暁が始めから唯心浄土思想を念頭に恣意的意図的に関係資料を収録したのではなく、あくまでも当時の重要な樂邦の文類を公正に収録し⁽⁶⁾ そのうち幾つかの資料には別な論疏、自註まで附して文類の正当性を期している。そして彼は廬山と天台浄土教の再興を意図した。このことは唯心浄土思想の確立を意図しなかったという点でマイナスにはなるが、見方を変えればむしろ唯心浄土思想資料としては客観性が保障されていることになろう。

以上によって、『樂邦文類』の価値と資料の客観性は保証されよう。

それでは、『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想関係資料は如何程あり、その思想内容は何であろうか。

そこで、その全貌を判り易く把握するために、前の課題に留意しながら、まず『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想を端的に示す関係文を附載論疏、宗暁自註を含めて記載順に列記しよう。このことは『樂邦文類』全体における関係資料の位置づけを正確に理解し、唯心浄土思想の過大視または過小視を防ぐためでもある。

なお、本書に先行する文類として『龍舒浄土文』10巻(後に12巻)王日休撰があり、⁷⁾ 本書撰集の4年後にその他の遺文を集録した宗暁自身の『樂邦遺稿』2巻がある。両書にも唯心浄土思想が散見されるので、多く重複するが参考として挙げておこう。それは、両書に王日休と宗暁自身の唯心浄土思想が認められることによるが、一書に限定されない資料の客観性と正しい解説、加えて少しでも総合的成果を意図するからである。

『龍舒浄土文』に認められる唯心浄土思想 5文(大正蔵第47巻)

※ 「龍舒浄土文序」呂師説(1316年, 251中)

本性弥陀唯心浄土。

「龍舒浄土文序」張孝祥(1161年, 251下)

阿弥陀仏即汝性是, 極樂国土即汝心是。

卷一 「浄土起信」五(255下-256上。『樂邦遺稿』巻下, 243上)

参禪者云, 惟心浄土……, 自性阿弥……。自性阿弥者, 固不妄矣。

唯心浄土而無復更有浄土, 自性阿弥不必更見阿弥者, 非也。

唯心浄土者誠不易到也。……自性阿弥者誠不易到也。……唯心浄土自性阿弥者……修未到者誤人多矣。

巻十(此巻後附)「(龍舒浄土文)跋」宗杲(1160年, 283中。『樂邦文類』巻二, 172下)

若見自性之阿弥, 即了唯心之浄土。

巻十一 「眞州長蘆蹟禪師勸参禪人兼修浄土」(1089年?, 284中, 『樂邦文類』巻二, 178上)

然則唯心浄土自性阿弥, 蓋解脱之要門, 修業之捷徑。

(附録)巻十二 「又二」(288上。「無量寿仏讚 元照」『樂邦文類』巻二, 180中)

八万四千之妙相, 得非本性弥陀。十万億刹之遐方, 的是唯心浄土。

『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想(大正蔵第47巻)

※ 「樂邦文類序」嚴納(148上中)

吾心中之阿弥陀仏……。吾心之勝土為樂邦。

「樂邦文類序」汪大猷(1200年, 148下)

是心作仏, 是心是仏……。若因是而論, 則弥陀果覺即我性是, 極樂遐方即我心是。

巻一 「大蔵專談浄土經論」4經(総引文数, 經凡46処[実数45])

『觀無量寿經』第八像觀約心觀仏(154上-下)

是心作仏, 是心是仏。

觀經疏, 妙宗, 融心解。

『般舟經』修仏立三昧專念弥陀(157下-158下)

心作仏, 心自見, 心是仏。

止觀, 軸行, 融心解。

『方等大集經』修仏立三昧中道觀法(158下)

我心作仏，我心是仏。

此經与前般舟經，同本異訳。

『華嚴經』解脫長者得唯心念仏門(159 上)

我若欲見安樂世界無量寿如来，随意即見。……所見諸仏，皆由自心。

貞元疏。

卷二 「序跋」11 家(32 家)

「阿弥陀經疏序」孤山法師智円(166 下)

雖宝楼金池，為悦目之翫，而非惑蕩之色，而能達唯心無境矣。

「觀無量寿仏經序」慈覚禪師宗蹟(167 上)

夫正遍知海，從心想生。諸仏世界，随心浄土。

「華嚴念仏三昧無盡燈序」円澄法師義和(1165 年，169 下)

諸仏心内衆生，新新作仏，衆生心中諸仏，念念証眞。

「天台浄土十疑論序」提刑楊傑(1076 年，171 上)

諸仏心内衆生，塵塵極樂，衆生心中浄土，念念弥陀。

「直指浄土決疑集序」提刑楊傑(1084 年，172 上)

唯心浄土，自性弥陀，大光明中，決無魔事。

「龍舒浄土文序」状元張孝祥(1161 年，172 中，前出『龍舒浄土文』)

阿弥陀仏，即汝性是。極樂国土，即汝心是。

「龍舒浄土文跋」大慧禪師宗杲(1160 年，172 下，前出『龍舒浄土文』)

若見自性之弥陀，即了唯心之浄土。

「浄土宝珠集序」侍郎王古(1084 年，173 上)

弥陀心内衆生，新新摂化，衆生心中浄土，念念往生。……念本性之無量光，本来無念。生唯心之安養国，眞実無生。

「四十八願後序」慧覚法師斎玉(173 中)

苟能即心浄土，本性弥陀，生則随念往生，去則実無所去。

「明師勝地論跋」独醒居士林鏞(174 中)

如妙喜云，見自性之弥陀，即了唯心之浄土。

「刊往生行願略伝序」鎧菴居士呉克己(175 下)

不生安養，則無以證我心本具妙法。

「文」1 家(13 家)

「蓮華勝会録文」慈覚禪師宗蹟(1089 年，177 中-178 上)

然則，唯心浄土，自性弥陀，蓋解脫之要門，乃修行之捷徑。

「讚」3 首(17 首)

「無量寿仏讚」大智律師元照(180 中。前出『龍舒浄土文』)

八万四千之妙相，得非本性之弥陀。十万億刹之遐方，的是唯心之浄土。

「安樂国讚三十章章四句」提刑楊傑(180 下-181 中)

浄土周沙界 …… 無生即是生 …… 心浄即土浄 …… 刹刹見如来

「臨行自餞」樞菴法師有嚴(182 上)

(宗曉註)嗚呼，唯心本性 人人皆具焉。

卷三 「記碑」5 首(19 首)

「建弥陀宝閣記」提刑楊傑(1086 年，184 下-185 上)

觀一切相為非相，則能見弥陀之全体。

「開元寺三聖立像記」大智律師元照(186 下-187 上)

經曰，諸仏如来是法界身……。今刻木為像……，不知其可乎。

对曰，……則山河国土草木微塵……莫非諸仏法身之体。……理事一如，眞俗不二。

「靈山安養菴記」給事程俱(1106 年，187 下-188 上)

時北山中一居士，……与安養界在一切处……。

(宗曉自註)維摩經曰，……随其心浄，則浄仏土……。

「澄江浄土道場記」法眞禪師守一(189 上)

全体現前，衆相具足，是心即仏，補処何疑。

「宝積蓮社畫壁記」司封鍾離松(1173 年，189 中)

知有自性弥陀，唯心安養。

「伝」2 伝(4 伝)

「大宋光州王司士伝」(1089 年，楊傑記，195 下-196 上)

祖師則云，心即是浄土，不用更求生西方……。答曰，……此以理奪事也。

「大宋龍舒居士王虚中伝」(196 下)

噫，自非了唯心本性之道，達生死变化之数，不臻于是。

卷四 「雜文」15 首(33 首，実数 34)

「觀經疏明四土宗致」天台智者大師(198 中)

此經以心觀浄……。

四明妙宗釈曰，……今觀浄土，須求於心，心能具故，心能造故。

「万善同帰集揀示西方六重問答」智覚禪師延寿(198 下-200 上，第四章既出)

唯心浄土，周遍十方……。故知，識心方生唯心浄土。

「寂照集揀西方要義」此文不知何師作文。見直指決疑集(201 上)

問，六祖壇經云，凡愚不了自性，不識身中西方…。答，仏説法有隱顯，教有權実，人根有利鈍。

「西資鈔揀示偏讚西方」孤山法師智円(201 中)

豈知十方空界，悉我自心，心浄則十万非遥。

「復楊文公請住世書」四明法師知礼(202 下-203 上)

求往唯心之浄土，願見本性之弥陀……。但知浄土唯心……。

「往生浄土決疑門」慈雲懺主遵式(204 中下)

令知浄土百宝莊嚴，九品因果，並在衆生介爾心中。……不離当念，往生法界，正協唯心。

「義学編論席解紛」浄覚法師仁岳(205 上)

復有説云，吾滅度後，十方世界，皆是我身，何必定生西方極樂。……大妄語罪，其誰当之。

「浄土修因或对」樞菴法師有嚴(205 下-206 上)

夫生浄土者，必須修無生妙觀。……所云無生妙觀……乃上根得生之一門耳。

「唯心浄土説」円弁法師道琛(207 上-下)

或問，唯心浄土，本性弥陀……。何故經云，過十万億仏土耶。……。今議曰，……故云，唯心浄土，本性弥陀也。……若了唯心本性，只一三千融妙之法，十万遐方皆不為礙。

「唯心浄土文」姑蘇禪師守訥(207 下-208 上)

生仏同体，弥陀全是於自心。……則唯心浄土，昭然無疑。

「勸修西方説」解空法師可觀(208 中)

世伝六祖壇經……何覓西方……。噫，如此鄙俚一笑可也。……達唯心了本性，在我而已。去此不遠。

「浄土自信録記」無功叟王闡(209 下)

浄土自他，凡聖因果，即衆生之自心耳。

「念仏修心術」山堂法師彦倫(211 中下)

定謂即心觀仏，想彼西方依正主伴，唯心本具。……故經云，……是心作仏，是心是仏。

「念仏方便文」司諫江公望(212 中下)

肉団心現本性弥陀，五濁身遊唯心浄刹……。所謂，是心作仏，是心見仏，是心是仏。

「慶懺礼仏会疏」草菴法師道因(213 下)

弥陀依衆生心而発現……。応外無機，即衆生心中之諸仏，機外世応，乃諸仏心中之衆生。

卷五 「賦銘」1 賦(実数3)

「神棲安養賦」智覚禪師延寿(215 上)

觀境而皆從心出。

「偈」2 家(6 家)

「依修多羅立往生正信偈」慈雲懺主遵式(216 中下)

浄土在心，何須外覓……。釈曰，子又不善心土之義也。

「讚喻弥陀偈」左朝議大夫丁注(217 中)

心浄土浄 …… 一念不起滅 極樂即現前 大千同此境

「頌」8 家(20 家)

「十六觀經頌」慈雲懺主遵式(217 下)

諸仏如来法界身 遍入衆生一切想 智者当觀此想心 是心即仏菩薩像

「十六觀頌」樞菴法師有嚴(218 中)

若能了得唯心境 雖在西方路不遥

「勸念仏頌」慈覚禪師宗蹟(219 中)

極樂不離眞法界 弥陀即是自心王

「西方浄土頌」同前(219 下)

莫謂西方遠 西方在目前 …… 万境了唯心

「勸念仏頌」慈受禪師懷深(220 上)

欲知自性弥陀仏 在汝朝昏一念中

「示陳行婆頌」慈弁法師從諫(220 中)

念念弥陀勿外求

「念仏必要頌并序」草菴法師道因(220 中下)

阿弥陀仏是法界身。…… 我与弥陀本不二

「雕弥陀香像頌」解空法師可觀(220 下)

白玉明毫唯我心 紫金光相即我性

「詩」3 家(22 家)

「十六觀近体詩」沙門冲默(222 中)

重重宝珠非他物 一一珠光出自心 …… 要知相好從何起 直指心源有路衝

「懷安養故郷詩并序」檀菴法師有嚴(223 中)

余以安養為故郷，乃即心淨土。

「懷西方詩」北山法師可旻(223 下)

本性唯心豈不知

「詞」2 家(7 家)

「追和涑明婦去来辞」拙庵宗師戒度(226 中)

衆妙之門，唯心本具，眞性常存。

「讚淨土漁家傲并序」北山法師可旻(226 下)

本性弥陀随体现 唯心淨土何曾遠

以上の概数 序 1 点，「經典」4 部(総引文数 45)，「序跋」11 点(32)，「文」1 文(13)，「讚」3 首(17)，
「記碑」5 首(19)，「伝」2 人(14)，「雜文」15 文(34)，「賦銘」1 賦(3)，「偈」2 偈(6)，
「頌」8 頌(20)，「詩」3 篇(22)，「詞」2 首(7)。合計 58 文(232 文。ただし、呪 10・論書
6 を含めた総引文数は 248 文)。

『樂邦遺稿』に認められる唯心淨土思想 7 文(大正藏第 47 卷)

卷上 「陳了翁談唯心淨土」(234 上中)

唯心淨土之義曰，……念外無一毫法可得，法外無一毫念可得。

「念仏成就三力則易超往」(239 下)

会宗云，……今為説三種之力……。一者，衆生本具仏性力，衆生本心自具仏性，与阿弥陀等無有異。

「弁心淨則国土淨」(240 中)

禪宗不修淨業者云，……淨土唯心，……何用別求生処。……其自欺之甚也。

卷下 「海慧禪師示心淨土淨」(241 上)

海慧禪師……曰，經云，欲得淨土，当淨其心……。若心清淨，所在之處皆為淨土。

「円弁法師説唯心浄土」(241 中)

唯心浄土一而已矣。良由弥陀悟我心之宝刹，我心具弥陀之樂邦。

「解空法師弥陀尊像讚」(241 中)

紫金光聚 白玉明毫 唯心本性

「論唯心浄土有理有跡」(243 上。前出『龍舒浄土文』)

龍舒曰，世有專於參禪者云，唯心浄土，豈復有浄土……。此言似之而非也。

以上が、『龍舒浄土文』『樂邦文類』『樂邦遺稿』に認められる唯心思想を端的に示す関係文である。われわれは、これらの関係文を考証するだけでも、宋代の唯心浄土思想をある程度理解することができる。しかし、総合的成果を意図する本稿ではそれに止まることを許さない。このことは問題の所在で課した。

さらなる課題はひとまず次節にゆずり、本節では『龍舒浄土文』5 文、『樂邦遺稿』7 文は数も少なく、多く重複するから暫く措いて、『樂邦文類』に限った概要を確認し、それに伴う留意点を付言するに止める。

そこで概要であるが、『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想関係文は総数 58 文である。『樂邦文類』の総引文数は 248 文、ただし、唯心浄土思想の先行思想にならない呪 10 種、論書 6 部⁹⁾ 計 16 文を引くと、総引文数は 232 文である。従って、唯心浄土思想関係文 58 文と総引文数 232 文の割合は丁度 1/4 である。

これを多いと考えるか、少ないと考えるかは評価の別れるところであろう。

前号の永明延寿までに至る先行資料に較べれば、それまでに認められない「唯心浄土、本性弥陀(あるいは自性弥陀)」を明記する資料を含めた関係文 58 文は桁違いに多いから、宋代を唯心浄土思想の確立と規定したことは誤りでない。前代までの膨大な資料の中からの僅かな関係文に較べて、一書でこれだけの抽出は実に容易で、次々と関係文が現れる状況は多いと実感せざるをえない。

しかし、『樂邦文類』総引文数 232 文に較べると 1/4 の割合は決して多いとは言えない。それ以外の遥かに多い 174 文には唯心浄土思想は認められないのである。おそらくそこには西方浄土往生を含めた様々な思想が述べられていることは想像に難くない。われわれは、経論に説かれる阿弥陀仏とその浄土[極楽]は、『觀経』「是心作仏、是心是仏」の一文を除いて、ことごとく有相の西方浄土であることをすでに前号第二章「経論に説かれる弥陀浄土思想と唯心浄土思想」で痛いほど知っている。そして、中国諸師は経論を絶対の真理として自らの思想を確立するから、浄土経論に依る限り、唯心浄土思想を主張することのありえないことも前号で辿った通りである。このことに気づけば、『樂邦文類』総引文数 232 文中の多くは有相弥陀、西方浄土で、それに較べて唯心浄土思想関係 58 文は多いと言えない。

そこで、とくに付言したい留意点の第一は、従来の見解の中には宋代浄土教は唯心浄土思想が主流で、あたかもそれだけが浄土教であるかのように説く論考もあるが、資料的に見るならばそれ以外の西方浄土往生思想や念仏結社など様々な形態の多いことを忘れてはならない⁹⁾ すでに見たように『樂邦文類』に限っても、知礼・遵式に代表される錚々たる天台思想家、宗蹟・宗杲等の傑出した

禪師たち、さらには王日休・鍾離松等の居士たちは唯心浄土思想を主張した。確かに彼等は宋代仏教を代表する思想家であり指導者であるから、あたかも唯心浄土思想だけを宋代浄土教と錯覚しがちであるが、関係文以外の個所では彼等自身が念仏者であり、西方浄土往生人である。ましてや関係文以外の諸師の資料は西方浄土思想が多い。この端的な例証を一つだけ挙げれば、宋代浄土教の特徴の一つである戒珠・王古・陸師寿などの往生伝類である⁽¹⁰⁾そこでは、すでに知った唯心浄土思想家を含めてすべて西方浄土の往生人で、唯心浄土思想の言及は殆んど認められない⁽¹¹⁾宋代浄土教は唯心浄土思想と西方浄土思想が多くは融合し混在し、極く一部に相互批判した形態と言うのが最も正しい理解と思われる。その幾つかの事例は後に明らかになろう。

『樂邦文類』関係資料についての留意点の第二は、文類自身が有する「会通」である。われわれは「樂邦の文類」という題名から、ここに収録の引文をことごとく無前提に浄土資料と確信するが、しかし、これらの資料の一部は撰者宗暁が浄土思想と会通した抄出文であって、原意は弥陀浄土でない資料も予想される。このことはかつて「専談浄土経論」(『樂邦文類』巻一)について指摘したが⁽¹²⁾その中には阿弥陀仏・極楽を説かない『文殊般若経』『大集日蔵経』などの経文が浄土思想として収録されている。本節の関係資料でも一読して気づくのは、

「華嚴念仏三昧無盡燈序」円澄法師義和

諸仏心内衆生，新新作仏，衆生心中諸仏，念念証真。

「臨行自餞」檀菴法師有嚴

(宗暁註)嗚呼，唯心本性，人人皆具焉。

「万善同帰集揀示西方六重問答」智覚禪師延寿

唯心浄土，周遍十方……。故知，識心方生唯心浄土。

などである。もとより、その抄出全文から判断しなければならないが、浄土経典に会通がある以上、関係文もこの点を留意しなければならない。この点の本稿で殊の外重要なのは、すでに前号で知った典拠の経論・先行思想が、『観経』「是心是仏」を除いて、ことごとく唯心の諸仏思想・諸仏浄土思想であり、それが弥陀浄土思想に転用されたという成立過程にも深く係わるからである。諸仏と弥陀、諸仏浄土と弥陀浄土の峻別は当初からの大きな課題であった。この峻別は後の思想形態解明の折に再び取り挙げよう。

われわれは、唯心浄土思想資料を性急に探究するあまり、約60点ほどの関係文を一度に見出しただけで、ついそれを過大視したくなるが、宋代浄土教自体はそれだけでないこと、『樂邦文類』自身が有する「会通」という制約を看過してはならない。本節では『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想が具体的にどう記述されているかを知るに止めよう。それだけでも、従来指摘されない新たな資料が多く認められたし、中国浄土教唯一の資料集『樂邦文類』の評価も確認できた。そして、唯心浄土思想の確立が宋代であることも資料的に立証できたと思われる。

- (1) たとえば、佐々木月樵『支那浄土教史』付録「支那歴代浄土教籍略表」、望月信亨『中国浄土教理史』「索引」参照。
- (2) 本書の資料は中国浄土教研究でしばしば引用されるにもかかわらず、単なる資料集として扱われ、本書の全体的解説は林五邦『樂邦文類解題』『国訳一切経』諸宗部七(1-18頁)があるにすぎない。そこでも一部低く評価されている(同解題、7, 8, 13頁)。なお、野上俊静『樂邦文類』の序について、『中国浄土教史論』参照。

- (3) 拙稿『樂邦文類』の浄土思想史的意義』『印仏研』第 37 巻第 1 号。
同「中国浄土教所依の経論序説」『札幌大谷短期大学紀要』第 24 号。
同「中国浄土教の系譜」『印度哲学仏教学』第 1 号。
- (4) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』141-161 頁。
- (5) 拙稿「宋代的浄土思想」(楊曾文訳)『世界宗教研究』1992-2。
- (6) 安藤俊雄『天台思想史』218 頁。
- (7) 岩井大慧『日支仏教史論改』337 頁。
小笠原宣秀「宋代の居士王日休と浄土教」『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』。
林田康順「王日休『龍舒浄土文』の研究(一)」『印仏研』第 41 巻第 1 号。
同「」(二)『宗教研究』第 295 号。
- (8) 前号第二章第三節「唯心浄土思想の典拠」(22-23 頁)では、「以一切法皆従心起妄念而生，一切分別即分別自心」『大乘起信論』(大正 32・577 中)を挙げたが，宗暁の引用は有名なく修行信心分・不退方便(大正 32・583 上，大正 47・164 中)で唯心浄土思想ではないので関係文としない。
- (9) たとえば，高雄義堅師(『中国仏教史論』152-162 頁)は宋代浄土教の社会的現象を「数量念仏の思想，念仏結社の隆興，九品図と十六観堂，往生伝の続出，浄土教の独立運動」と論考されるが，その幾つかが唯心浄土思想に相応しないことは明らかであろう。
- (10) 小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』81-153 頁。
- (11) 往生伝類に唯心浄土思想の言及が散見するのは『浄土聖賢録』(次章)で，それまでは認められない。
- (12) 拙稿「浄土教関係疑經典の研究(一)」『札幌大谷短大紀要』第 8 号，104，118-119 頁。同「中国における浄土教の発展」『講座・大乘仏教 5，浄土思想』222-223 頁。

第三節 唯心浄土思想の形成過程—宋代までの唯心浄土思想資料集成—

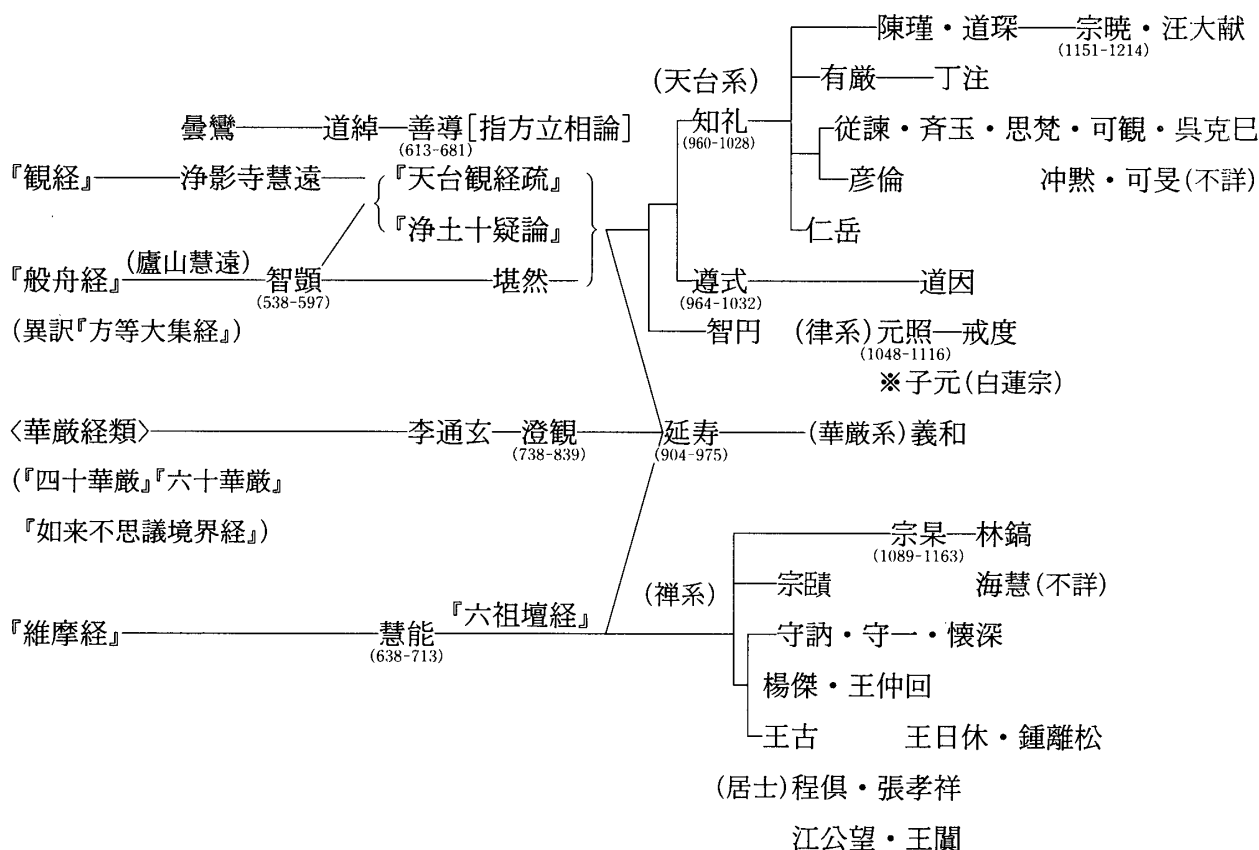
前節では『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想関係文を抄出した。総数は約 60 文ほどである。それによって，従来全く指摘されていない新たな資料が見出されたことは大きな成果であったし，唯心浄土思想の確立が宋代であることも資料的に立証できた。しかし，それはあくまでも『樂邦文類』に限った関係資料の羅列で，総合的成果に至っていない。偶々認めた新たな資料を加えたのであって，知礼・遵式・元照などの従来の見解に多少とも付随する唯心浄土思想家を見出したにすぎない。依然として，「問題の所在」の課題解明，具体的な思想形態の考証等は残されている。否，それ以前に少ないとは言え，『樂邦文類』以外の宋代現存資料の調査も果たしていない。

そこで本節では，こうした思想的研究は次節にゆずり，これまでの資料的研究の集成を試みよう。具体的には，前節で抄出した資料並びにそこで付載され引証された(従って先行思想に当たる)資料を主として，抄出資料に関連する現存資料，さらには前号で扱った先行思想資料を加えて，可能な限り年代別・系統別に分類し整理してみる。それによって，「唯心浄土思想の確立」の資料的全貌は自ずから浮き彫りになるであろう。

そこで，これまで認められ，さらに新たに認められた唯心浄土思想関係文について指摘する。本来ならその一々に著者の生涯と思想，関係文の解説等の考証を必要とするが，一師を挙げても膨大な研究になることはすでに扱った延寿，あるいは知礼・遵式・元照などの従来の研究が示すとおりである。ましてや『樂邦文類』に限っても，知礼から宗暁まで 30 余師に及び，夫々を考証する余裕はない。ここでは以下に登場する経論，諸師を中国仏教史での位置づけを誤らしめないために，ま

ず「唯心浄土思想関係一覧表」として挙げ、次に主な経典・先行思想の関係文を辿る。そして、宋代唯心浄土思想の確立では関係文は60数部に及ぶので、初めに書名・題名を一読できるように「一覧」として挙げ、次いで諸師の「唯心浄土思想関係文」をそれだけで具体的思想形態が理解できるようにやや煩雑であるが抄出する。このことは次章「唯心浄土思想の継承」の影響関係を考慮するためでもある。

唯心浄土思想関係一覧表



唯心浄土思想関係資料 (出典は現存本、『樂邦文類』等収録個所)

主な経典

『観無量寿经』第八像観約心観仏 (大正12・343上, 大正47・154上-下)

次当想仏。所以者何。諸仏如来、是法界身……是心作仏、是心是仏……。

観経疏曰、……是心作仏者、仏本は無、心浄故有。是心是仏者、向問仏本は無心浄故有、便謂條然。故言即是……。

妙宗釈曰、欲想仏身、須知観体。体是本覚、起成能観。本覚乃是諸仏法界之身……。又復弥陀与一切仏、一身一智、応用亦然、弥陀身顕、即諸仏身。諸仏相明、即弥陀体……。

融心解曰、……是心是仏者、心外無仏、仏外無心、既全是心……。

妙宗又曰、……若論作是、即不思議三観也。以若破若立名作、空仮二観也。不破不立名是、中道観也。……故知、作是一心、修此三観、乃十六観之総体、一経之妙宗。

『般舟經』修仏立三昧專念弥陀(大正 13・906 上, 大正 47・157 下-158 下)

我所念即見, 心作仏, 心自見, 心是仏……。

止観云, 常行三昧出般舟經。……我所念即見, 心作仏, 心自見心, 見仏心。是仏心, 是我心見仏……。

輔行釈曰, ……見是心性, 名心作仏。仏既心作故, 見仏時, 名見自心。若見自心, 即見仏心, 以彼仏心是我心故。

四明融心解曰……。

『方等大集經』修仏立三昧中道観法(大正 13・877 中, 大正 47・158 下)

今我, 従心見仏。我心作仏, 我心是仏, 我心是如来, 我心是我身, 我心見仏……。

此經与前般舟經, 同本異訳……。

『四十華嚴經』解脱長者得唯心念仏門(大正 10・687 下, 大正 47・159 上)

長者言, 善男子, 我若欲見安楽世界無量寿如来, 随意即見。……如是十方一切世界所有如来, 我若欲見, 随意即見……。所見諸仏, 皆由自心。

清涼貞元疏曰, ……正弁唯心, 即心無心, 便入眞如。……既了唯心, 了心即仏……。

『六十華嚴經』〈唯心偈〉(大正 9・465 下)

心如工画師 画種種五陰 一切世界中 無法而不造

如心仏亦爾 如仏衆生然 心仏及衆生 是三無差別

『如来不思議境界經』(大正 10・911 下, 『万善同帰集』大正 48・966 中下, 大正 47・198 下)

自心作仏, 離心無仏。乃至三世一切諸仏, 亦復如是, 皆無所有, 唯依自心。……諸仏及一切法皆唯心量。

『維摩經』〈心浄土浄説〉(大正 14・538 下, 『六祖壇經』大正 48・352 上)

若菩薩欲得浄土, 当浄其心。随其心浄, 則仏土浄。

先行思想(5 字下げ資料は『樂邦文類』で言及されない関係資料, 前号第三章参照)

曇鸞(576-542)

『浄土論註』(大正 40・832 上, 838 下, 841 中)

「是心是仏者, 心外無仏也」「無生之生」「二種法身」。

浄影寺慧遠(523-592)

『観經義疏』(大正 37・180 上)

諸仏法身与己同体。

吉蔵(549-623)

『観經義疏』(大正 37・244 上)

只心即是仏, 只仏即是心。

道綽(562-645)

『安楽集』(大正 47・8 下-9 上)

法性浄土……此乃無生之生。……即是心外無法。

安樂集云。生浄土者，有二種。一者有相心，謂著相忻樂。二者無相心，謂理觀相應……(有嚴「浄土修因或对」大正 47・206 上，ただし『安樂集』に相應文なし)。

善導(613-681)

『觀經疏』(指方立相論。大正 37・267 上中)

或有行者，將此一門義，作唯識法身之觀，或作自性清浄仏性觀者，其意甚錯……。

又今此觀門等，唯指方立相，住心而取境。総不明無相離念也。

懷感(年不詳)

『釈浄土群疑論』(大正 47・66 上)

案唯識之理，心外無別法，万法万相皆是自心。

(天台系)

智顛(538-597)

『摩訶止観』(大正 46・12 上-下，大正 47・158 上中)

常行三昧者……此法出般舟三昧經。……心作仏，……是仏心。

湛然(711-782)

『止観輔行』(大正 46・187 中，大正 47・158 中下)

見是心性，名心作仏。……以彼仏心是我心故，是仏心。

智顛偽撰(7世紀後半から8世紀前半)

『天台觀經疏』(大正 37・186 中，下，188 中下，192 中，大正 47・154 中，166 上中，198 中)

夫楽邦之与苦域……識由心分垢浄。

此經心觀為宗，実相為体。

今此經宗，以心觀浄則仏土浄。為經宗致。……，故以修心妙觀，能感浄土，為經宗也。

是心作仏者，仏本は無，心浄故有。……心外無仏，亦無仏之因也。

『浄土十疑論』(大正 47・78 上，155 上中)

智者……達生体不可得，即是真無生。此謂，心浄故即仏土浄。愚者……不知生者即是無生。

『五方便念仏門』(大正 47・82 中)

諸境唯心門……。心境俱離門……。

(禪宗系)

道信(580-651)

『楞伽師資記』(大正 85・1287 下，1288 上)

若知心本来不生不滅，……即是浄仏国土。

是心是仏，是心作仏。当知，仏即是心，心外更無別仏也。

慧能(638-713)

『六祖壇經』(大正 48・352 上)

迷人念仏求生於彼，悟人自浄其心。所以仏言，隨其心浄，即仏土浄。

(華嚴系)

李通玄(635-730)

『新華嚴經論』(大正 36・759 中下)

約申十種，以定指南。第一阿弥陀經浄土。第二無量壽觀經浄土。…第九唯心浄土。

澄觀(738-839)

『清涼貞元疏』(統藏 1・7・3, 292-293 丁, 大正 47・159 上)

既了唯心，了心即仏。

『華嚴經疏』(大正 35・924 中)

攝境唯心念仏門。……是心是仏，是心作仏故。

唯心浄土思想の成立

延寿(904-975, 第四章参照)

『万善同帰集』(大正 48・966 中-967 上, 968 下, 993 上, 大正 47・198 下-200 上)

問，唯心浄土，周遍十方。何得託質蓮台，寄形安養……。

答，唯心仏土者，了心方生。如来不思議境界經云，……諸仏及一切法皆唯心量。……故知，識心方生唯心浄土……。又平等之門，無生之旨，雖即仰教生信，其乃力量未充，觀淺心浮，境強習重。須生仏国，以仗勝縁，忍力易成，速行菩薩道。……

問，觀經明十六觀門，皆是攝心修定，觀仏相好，諦了円明，方階浄域。如何散心，而能化往。

答，九品經文，自有昇降。上下該攝，不出二心。一定心，如修定習觀。二専心但念名号……得成末品。……

誓断無染塵勞 願生惟心浄土

「神棲安養賦」(大正 47・215 上)

一眞境内現相，而雖仗仏威，七宝池中，觀境而皆從心出。

唯心浄土思想の確立

書名・題名一覧

(天台系)

- | | |
|----|-----------------------------------|
| 知礼 | 『観經疏妙宗鈔』，『観經融心解』，「復楊公請住世書」 |
| 遵式 | 『往生浄土決疑行願二門』，「依修多羅立往生正信偈」，「十六観經頌」 |
| 智円 | 『阿弥陀經疏序』，「西資鈔揀示偏讚西方」 |
| 仁岳 | 「義学編論席解紛」 |
| 有巖 | 「浄土修因或对」，「十六観頌」，「懷安養故郷詩並序」 |
| 從諫 | 「示陳行婆頌」 |
| 彦倫 | 「念仏修心術」 |
| 陳瑾 | 「陳了翁談唯心浄土」 |
| 齊玉 | 「四十八願後序」 |
| 丁注 | 「讚喻弥陀偈」 |
| 道琛 | 「唯心浄土説」，「円弁法師説唯心浄土」 |

道因 「慶懺礼仏会疏」, 「念仏心要頌並序」

思梵 「念仏成就三力則易超往」

可觀 「勸修西方説」, 「雕弥陀香像頌」, 「解空法師弥陀尊像讚」

吳克己 「刊往生行願略伝序」

沖黙 「十六観近体詩」

可旻 「懐西方詩」, 「讚浄土漁家傲並序」

(律系)

元照 『観経義疏』, 「無量寿仏讚」, 「開元寺三聖立像記」

戒度 「追和渚明帰去来辞」, 『観経扶新論』, 『観経義疏正観記』, 『無量寿仏讚註』

(華嚴系)

義和 「華嚴念仏三昧無盡燈序」

※ 子元(『蓮宗宝鑑』次章)

(禪系)

楊傑 「浄土十疑論序」, 「直指浄土決疑集序」, 「建弥陀宝閣記」, 「安樂国讚三十章」, 「宗鏡録序」

王仲回 「大宋光州王司士伝」(楊傑)

王古 「浄土宝珠集序」, 「寂照集揀西方要義」

宗蹟 「観無量寿仏経序」, 「蓮華勝会録文」, 「勸念仏頌」, 「西方浄土頌」

守訥 「唯心浄土文」

守一 「澄江浄土道場記」

懐深 「勸念仏頌」

宗杲 「妙喜老人跋」

林鎬 「明師勝地論跋」

海慧 「海慧禅師示心浄土浄」

(その他, 居士)

程俱 「靈山安養菴記」

江公望 「念仏方便文」

王闡 「浄土自信録記」

王日休 「浄土起信」, 「大宋龍舒居士王虚中伝」

張孝祥 「龍舒浄土文序」

鍾離松 「宝積蓮社画壁記」

(続天台系)

宗曉 「臨行自餞」註, 「靈山安養菴記」註, 「大宋光州王司士伝」註, 「弁心浄則国土浄」

汪大猷 「樂邦文類序」

唯心浄土思想関係文

(天台系)

四明知礼(960-1028)

『観経疏妙宗鈔』(大正 37・195 中, 198 上, 210 中, 220 上, 下, 大正 47・154 中-下, 198 中下)

若此観門及般舟三昧……雖託彼境, 須知依正同居一心。

此経正当約心観仏也。

大乘之法, 其要在心。……今観浄土, 須求於心。心能具故, 心能造故。

弥陀身顯即諸仏身, 諸仏相明即弥陀体。

作是一心修者, 乃不思議三観, 十六観之総体, 一経之妙宗。

『観経融心解』(『教行録』大正 46・866 下。大正 47・154 下)

是心是仏者, 心外無仏, 仏外無心, ……既全是心……。故般舟云, 我所念者即見心……。

「復楊公請住世書」(『教行録』大正 46・899 中下, 大正 47・202 下-203 上)

乃用一心三観為舟航, 復以六時五悔為櫓棹, 求往唯心之浄土, 願見本性之弥陀。然後運同体之大悲, 度法界之含識, 順仏権巧, 求生樂邦……。

但知, 浄土唯心, 穢邦即性, 即厭無厭, 即忻無忻。

慈雲遵式(964-1032)

『往生浄土決疑行願二門』(大正 47・145 下-146 上, 204 中下)

我心既然, 生仏体等。如此, 即方了廻神億刹, 実生乎自己心中, 孕質九蓮。……故華嚴云(唯心偈)……。起信論云……。十六観云, 諸仏如来具法界身……乃至是心作仏, 是心是仏。又般舟三昧経云, 仏是我心, 是我心見仏, 是我心作仏等……。

今但, 直決疑情, 令知浄土百宝莊嚴, 九品因果, 並在衆生介爾心中。……是則, 旁羅十方, 不離当念, 往来法界, 正協唯心。

「依修多羅立往生正信偈」(大正 47・216 中下)

或曰, 浄土在心, 何須外覓。隨其心浄, 則仏土浄。豈用迢然求生他方浄土耶。

釈曰, 子又不善心土之義也。將謂我心局在方寸, 便見西方實在域外。苟如此者, 又云何説心浄則仏土浄耶。華嚴云, 心仏及衆生, 是三無差別。仏法既遍, 心法亦遍。

「十六観経頌」(大正 47・217 下)

像観

諸仏如来法界身 遍入衆生一切想 智者当観此想心 是心即仏菩薩像

孤山智円(976-1022)

『阿弥陀経疏序』(大正 37・350 下-351 上, 大正 47・166 中下)

夫心性之為体也, 明乎静乎, 一而已矣。無凡聖焉, 無依正焉, 無延促焉, 無浄穢焉。及其感物随縁而変, 則…有依焉有正焉。……雖宝樓金池為悦目之翫, 而非惑蕩之色, 而能達唯心無境矣。

「西資鈔揀示偏讚西方」(大正 47・201 中)

世又, 有聞過十万億仏土, 而望途怯遠, 説生者多是補処, 而恥躬弗逮。豈知十方空界, 悉我自心。心浄則十万非遥……。

浄覚仁岳(992-1064)

「義学編論席解紛」(大正 47・205 上)

復有說云，吾滅度後，十方世界，皆是我身。何必定生西方極樂。……大妄語罪，其誰當之。天台智者云，常人……不知生即無生，無生即生……。

樞菴有嚴(1020-1101)

「淨土修因或對」(大正 47・205 下-206 上)

或曰，……夫生淨土者，必須修無生妙觀。……今之學者，都懵教旨，謂生天難而淨土易……。

對曰，淨土非難易，難易在人。……所云修無生妙觀，得生者，誠哉是言也。此雖正意，乃上根得生之一門也。然不可闢一門而塞多門。安樂集云，生淨土者，有二種。一有相心，謂著相忻樂。二無相心，謂理觀相應。若今之世，中下鈍根，愚迷障重。待理觀相應，方生者或少矣。

「十六觀頌」(大正 47・218 中)

樹觀

寶樹重重相倚高 莊嚴珠網幾層霄 若能了得唯心境 雖在西方路不遙

「懷安養故鄉詩並序」(大正 47・223 中)

余以安養為故鄉。乃即心淨土，雖久思歸，且步履未至。

慈弁從諫(-1108)

「示陳行婆頌」(大正 47・220 中)

念念弥陀勿求外

山堂彥倫(-1107-)

「念仏修心術」(大正 47・211 中)

定謂即心觀仏。想彼西方依正主伴，唯心本具，我心空故，如來本空……。故經云，諸仏如來，是法界身……。是心作仏，是心是仏。此乃如來親示唯心三昧……心外無仏，性外無土……。二者散善……。是知，若定若散，或鈍或利，皆淨土因，咸趣無生，永無退轉矣。

陳瑾(1060-1124)

「陳了翁談唯心淨土」(『樂邦遺稿』卷上，大正 47・234 上)

了翁諱瑾書。與延慶明智法師論台宗三千法。其間示唯心淨土之義曰，一念心起，三千性相一時起，一念心滅，三千性相一時滅。念外無一毫法可得……。本無名字而不拒諸名，名其土曰極樂國，名其身曰阿彌陀。

慧覺齊玉(-1127)

「四十八願後序」(大正 47・173 中)

則知，淨土非聖人之權設，真禪侶之棲止也。苟能即心淨土，本性弥陀，生則隨念往生，去則實無所去。

丁注(不詳)

「讚喻弥陀偈」(大正 47・217 中，喻弥陀は思淨)

心淨仏土淨 …… 一念不起滅 極樂即現前 大千同此境

円弁道琛(1085-1153)

「唯心淨土說」(大正 47・207 上-下)

或問。唯心淨土，本性弥陀，為當往生，為即心是。若往生者，何謂唯心。若即心是，何故經

云，過十万億仏土耶。

或答。事理有異。約事須当往生。掘理即心而是。

今議曰。円家事理，一体無殊。何得抗分而通此義。当知，十界四土……不離我心。……以本具故，具足百界千如依正等法。……夫如是者，豈有娑婆釈迦，樂邦弥陀，而離我心耶。……

今更以譬喩顯之。……我心之内，無復衆珠，則離我心，外無別浄土……。故曰，唯心浄土，本性弥陀也。然則唯心之言足矣。又何謂之過十万億仏土耶。……

若了唯心本性，只一三千融妙之法，十万遐方皆不為礙。

「円弁法師説唯心浄土」(『樂邦遺稿』卷下，大正 47・241 中)

今於宝珠集久得其要曰，唯心浄土一而已矣，良由弥陀悟我心之宝刹，我心具弥陀之樂邦。

草菴道因(1090-1167)

「慶懺礼仏会疏」(大正 47・213 下)

右伏以，弥陀依衆生心而発現……。応外無機，即衆生心中之諸仏。機外無応，乃諸仏心中之衆生。

「念仏心要頌並序」(大正 47・220 中下)

釈迦如來說，阿弥陀仏是法界身。天台智者，又言，実相為体。……

我与弥陀本不二

円通思梵(-1168)

「念仏成就三力則易超往」(『樂邦遺稿』卷上，大正 47・239 下)

会宗云，……今為説三種之力……。一者，衆生本具仏性力，衆生本心自具仏性，与阿弥陀等無有異。

解空可觀(1092-1182)

「勸修西方説」(大正 47・208 中)

世伝六祖壇經……六祖答，以自心有西方，即是眞西方，自有西方心，何処覓西方……。噫，如此鄙俚一笑可也。竊名祖師，不可行用。……達唯心，了本性，在我而已。去此不遠。

「雕弥陀香像頌」(大正 47・220 下)

白玉明毫唯我心 紫金光相即我性

「解空法師弥陀尊像讚」(『樂邦遺稿』卷下，大正 47・241 中)

紫金光聚 白玉明毫 唯心本性 …… 一念清浄 即見西方

呉克己(1140-1214)

「刊往生行願略伝序」(大正 47・175 下)

蓋不説法華，則無以明我心本具妙法。不生安養，則無以証我心本具妙法。

冲黙(不詳)

「十六觀近体詩」(大正 47・222 中)

樹觀 …… 重重宝珠非他物 一一珠光出自心 ……

像觀 …… 要知相好從何起 直指心源有路衝 ……

北山可旻(不詳)

「懷西方詩」(大正 47・223 下)

本性唯心豈不知

「讚淨土漁家傲並序」(大正 47・226 下)

本性弥陀随体现，唯心淨土何曾遠。

(律系)

靈芝元照(1048-1116)

『觀經義疏』(大正 37・280 上中，下，282 中，284 中)

言了義者，了彼淨土即我自心，非他方也。達彼弥陀即我自性，非他仏也。……故經曰，是心作仏，是心是仏……。嗟，今末学，不達唯心……。故慈雲云，或曰淨土在心何須外覓……。釈曰，子不善心土之義。

利根達理則一切唯心，鈍根未達則專依事行。……今經觀法，通攝利鈍。利根修者莫非理觀，鈍根修者皆歸事想。

一者法性土。……此謂，唯心淨土。

有人云，心若清淨即是自性，西方何必求生他方淨土。今謂非無此理，斯乃教中法性理土，而非今經所明。

※庶繙看之輩，觀解頓發，共游唯心之淨土，願行速就，各見本性之弥陀矣。釈湛慧(1672 年，305 下)

「無量寿仏讚」(大正 47・180 中，『龍舒淨土文』卷十二，288 上)

八万四千之妙相，得非本性之弥陀。十万億刹之遐方，的是唯心之淨土。淨穢雖隔，豈超自心。生仏乃殊，寧乖己性……。

「開元寺三聖立像記」(大正 47・186 下-187 上)

或曰。經云，諸仏如来，是法界身。入一切衆生心想中。今刻木為像，世物所成，用此為仏，不知其可乎。

対曰，仏身無相亦不離相。以其無相故，世出世間，無有一法而非仏者。……，如能達此相即非相，非相即相，則山河国土草木微塵……莫非諸仏法身之体。……理事一如，眞俗不二。

拙菴戒度

「追和瀧明帰去来辞」(1177 年，大正 47・226 中)

衆妙之門，唯心本具，眞性常存。

『觀經扶新論』(1178 年，統藏 1・33・1，2 丁)

尚觀不聞他仏身土之名，安能信有唯心本性之說，其理懸遠……。

『觀經義疏正觀記』(1181 年，統藏 1・33・1，43 丁)

了彼淨土即我自心，達彼弥陀即我自性，求往唯心淨土，願見本性弥陀。

『無量寿仏讚註』(統藏 2 乙・1・1，72-73，74 丁)

八万四千之妙相，得非本性弥陀

十万億刹之遐方，的是唯心淨土

[註]唯心浄土，不待遠求。本性弥陀，豈從外覓。……，豈得謂之唯心本性也。

浄穢雖隔豈越自心 [註]躋上唯心浄土也。

生仏乃殊寧乖已性 [註]躋上本性弥陀也。

(後跋)吁唯心本性，固人人之所具。 嘉定辛未(1211年)正因謹跋

(華嚴系)

円澄義和

「華嚴念仏三昧無盡燈序」(1165年，大正47・169下-170上)

六道凡夫，三乘賢聖，其根本悉是靈明清浄，一法界心。性覺宝光，各各円満……。又解脱長者，教以唯心念仏門。……諸仏心内衆生，新新作仏，衆生心中諸仏，念念證眞，至簡至易。雖然諸仏拔苦与樂之心一也。不思議力一也。唯西方弥陀世尊，接引娑婆衆生。願力偏重，即本師故。

※子元(-1166? 白蓮宗の祖，次章『蓮宗宝鑑』参照)

(禪系)

楊傑[1076-1093]

「浄土十疑論序」(1076年，大正47・77上，171上)

……聖凡一体，機感相応。諸仏心内衆生，塵塵極樂。衆生心中浄土，念念弥陀。

「直指浄土決疑集序」(1084年，大正47・171下-172中)

大願聖人，從浄土来，来実無来。深心凡夫，往浄土去，去実無去。彼不来此，此不往彼。而其聖凡会遇，両得交際者何也。……故華嚴解脱長者云，……我若欲見安樂世界阿弥陀如来，随意即見。……。亦有善土，発三種不信心，不求生者，尤可嗟惜。一曰，吾当超仏越祖，浄土不足生也。二曰，处处皆浄土，西方不必生也。三曰，極樂聖域，我輩凡夫，不能生也。……謂不足生者，何其自欺哉。……謂不必生者，何其自慢哉。……謂不能生者，何其自棄哉也。……唯心浄土，自性弥陀，大光明中，決無魔事。

「建弥陀宝閣記」(1086年，大正47・184下-185上)

入是道場者，観一切相為非相，則能見弥陀之全体。……入一浄土，而周無量浄土。悟一法身，而融無量法身矣。無念而念，無證而證，無修而修，浄土果海，豈易量哉。

「安樂国讚三十章」(大正47・180下-181中)

浄土周沙界 如何独指西 …… 有念同無念 無生即是生 …… 心浄即土浄 刹刹見如来

「宗鏡録序」(1091年? 大正48・415上)

衆生界即諸仏界，因迷而為衆生。諸仏心是衆生心，因悟而成諸仏心。…，心仏衆生三無差別。

王仲回

「大宋光州王司士[王仲回]伝」(1089年 楊傑記，大正47・195下-196上)

(司士)問曰，經典多教念弥陀生浄土。祖師則云，心即是浄土，不用更求生西方。其不同何也。

答云，実際理地，無仏無衆生，無樂無苦，無寿無夭。又何浄穢之有。豈得更以生不生為心耶。

此以理奪事也。……。試自忖思，或未出衆生之境，則安可不信教典至心念弥陀而求生淨土哉。……，於無念中起念，於無生中求生，此以事奪理也……。

(宗曉註)次公此伝，誠不可棄。但論事理相奪，未若台宗所謂円觀事理，一念具足也。

王古(-1093)

「淨土宝珠集序(新修淨土往生伝序)」(1084年，大正47・173上，『淨土宗全書』続16，p.96)

衆生心淨，則仏土淨。法性無生，而無不生。……弥陀心内衆生，新新摂化。衆生心内淨土，念念往生。質託宝蓮，不離当処。神超多刹，豈出自心。……念本性之無量光，本来無念。生唯心之安養国，眞実無生。

「寂照集揀西方要義此文不知何師作文。見直指決疑集」(直指決疑集[王古]，大正47・201上)

問，六祖壇經云，凡愚不了自性 不識身中西方 東方願西。悟人在处一種。誌公云，智者知心是仏，愚人愛往西方。若此道果是眞正，何故二大士排遣。

答，仏說法有隱顯，教有權実，人根有利鈍……。

長蘆宗蹟

「觀無量寿仏経序」(大正47・167上)

夫正遍知海，從心想生。諸仏世界，随心淨土。然則弥陀至聖，不隔下凡。極樂雖遥，豈離方寸。

「蓮華勝会録文」(1089年？，大正47・177中-178上。『龍舒淨土文』卷十一，283下-284中)

夫，以念為念，以生為生者，常見之所失也。以無念為無念，以無生為無生者，邪見之所惑也。念而無念，生而無生者，第一義諦也。是以實際理地，不受一塵，則上無諸仏之可念，下無淨土之可生。……，然則唯心淨土，自性弥陀，蓋解脱之要門，乃修行之捷徑。

「勸念仏頌」(大正47・219中)

極樂不離眞法界 弥陀即是自心王

「西方淨土頌」(大正47・219下)

莫謂西方遠 西方在目前 雖然過十万 曾不離三千 …… 六根常合道 万境了唯心 ……

人間禪家者 宗門万事忘 既能超極樂 何必往西方 却聽禪家語 西方是本郷

姑蘇守訥

「唯心淨土文」(1113年，大正47・207下-208上)

仏説極樂淨土，普勸娑婆群生，应当發願生彼国土。然学頓者，弘之為權説，不通理性者，泥之於事相。吾嘗学唯識，唯遮外境，識表自心，心外無境，境全是心，心法遍周。淨土豈離乎当念。生仏同体，弥陀全是於自心……。天衣懷禪師……復自答曰，生則決定生，去則実不去。若明此旨，則唯心淨土，昭然無疑。

法眞守一

「澄江淨土道場記」(大正47・189上)

信心清淨，一念華開，全体現前，衆相具足，是心即仏，補処何疑。

慈受懷深(1077-1132)

「勸念仏頌」(大正47・220上)

欲知自性弥陀仏 在汝朝昏一念中

大慧宗杲(1089-1163)

「妙喜老人跋(龍舒浄土文跋)」(1160年, 大正47・172下, 『龍舒浄土文』卷十, 283中)

予嘉其志, 為題其後。若見自性之弥陀, 即了唯心之浄土。未能如是, 則虚中為此文功, 不唐捐矣。

林鎬

「明師勝地論跋」(大正47・174中)

如妙喜云, 見自性之弥陀, 了唯心之浄土者, 誠可為此論一言之蔽也。

海慧(不詳)

「海慧禪師示心浄土浄」(『樂邦遺稿』卷下, 大正47・241上)

伝燈録載。海慧禪師一日有学人問曰。願生浄土未審, 実有浄土否。師曰, 経云, 欲得浄土, 当浄其心……。若心清浄, 所在之处皆為浄土。……浄穢在心, 不在国土也。

(その他, 居士)

程俱

「靈山安養菴記」(1106年, 大正47・187下)

時北山中有一居士……謂大衆言, 現前種種, 如上所説。与安養界, 在一切处……。

(宗曉註)維摩経曰。欲得浄土, 当浄其心。随其心浄, 則浄仏土。…若人心浄, 便見此土莊嚴。

江公望(-1125)

「念仏方便文」(大正47・212中下)

念念円通, 肉団心現本性弥陀, 五濁身遊唯心浄刹, 久久遂成唯心識観。……所謂, 是心作仏, 是心見仏, 是心是仏。

王闡(-1146)

「浄土自信録記」(大正47・209下)

余観如来東流之教, 若直指本心令人究理之説。……其意若曰, 浄土自他, 凡聖因果, 即衆生之自心耳。

王日休(-1173?)

「浄土起信」(1160-1162年, 『龍舒浄土文』卷一, 大正47・255下-256上, 『樂邦遺稿』卷下, 243上)

世有専於参禅者云, 惟心浄土, 豈復更有浄土。自性阿弥, 不必更見阿弥。此言似是而非也。何則西方浄土, 有理有事。論其理……為唯心浄土。論其跡則実有極樂世界。……所謂, 自性阿弥者固不妄矣。

是所謂, 唯心浄土而無復更有浄土, 自性阿弥不必更見阿弥者, 非也。……是所謂, 唯心浄土者誠不易到也。……是所謂, 自性阿弥者誠不易到也。

由此言之, 唯心浄土自性阿弥者……修未到者, 誤人多矣。

「大宋龍舒居士王虚中伝」(大正47・196下)

噫, 自非了唯心本性之道, 達生死变化之数, 不臻于是。

張孝祥

「龍舒浄土文序」(1161年, 大正47・172中, 251中下)

阿弥陀如来, 以大願力, 摂受群品。繫念甚簡, 證果甚速。或者疑之。余嘗為之言, 阿弥陀仏, 即汝性是。極樂国土, 即汝心是。……, 於日用中, 能発一念, 念彼如来, 欲生其国。即此一念, 清浄堅固, 還性所有与仏無異。当是念時, 不起于座, 阿弥陀仏, 極樂国土, 悉皆現前。

鍾離松

「宝積蓮社画壁記」(1173年, 大正47・189中)

又因僧兄木訥首座, 諄諄警策。知有自性弥陀, 唯心安養。……, 一以示万法唯心, 一以指西方径路。較余功德, 眞所謂百千万億分, 不及一者歟。

(統天台系)

宗曉(1151-1214)

註(「臨行自餞」有跋, 大正47・182上)

嗚呼, 唯心本性人人皆具焉。

註(「靈山安養菴記」程俱, 1106年, 大正48・187下-188上)

維摩經曰。欲得浄土, 当其心浄。隨其心浄, 則浄仏土。……, 若人心浄, 便見此土莊嚴。

註(「大宋光州王司土伝」楊傑記, 大正47・196上)

但論事理相奪, 未若台宗所謂円觀事理, 一念具足也。

「弁心浄則国土浄」(『樂邦遺稿』卷上, 大正47・240中)

禪宗不修浄業者云, ……浄土唯心, 我心既浄則国土浄, …何用別求生処。…其自欺之甚也。

汪大猷

「樂邦文類序」(1200年, 大正47・148下)

仏指示曰, 是心作仏, 是心是仏……。若因是而論, 則弥陀果覺即我性は, 極樂遐方即我心是。

※ 「龍舒浄土文」呂師説(1316年, 大正47・251中)

雖然, 本性弥陀, 惟心浄土, 豈欺我耶。

※ 「樂邦文類序」嚴訥(1541年, 大正47・148中)

吾心中之阿弥陀仏, 於因地所莊嚴。吾心之勝土為樂邦。

以上が, これまでに認めた唯心浄土思想関係資料である。もとより詳細に当たれば, これ以外の資料あるいは関係文もあろうし, 抄出文の中には再々添削に苦慮したが, 筆者の独断もあろう。ここでは先学の成果に従ったが, たとえば知礼『観経疏妙宗鈔』全篇は唯心思想[約心観仏]で貫かれており, 到るところ唯心浄土思想関係文は頻出する。また, 道琛「唯心浄土説」, 守訥「唯心浄土文」は題名どおり, 全文が唯心浄土思想と考えて良い。しかし, こうした難点はあるにしても, 上述の資料を一読しただけで, 従来の見解に較べて, ほぼ宋代までの唯心浄土思想関係資料が集成されたことは容認されよう。

これ以外の資料調査, 筆者の誤読等の難点は今後の修正に期して, ここでは上述の資料を現時点

での唯心浄土思想関係資料と限定し、引き続き諸資料の概要並びにそれによって知られる特徴と留意事項を読み取ろう。

まず、諸資料の概要であるが、主な経典としては7部である。前節「大蔵專談浄土経論」(『樂邦文類』)4部に新たに加わったのは、『六十華嚴経』〈唯心偈〉、『如来不思議境界経』「諸仏及一切法、皆唯心量」、『維摩経』〈心浄土浄説〉の3部である。『樂邦文類』はあくまでも「專談浄土経論」すなわち阿弥陀仏に言及する『観無量寿経』「是心作仏、是心是仏」、『般舟三昧経』(異本『方等大集経』)「心作仏、心自見、心是仏」、『四十華嚴経』〈唯心念仏門〉に限られたが、新加の3部は弥陀浄土に無関係の、従って諸仏並びに諸仏浄土の唯思想である。唯心浄土思想家の具体的引用は後に明らかにしよう。次いで、先行思想としては延寿2部を含めて8部である。前節の『樂邦文類』では「観経疏明四土宗致」天台智者と延寿2部であるから、新たな資料は5部(『摩訶止観』『止観輔行』、『浄土十疑論』、『六祖壇経』、『貞元疏』)である。いずれも天台・禅・華嚴を代表する著書で、宗暁の附註と諸師の顕著な引用から採ったが、就中、唯心浄土思想に大きな影響を与えたのは『天台観経疏』『浄土十疑論』と『六祖壇経』である。このことも後に明らかにしよう。

問題は宋代に確立した唯心浄土思想関係資料である。総数は38師67部である。前節の『樂邦文類』に認められる唯心浄土思想関係文は総数58文であるが、就中、主な経典4部、先行思想3部を引くと、『樂邦文類』の宋代関係文は実質51文になる。そこに新たに現存資料・附註資料として、知礼『観経妙宗鈔』『観経融心解』、元照『観経義疏』、戒度『観経扶新論』『観経義疏正観記』『無量寿仏讚註』、楊傑「宗鏡録序」、宗暁自註、さらに『龍舒浄土文』『樂邦遺稿』の関係文など、計16部を加えると67部になる。ただし、これはあくまでも現存資料・散逸引用資料の部数であって、同一内容の資料(道琛「唯心浄土説」「円弁法師説唯心浄土」、可観「雕弥陀香像頌」「解空法師弥陀尊像讚」、宗杲「妙喜老人跋」と林鏞「明師勝地論跋」の引用、王日休「浄土起信」「龍舒居士伝」など)を合するとやや減ずる。しかし、逆に細かく一書数点の関係文を独立して加えると、その総数は非常に増える。これを多いと考えるか、少ないと考えるか。それに係わる留意事項は前節で述べたので再説しない。以上が宋代の唯心浄土思想関係資料の概要である。

次に、これまでになかった宋代の唯心浄土思想資料の特徴について論及しよう。

まず初めに強調したいことは、ここでの関係経典から宗暁に至る関係文を通読しただけで、唯心浄土思想が中国浄土教における一大潮流であるという実感である。これまで、中国浄土教の諸潮流を指摘した見解として、日本では〈中国浄土三流〉(慧遠流・善導流・慈愍流)『選択集』法然撰が有名である。⁽¹⁾ また、中国では「蓮社始祖継祖(慧遠—善導—法照—少康—省常—宗暁)」『樂邦文類』宗暁撰と「蓮社七祖(慧遠—善導—承遠—法照—少康—延寿—省常)」『仏祖統紀』志磐撰が知られている。⁽²⁾ 前者は思想的相異性を見事なまでに示しただけでなく、時代的地理的にもその妥当性が立証された卓見であり、後者は最初期の廬山慧遠から宋代までを繋いだ点に特色がある。しかし、詳細に調べると、前者の〈浄土三流〉は思想的相異性は卓見であっても、慧遠流・慈愍流の根拠と系譜は語られていないし、善導流五祖(曇鸞—道綽—善導—懷感—少康)は時代的地理的にも限られている。後者〈蓮社六祖あるいは七祖説〉は般舟三昧行・念仏結社の二形態の合糅で、それゆえ思想的共通性は弱い。それに較べて、唯心浄土思想は経典から先行思想までは明確な姿を見せず、中国仏教の主要な潮流の

中で発酵しつつ宋代に入って一気に溢れ出る。あたかも休火山が活火山として噴火した感が強い。「唯心浄土思想の確立」に挙げた38師67部の「一覧」と「関係文」はそれを如実に示す。しかも、この潮流が次章「唯心浄土思想の継承」で流れ続けることを予想すれば、中国浄土教十数世紀の歴史において一大潮流であると主張して良いであろう。しかし、そうであるからと言って、宋代浄土教が唯心浄土思想だけでなかったことはすでに注意した。ここでは複雑多様な形態を有する中国浄土教の中でも、「唯心浄土」という共通の思想で展開した最も大きな潮流であることを強調したい。

これは資料全体から受ける実感であるが、少し細かく注意すれば、第二に宋代の関係資料引用文を知ることによって、すでに辿った経典から先行思想の展開がそれだけで鮮やかに辿れる点である。このことは具体的な引用資料を含めて、次節で述べよう。

ところで、ここで新たな事実に気づく。宋代の関係資料の引用を見る限り、宋代に確立した唯心浄土思想には最初の提唱者永明延寿の言及が全く認められないことである。通常、われわれは思想の継承・展開は最初の提唱者の影響を受けて徐々に確立に至ると考える。しかし、関係資料引用文に延寿の言及はなく、最後の『樂邦文類』に至って初めて登場する。「一覧表」からみて、延寿が知礼・遵式に影響を与えたであろうことは年代の近時性、延寿の師天台徳韶との関係から考えて容易に予想され、先学の指摘は傾聴すべきであるが⁽³⁾しかし、唯心浄土思想に限っては影響関係は立証できない。資料的には、知礼は『天台観経疏』の精緻な注釈書『観経疏妙宗鈔』、遵式は『浄土十疑論』重視が明白であるから、唯心浄土思想の本流は『天台観経疏』『浄土十疑論』の発酵から知礼・遵式で表出する天台浄土教にあることを関係資料は示している。因みに「唯心之浄土、本性之弥陀」を最初に明記したのは知礼である。関係資料が提示した延寿と知礼・遵式の関係はどうであろうか。これは新たな課題である。

第三に、ここでも注意すべきは、上述の資料はあくまでも唯心浄土思想関係資料を便宜的につないだのであって、こうした明確な系譜があったのでは無いという点である。たとえば、趙宋天台では山家・山外派や知礼門下の広智・南屏・神照・仁岳系、禅宗では五家七宗などの系譜はよく知られているが、この「一覧表」は天台・禅宗の法系を前提として大雑把に一類としたにすぎず、もとより唯心浄土思想の系譜が存在したわけではない。元々、浄土教自体は独立した宗派(学派)の意識はなく、宗暁・志磐によって蓮社(蓮宗)の系譜が成立したが、史実としての師資相承でないことはすでに述べた。唯心浄土思想が浄土教の一大潮流であることは確かであるが、他宗のような明確な系譜ではない。あくまでも唯心浄土思想の総合的成果を意図する上で理解し易く挙げたのである。

このことと関連して、各法系に位置する諸師は必ずそこに限定されるというわけでもない。たとえば、元照(1048-1116)は神悟処謙に従って天台教学を学んでいるし、禅系に収めた楊傑は天衣義懐に参じて得悟したが、天台の「浄土十疑論序」を著しており、江公望・王日休などの居士の多くは極めて禅師との交わりが強い。従って、ここでの「一覧表」は多少係わりの強い法系に仮りに収めたのであり、宋代仏教自体が融合的性格を特徴とするのである。このことは次章の具体的な思想形態を知れば、より明らかになる。

なお、上述の資料に挙げない関係諸師、資料について付言すると、たとえば天衣義懐(989-1060)は唯心浄土思想家として知られ、実際、彼の法系から守訥・守一、あるいは楊傑などがいる

から誤りではない。しかし、彼の言及は守訥「唯心浄土文」に紹介されているので独立させていない。また、白蓮宗の祖子元(-1166?)にも「自性弥陀仏、唯心浄土機」(「慈照宗主円融四土選仏図序」『蓮宗宝鑑』巻二、1305年)、「臨終見仏即非外来、盡是唯心顕現」(「慈照宗主示念仏人発願偈並序」『蓮宗宝鑑』巻七)の言及があるが、⁽⁴⁾ここでは『樂邦文類』(1200年)までの資料に限定した。宋代でも後の資料に認められる唯心浄土思想は次章で明らかにしよう。これは前章で永明延寿の有名な「四料揀」(『浄土或問』『浄土指帰集』など)⁽⁵⁾が彼の思想と矛盾するとした資料批判と同じ立場である。

以上が、上述の「一覧表」「唯心浄土思想関係資料」から知られた概要と特徴並びに留意事項である。本節はこうした難点を持つとしても、唯心浄土思想の形成過程についての資料集成であることは容認されよう。これによって、宋代に確立した唯心浄土思想の資料に係わる諸作業はほぼなし終えたことになろう。

- (1) 『選択集』、『浄土宗全書』巻七、8頁。道端良秀「中国浄土教の時代区分とその地理的考察」『中国浄土教史の研究』、小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』124-131頁参照。
- (2) 『樂邦文類』巻三、大正47・192中-193下、『仏祖統紀』巻二六、大正49・260下-365上、拙稿「中国浄土教の系譜」『印度哲学仏教学』第1号。
- (3) 安藤俊雄『観無量寿経妙宗鈔概論』4-5頁(『天台学論集』20頁)、池田魯参「趙宋天台学の背景」『駒沢大学仏教学部論集』第14号。
- (4) 『廬山蓮宗宝鑑』巻二、巻七、大正47・313中、336下。
- (5) 『浄土或問』天如維則、大正47・292中、『浄土指帰集』大佑、統蔵2・13・1、67-68。前号第四章第四節「中国浄土思想史における永明延寿」91-93頁。

第四節 唯心浄土思想の諸形態

これまでは、宋代に確立した唯心浄土思想の資料的研究、具体的には資料の収集・整理、それに係わる留意点などの考察であった。本節では、最後に果すべき大きな課題、諸資料から知られる思想形態並びにそれに係わる諸問題について解明する。

考察の順序を初めに宋代浄土教の特徴と唯心浄土思想の評価、次いで「問題の所在」で提起した課題の解明を果す。そこにはまた新たな知見と疑義が予感される。そこで主要な唯心浄土思想の具体的形態と諸問題を解明し、最後に残された課題に論及しよう。それによって、思想形態に関する諸作業はおそらくなし終えることになろう。

論述の順序を漠然とこのように設定したのは、いま前節の諸資料を前にして、思想研究を何から始めていくか、正直なところ苦慮しているからである。一読して知られるように、諸師・諸資料夫々の内容があまりにも違うために一本の太い支柱が見つからない。前号で扱った隋唐代までの先行思想では、中国浄土教の主要な浄土観と『観経』〈是心是仏釈〉を支柱として関係思想を辿れたし、最初の提唱者永明延寿の浄土思想は大部な『宗鏡録』とは言え、一思想家の解明であった。それに較べて、本節で扱う対象は言及は少ないとは言え、38師67部に及ぶ。諸師各々の立論は考証できても、その成果は単なる寄せ集めにすぎない。総合的成果を意図する本稿では諸資料全体を貫く共通の思想基盤のあることが望ましい。それを基準に組織化大系化ができるからである。しかし、再読

しても未だ支柱は見出し難い。宋代の唯心浄土思想は支柱のないことが特色であるのか。

第一項 宋代浄土教と唯心浄土思想

そこでやむなく、本節のなすべき作業として、初めに宋代唯心浄土思想の評価を正確に位置づけるためもあり、宋代浄土教全体の特徴を先学の成果から学び、それとの関係で唯心浄土思想を考える。それによって、本節のなすべき課題の手がかりを期待するからである。それはまた、前にも心した唯心浄土思想の過大視あるいは過小視を防ぐためでもある。唯心浄土思想は資料だけでなく、思想的にも一大潮流と言いうるのか。

宋代浄土教の研究は日本への影響が少ないこともあって低調である。そうした傾向の中で、望月信亨博士『中国浄土教理史』は浄土経論の訳出から清代浄土教までを網羅した唯一の研究書である。博士は本書で宋代の代表的浄土思想家、義通・知礼・遵式・智円・元照等に論及した後に「宋代に於ける浄土教の弘通」の章を設け、

然るに浄土は多く天台及び禅等の諸宗に依附して行はれたので、随ってその教旨も台浄融合、禅浄双修の如き一種の思潮を形成し、名実共に寓宗たるに過ぎなかった観がある⁽¹⁾

と、天台・律及び華嚴・結社念仏・禅僧・居士等を網羅し、その思想を略述する。また、高雄義堅師は「宋代浄土教の研究」後篇「浄土教家と其教系」で、

一体宋仏教の特徴の一は、諸宗融合の風潮である。……かくして宋代浄土教は永明延寿や長蘆宗蹟等の禅宗系と、四明知礼・慈雲遵式の如き天台系、及び靈芝元照一派の戒律系とに分けることが出来る⁽²⁾

として、宋代を代表する諸師の浄土思想を考証する。

両碩学は、以上のように宋代浄土教の特徴として諸宗融合の風潮、具体的には天台系と禅系、次いで律系及び華嚴系、さらに居士等の活躍を指摘する。就中、天台系・禅系がとくに多いことは、今日「天台浄土教」「禅浄双修」⁽³⁾の名称が用いられることで納得できる。この特徴を宋代唯心浄土思想に照せば、驚くほど一致する。「唯心浄土思想関係一覧表」を見ると、一番多いのは天台系19師34部、次いで禅系10師18部、律系2師7部及び華嚴系1師1部、居士等6師7部(居士は天台・禅系を含めるとさらに多い)であるから、宋代浄土教全体の特徴をそのまま縮小した観がある。宋代の唯心浄土思想は宋代浄土教の特徴を顕著に示す。これは資料自身の分類が立証する。

ここで、次のような疑問が出るかも知れない。唯心浄土思想は浄土教の一形態であるから、同時代の特徴と一致するのは当たり前で、むしろ異なる方がおかしいという反論である。しかし、この反論はやや早計であって、宋代浄土教の融合的特徴は単に諸師・諸資料が量的に立証するだけでなく、唯心浄土思想形態の質的内容に深く係わることを注意したい。

新思想の成立は、それ以前の思想に較べて新思想という場合と同時代に対抗して現われる新思想の場合がある。宋代の唯心浄土思想はそれ以前の唐代浄土教までには無かった意味での新思想である。それよりも、唯心浄土思想を含めた宋代浄土教の融合的特徴自体が、法照・飛錫などの先駆的唐中期を経たとは言え、⁽⁴⁾新思想である。この場合は前代までに較べての新思想に当る。

これに対して、同時代に対抗して現われた新思想としては、われわれは観経註釈書輩出の隋唐代

に浄影寺慧遠・吉蔵等の註釈書を古今楷定して、善導が独創的思想を主張したことを想起する。それは、それ以前と同時代の古今楷定はもとより、それ以後の『天台観経疏』『同妙宗鈔』をも楷定に値する、文字通り古今当来の楷定書である。新思想は時代社会の風潮に対抗して出現するがゆえに、正に新しい思想なのであり、善導教学はその典型とわれわれは教えられている。このことが誤りでないなら、前の同時代の特徴と一致するのは当たり前とする反論は成立しない。ここで、殊更、善導教学を挙げるのは、唯心浄土思想がそれ以前の潮流と異なる新思想という点で共通していても、同時代の風潮に対抗して出現した一大思想家善導の新思想と違って、同時代の風潮からの出現ゆえに、文字通り諸師の輩出であり、確立であることを強調したいからである。こうした両思想出現の違いは、善導教学は同時代の風潮から傑出しすぎたがゆえに定着せず(日本の法然に至って初めて選択され)、唯心浄土思想はそのまま元代以降の一大潮流として継続して行く。こうした中国浄土教の後の流れにも深く係わるからである。われわれは思想を扱う場合でも、時代性社会性を無視してはならない⁽⁵⁾

時代社会の風潮による新思想「唯心浄土思想」の輩出・確立という一見当たり前のようなこの特徴は、実はその依って立つ思想基盤と具体的思想形態を解明しようとするときに、重要なヒントをわれわれに示唆している。第一に、宋代仏教が諸宗融合の風潮であることは、天台・禅・律等の思想も他思想を交えぬ独立した形態ではありえず、天台にも華嚴・唯識が入り、禅・律思想にも天台・華嚴の影響があると考えねばならない。当然、融合的風潮から輩出した唯心浄土思想の諸形態も天台・禅・律・華嚴系、居士等に仮りに分類したが、一宗一派の思想基盤のみで単純に解釈できないことを要求する。その一端は前節の元照・楊傑等の事蹟で予測したが、ここで唯心浄土思想全体がそうであると覚悟せねばならない。このことは38師67部の思想形態を分析し解明しようとする本稿の意図には極めて難渋なことである。第二に、唯心浄土思想が宋代仏教、すなわち諸宗全体の中から主張されたという事実は、逆にそれ以前の弥陀浄土教の中から成立したものでないことを意味する。このことは本稿冒頭「問題の所在」で漠然と予感し、それ以降の先行思想が証明したことである。われわれはここで重要な課題に気づく。唯心浄土思想がそれ以前の弥陀浄土教の継承・展開でないなら、唐代までの弥陀浄土思想と決定的に異なる形態は何なのか。とくに善導の指方立相論、即ち報身報土説との関係、所謂、従来の見解で指摘される会通と批判が何かである。ここでは具体的思想形態の解明とともに指方立相論との関係が新たな課題として要求される。第三に、宋代仏教の諸宗融合から輩出したということ、さらにそれ以前の弥陀浄土教の影響が無いということは、唯心浄土思想最初の提唱者永明延寿の継承でないことをも意味する。すでに詳論したように一大唯心思想家永明延寿の唯心浄土は十方に周遍する諸仏の唯心浄土で、弥陀浄土は中下根の機のための有相浄土であった。38師67部の唯心浄土は、詳細な判別を俟つにしても、弥陀の唯心浄土と考えて良い。それゆえ、永明延寿の影響、継承とみない方が無難なようである。この課題は前節の資料から提起されたことでもある。

望月信亨・高雄義堅両碩学の教示する宋代浄土教の融合的特徴は、唯心浄土思想の諸形態を研究するわれわれに貴重なヒントと課題を与えてくれた。宋代浄土教全体に照らして唯心浄土思想を評価することは重要であった。宋代唯心浄土思想は融合的形態を特徴とし、あたかも大河の如くにそ

れ全体が様々な思想形態を呑込んだ潮流であることを示唆している。諸師各々には確かな思想基盤があったとしても、唯心浄土思想全体を貫く太い支柱はないようであり、われわれは種々の支流を解明せざるをえないのである。

- (1) 望月信亨『中国浄土教理史』381-438頁、とくに383頁。他に佐々木月樵『支那浄土教史』403-523頁参照。
- (2) 高雄義堅『中国仏教史論』162-188頁、とくに163-164頁。
- (3) たとえば、山口光円『天台浄土教史』、藤吉慈海『禅浄双修の展開』。
- (4) 塚本善隆『唐中期の浄土教』(法蔵館)256-268, 275-282頁。
- (5) 善導教学が古今楷定の『観経疏』にあり、中心思想が凡夫の称名念仏による西方浄土[指方立相]往生であることは正しい。しかし、また一方では、当時の大徳として龍門石窟造営に活躍し、般舟三昧行者でもあったことは、著書・史料の伝えることである(『般舟讃』、『観念法門』、岩井大慧「善導伝の一考察」『日支仏教史論改』、藤原幸直「善導浄土教と天台智顛」『善導浄土教の研究』、牧田諦亮「人間像善導」『日本仏教学会年報』第42号、拙稿「中国浄土教の系譜」『印度哲学仏教学』第1号等)。善導も時代社会の影響を受けており、凡夫の称名念仏による浄土往生だけの人ではなかった。若し、後者(大徳・般舟三昧行者)の善導像が正しいとするなら、善導教学は『観経疏』だけで解釈するのではなく、広く著書五部九巻から検討すべきであり、『観経疏』そのものも再考を要求される。別の機会に提起したい(「二つの善導像とその教学」〈第10回北海道印度哲学仏教学会学術大会〉平成6年8月27日於北海道大学、予定)。

第二項 唯心浄土思想の主な要語と見解

宋代浄土教全体の特徴から唯心浄土思想の時代的社会的性格と新たな課題を学んだわれわれは、支柱のないことに納得して、ここでその支流に当たる具体的思想形態の解明に分け入ることにしよう。

初めに、前節でそれだけで具体的思想形態が理解できるように多少詳しく抄出した「唯心浄土思想関係文」をさらに判り易く整理する。前節関係文のままではいま苦慮したように思想形態が多岐に及んで收拾がつかないからである。前節関係文の中から思想に係わる主な要語と見解を挙げることによって、諸師の重視した経論・先行思想、依って立つ思想基盤、そして具体的思想形態が容易に把握できるであろう。

唯心浄土思想の主な要語と見解

主な経典

- 『観無量寿経』；是心作仏、是心是仏。
- 『般舟三昧経』(『方等大集経』)；心作仏、心自見、心是仏。
- 『四十華嚴経』；解脱長者、所見諸仏、皆由自心。
- 『六十華嚴経』；心仏及衆生 是三無差別、〈唯心偈〉。
- 『如来不思議境界経』；自心作仏、離心無仏、諸仏及一切法皆唯心量。
- 『維摩経』；心浄即仏土浄、〈心浄土浄説〉。

先行思想

- 『安樂集』；有相心無相心、理観相応。＊相応文なし。
- 『摩訶止観』、『止観輔行』；常行三昧、般舟三昧経。
- 『天台観経疏』；心観為宗、是心是仏、心外無仏。

『浄土十疑論』；心浄土浄説，無生即是生。

『六祖壇經』；迷人念仏求生，悟人自浄其心，心浄土浄説，浄土往生批判。

『貞元疏』；了心即仏。

『万善同帰集』；唯心浄土周遍十方，如來不思議境界經，定心修定，專心念名号末品。

『神棲安養賦』；皆從心出。

唯心浄土思想関係文

(天台系)

知礼

『観經疏妙宗鈔』；般舟三昧，約心觀仏，心能具心能造，是心是仏釈，一心三觀など。

『観經融心偈』；是心是仏，心外無仏，般舟云。

「復楊公請住世書」；一心三觀，唯心之浄土，本性之弥陀。

遵式

『往生浄土決疑行願二門』；生仏体等，華嚴唯心偈，起信論，観經是心是仏，般舟三昧經，介爾心中，往生法界，正協唯心。

「依修多羅立往生正信偈」；浄土在心，心浄土浄説，西方浄土説，華嚴唯心偈。

「十六観經頌」；像觀，是心即仏菩薩像。

智円

『阿弥陀經疏序』；心性之為体，唯心無境。

「西資鈔」；十方空界悉我自心。

仁岳

「義学編論席解紛」；十方世界皆是我身，西方浄土説，天台智者，生即無生。

有巖

「浄土修因或对」；無生妙觀，上根得(無)生，安樂集，有相心無相心，理觀相應，中下鈍根。

「十六観頌」；樹觀，了得唯心境。

「懷安養故郷詩並序」；即心浄土。

從諫

「示陳行婆頌」；弥陀勿求外。

彦倫

「念仏修心術」；定(善)即心觀仏，唯心本具，(観)經是心是仏，唯心三昧，心外無仏，散善(念仏)，若定若散，或鈍或利。

陳瑾

「陳了翁談唯心浄土」；明智法師，唯心浄土，一念三千。

齊玉

「四十八願後序」；即心浄土，本性弥陀，去則無去。

丁注

「讚喻弥陀偈」；心淨土淨說，極樂現前。

道琛

「唯心淨土說」；唯心淨土，本性弥陀，事理有異，約事往生，掘理即心，円家事理，十界四土本具，具足百界，只一三千，唯心本性。

「円弁法師說唯心淨土」；唯心淨土，弥陀我心，我心具樂邦。

道因

「慶懺礼仏会疏」；弥陀依衆生心，衆生心中之諸仏，諸仏心中之衆生。

「念仏心要頌並序」；弥陀是法界身，天台智者，我与弥陀不二。

思梵

「念仏成就三力則易超往」；衆生心具仏性，与弥陀無有異。

可觀

「勸修西方說」；壇經批判，唯心本性在我。

「雕弥陀香像頌」(「解空法師弥陀尊像讚」)；白玉我心，紫金我性。

吳克己

「刊往生行願略伝序」；我心本具妙法。

冲黙

「十六觀近体詩」；樹觀，珠光自心，像觀，直指心源。

可旻

「懷西方詩」；本性唯心。

「讚淨土漁家傲並序」；本性弥陀，唯心淨土。

(律系)

元照

『觀經義疏』；淨土自心，弥陀自性，是心是仏，慈雲云，利根達理一切唯心，鈍根未達專依事行，法性土謂唯心淨土。

「無量寿仏讚」；本性之弥陀，唯心之淨土。

「開元寺三聖立像記」；諸仏法界身，相即非相，理事一如，眞俗不二。

戒度

「追和泐明婦去来辞」；唯心本具。

『觀經扶新論』；唯心本性。

『觀經義疏正觀記』；淨土自心，弥陀自性，唯心淨土，本性弥陀。

『無量寿仏讚註』；唯心淨土，本性弥陀，唯心本性，(正因跋；唯心本性)

(華嚴系)

義和

「華嚴念仏三昧無盡燈序」；解脫長者，唯心念仏，諸仏心内衆生，衆生心中諸仏，弥陀本師說。

(禪系)

楊傑

「浄土十疑論序」；聖凡一体，諸仏心内衆生，衆生心中浄土。

「直指浄土決疑集序」；去実無去，華嚴解脱長者云，三種不信心，处处浄土，唯心浄土，自性弥陀。

「建弥陀宝閣記」；一切相為非相，一浄土而無量浄土，無念而念。

「安樂国讚三十章」；浄土周沙界，無生即是生，心浄土浄説。

「宗鏡録序」；諸仏心是衆生心，唯心偈。

王仲回

「王司士伝」；祖師批判，理地無仏無衆生，以理奪事，以事奪理。

王古

「浄土宝珠集序」；心浄土浄説，弥陀心内衆生，衆生心内浄土，本性之無量光，唯心之安養国。

「寂照集揀西方要義」；六祖壇經，智者知心是仏，愚人愛往西方，法有隱顯，根有利鈍。

宗蹟

「觀無量寿仏経序」；随心浄土，極楽方寸。

「蓮華勝会録文」；生而無生，第一義諦，唯心浄土，自性弥陀。

「勸念仏頌」；極楽眞法界，弥陀即自心。

「西方浄土頌」；西方在目前，曾不離三千，方境了唯心，禪家批判。

守訥

「唯心浄土文」；頓者批判，吾学唯識，心外無法，生仏同体，弥陀自心，天衣義懐，唯心浄土。

守一

「澄江浄土道場記」；衆相具足，是心即仏。

懐深

「勸念仏頌」；自性弥陀仏。

宗杲

「妙喜老人跋」；自性之弥陀，唯心之浄土。

林鎬

「明師勝地論跋」；妙喜云，自性之弥陀，唯心之浄土。

海慧

「海慧禪師示心浄土浄」；伝燈録，心浄土浄説，浄穢在心。

(その他，居士)

程俱

「靈山安養菴記」；現前種種，安養界在一切処。

江公望

「念仏方便文」；肉団心現本性弥陀，五濁身遊唯心浄刹，唯心識觀，是心見仏，是心是仏。

王闖

「浄土自信録記」；直指本心，浄土自他即衆生之自心。

王日休

「浄土起信」；禪者批判，唯心浄土，自性阿弥，有理有事，論理唯心浄土，論跡[事]極楽世界。

「王虚中伝」；唯心本性。

張孝祥

「龍舒浄土文序」；弥陀即汝性，極樂即汝心。

鍾離松

「宝積蓮社画壁記」；自性弥陀，唯心安養，一以示万法唯心，一以指西方徑路。

(統天台系)

宗暁

「註(臨行自餞)」；唯心本性人人皆具。

「註(靈山安養菴記)」；心浄土浄説，心浄便見此土莊嚴。

「註(王司土伝)」；円觀事理，一念具足。

「弁心浄則国土浄」；禪宗批判，浄土唯心。

汪大猷

「樂邦文類序」；是心是仏，弥陀即我性，極樂即我心。

第三項 「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」の用語と先行思想

細かな言及は前節関係文に委ねるにしても、われわれは以上の主な要語と見解からだけでも極めて容易に唯心浄土思想の実に煩雑な諸相を分析し解明することができる。

そこで初めに果さねばならないことは、本稿冒頭で大前提とし、本章第一節「問題の所在」で再提示した課題の解明である。すなわち、第一に「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」の有無，第二にそれに伴う唯心の弥陀浄土か諸仏浄土かの判別，第三に宋代の諸資料からみた先行思想の確定等の解明である。これらの課題を明らかにすることによって、また新たな諸相が見えてきそうである。

まず第一に「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」の有無について取挙げて、整理してみよう。この両句は前代までには全く認められなかったもので、その明記こそ真に唯心浄土思想の確立に値するからである。

両句を明記する資料 14 部

知礼「復楊公請住世書」，齊玉「四十八願後序」，道琛「唯心浄土説」，可旻「讚浄土漁家傲並序」，元照「無量寿仏讚」，戒度『観経義疏正観記』，『無量寿仏讚註』，楊傑「直指浄土決疑集序」，宗蹟「蓮華勝会録」，宗杲「妙喜老人跋(龍舒浄土文跋)」，林鎬「明師勝地論跋」，江公望「念仏方便文」，王日休「浄土起信」(龍舒浄土文)，鍾離松「宝積蓮社画壁記」。

両句の省略形「唯心本性」を記す資料 4 部(※重出は除く)

道琛※「唯心浄土説」，可観※「勧修西方説」，可旻「懐西方詩」，戒度『観経扶新論』，※『無量寿仏讚註』並びに「正因跋」，王日休「王虚中伝」，宗暁「註(臨行自餞)」。

両句を明記しないが、同じ思想を説く資料 12 部

遵式『往生浄土決疑行願二門』，彦倫「念仏修心術」，元照『観経義疏』，楊傑「浄土十疑論序」，「建弥陀宝閣記」，王古「浄土宝珠集序」，「寂照集揀西方要義」，宗蹟「観無量寿仏経序」，「勧念仏頌」，守納※「唯心浄土文」，王闡「浄土自信録記」，張孝祥「龍舒浄土文序」，汪大猷「樂邦文類

序」。

以上が、「唯心浄土，本性弥陀(自性弥陀)」の明記 14 部，省略形「唯心本性」4 部，同じ両思想を説く資料 12 部。合計 30 部である。これらは唯心浄土思想，厳密には「唯心浄土」と「本性弥陀(自性弥陀)」の両思想を説くという形態から，第一類とする。

次いで，その他の資料から「唯心浄土」あるいは「本性弥陀(自性弥陀)」だけを説く資料を調べよう。

「唯心浄土」だけを明記する資料 5 部

有厳「懷安養故郷詩並序」(即心浄土)，陳瑾「陳了翁談唯心浄土」，道琛「円弁法師説唯心浄土」，守納「唯心浄土文」，宗曉「弁心浄則国土浄」(浄土唯心)。

「唯心浄土」を明記しないが，同じ思想を説く資料 19 部

遵式「往生正信偈」，智円『阿弥陀経疏序』，「西資鈔揀示偏讚西方」，仁岳「義学編論席解紛」，有厳「浄土修因或对」，「十六観頌」，丁注「讚諭弥陀偈」，可観「勧修西方説」，「雕弥陀香像頌」，「解空法師香像頌」，呉克己「刊往生行願略伝序」，冲黙「十六観近体詩」，楊傑「安楽国讚三十七章」，王仲回「王司土伝」，宗蹟「西方浄土頌」，海慧「示心浄土浄」，程俱「靈山安養菴記」，宗曉「註(靈山安養菴記)」，「註(王司土伝)」。

「本性弥陀(自性弥陀)」だけを明記する資料 1 部

懷深「勸念仏頌」。

「本性弥陀(自性弥陀)」を明記しないが，同じ思想を説く資料 8 部

知礼『観経疏妙宗鈔』，『観経融心解』，遵式「十六観頌」，從諫「示陳行婆頌」，道因「慶懺礼仏会疏」，「念仏心要頌並序」，思梵「念仏成就三力則易超往」，守一「澄江浄土道場記」。

以上が，「唯心浄土」だけの明記 5 部，同じ思想を説く資料 19 部，「本性弥陀」だけの明記 1 部，同じ思想を説く資料 8 部。合計 33 部である。これらは「唯心浄土」あるいは「本性弥陀」のいずれか一思想を説くという形態から，第二類とする。

従って，「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」の有無に係わる第一類 30 部と第二類 33 部の総計は 63 部である。この分類を判り易く図示すると次のとおりである。

	明記	同じ思想	合計	
第一類	「唯心浄土，本性弥陀」 (自性弥陀)	18 部	12 部	30 部 (「唯心本性」含む)
第二類	「唯心浄土」	5 部	19 部	24 部
	「本性弥陀(自性弥陀)」	1 部	8 部	9 部
	24 部	39 部	63 部	その他 4 部

ところで，前節「唯心浄土思想の関係文」で指摘した宋代の総資料数は 38 師 67 部であった。いま整理した「唯心浄土，本性弥陀」，「唯心浄土」あるいは「本性弥陀」の明記と同一思想は 63 部である。そこに外れた 4 部は何であろうか。「唯心浄土，本性弥陀」でないゆえに外されたのであるから，おそらく「唯心の諸仏浄土，本性の諸仏」と予想される。それは第二の課題，唯心の弥陀浄土か諸仏浄

土かの判別に属する。ところで、前号での関係経論、先行思想、永明延寿の浄土思想の殆んどすべては唯心の諸仏浄土関係資料であった。唯心の弥陀浄土思想は未だ成立していなかったからである。それに較べて宋代に唯心の諸仏浄土思想が極端に少ないのは何故であろうか。これまでの考察に重なるミスがあったのであろうか。また新たな疑問が提示されたが、ここでは部数は僅か4部と極めて少ないので直ちにその内容を吟味する。この疑問は第一の課題「唯心浄土、本性弥陀」の有無との関係で後に明らかにしよう。

いま外された4部の記述は次のとおりである。

楊傑「宗鏡録序」(大正48・415上)

衆生界即諸仏界，因迷而為衆生。諸仏心是衆生心，因悟而成諸仏。……心仏衆生三無差別。

義和「華嚴念仏三昧無盡燈序」(大正47・169下-170上)

又解脱長者，教以唯心念仏門。……，諸仏心内衆生，新新作仏。衆生心中諸仏，念念證眞。

……，唯西方弥陀世尊，接引娑婆衆生願力偏重，即本師故。

元照「開元寺三聖立像記」(大正47・186下)

或曰。経云，諸仏如来是法界身，入一切衆生心想中。……則山河国土草木…莫非諸仏法身之体。

戒度「追和溷明帰去来辞」(大正47・226中)

衆妙之門，唯心本具，眞性常存。

以上の4部を簡単に考証すると、楊傑「宗鏡録序」は前号第四章「唯心浄土思想の成立—永明延寿の浄土思想」で認めたのであり、それゆえ弥陀浄土の言及は一語も無い。それよりも大著『宗鏡録』の唯心浄土が諸仏浄土であることは前章で立証したとおりである。次の義和「華嚴念仏三昧無盡燈序」は延寿を継ぐ唯一の華嚴系資料として重要であるが、一部に「弥陀世尊」とあっても華嚴本師説で、唯心浄土思想の言及「諸仏心内衆生……。衆生心中諸仏……」は明らかに唯心の諸仏を意味する。従って、この2部は唯心諸仏思想である。元照「開元寺三聖立像記」の三聖は弥陀三尊「三聖立像，見于觀無量寿仏経」であるし、戒度「追和溷明帰去来辞」も「帰去来」は浄土往生を意味するから⁽¹⁾、いずれも弥陀浄土資料である。また、元照—戒度の師弟両師には別に「唯心浄土、本性弥陀」明記資料もあるから明らかに唯心弥陀浄土思想家である。しかし、当該文に限っては「会通」ともかく、この記述を唯心弥陀と特定はできない。従って、以上の4部の当該文は弥陀浄土思想ではないが、しかし、唯心浄土思想であることは否定できない。

さらに、この立場から細かく注意すると、

道因「慶饑礼仏会疏」(大正47・213下)

衆生心中之諸仏，……諸仏心中之衆生。

宗蹟「觀無量寿仏経序」(大正47・167上)

夫正遍知海，從心想生。諸仏世界，随心浄土。

同「蓮華勝会録文」(大正47・177中)

念而無念，生而無生者，第一義諦也。……則上無諸仏之可念，下無浄土之可生。

王闡「浄土自信録記」(大正47・209下)

其意若曰，浄土自他，凡聖因果，即衆生之自心耳。

などの言及も、われわれはその全文から判断すると弥陀の唯心浄土思想に特定できるが、当該文に限定すれば、諸仏の唯心浄土思想である。こうした事例は、諸師が弥陀の唯心浄土思想を説く場合にも、絶えず仏教思想全体、従って諸仏の唯心思想を基盤として主張していることをわれわれに教えている。唯心浄土思想の解明は弥陀浄土教に限ってでは不可能なのである。ここでもまた一つ、思想形態の解明に手がかりを見出した。

それにしても、諸仏の唯心浄土思想の言及が少ないのは何故であろうか。ここに宋代浄土教の特徴を示す重要なポイントが隠されているようである。

以上、第一の課題「唯心浄土、本性弥陀」の有無、それに伴う第二の課題、唯心の弥陀浄土か諸仏浄土かの判別を整理し、また新たな課題と手がかりを見出した。そしてわれわれは、この分類から宋代に確立した唯心浄土思想についての全く新たな、実に重要な特徴と性格を学ぶことができる。初めに第一類、第二類夫々から知られる特徴を指摘し、次いでそれに伴う諸仏の唯心浄土思想資料が少ない理由とそれに係わる中国浄土教全体から示唆された重要な要因について論及しよう。

まず「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の明記 18 部、明記しないが両思想を説く 12 部、合計 30 部の第一類であるが、それは弥陀の唯心浄土思想資料 63 部の約半数に当る。

この項目で指摘される第一は、ここで初めて「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」が連記された。それは画期的なことである。弥陀の唯心浄土思想を経典から先行思想と探り続けた前号までの長い過程はただこの両句に辿り着くためにあった。これまで「唯心浄土」の用語は李通玄(635-730)、永明延寿(904-975)にあったが、いずれも諸仏浄土の意味で、弥陀浄土ではなかった。それが「本性弥陀(自性弥陀)」と連記されることによって、間違いなく「唯心浄土」は弥陀浄土を意味した。一方、「本性弥陀(自性弥陀)」の用語については、これまで全く見出せず、ここで初めて使われた。この点で初めて用いた四明知礼(960-1032)は名実ともに唯心浄土思想の最初の提唱者とすべきである。

第二は、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の明記は唯心浄土思想が初めて完全な形で姿を見せたことを意味する。「唯心浄土」と「本性弥陀(自性弥陀)」は浄土思想大系で言えば、前者は浄土観、後者は仏身観に収まり、浄土と弥陀は不即不離とはいえ、古来伝統的に「依正二報」で解釈されている⁽²⁾ 従って、これまでの先行思想では二系統で探求し、大きな矛盾もなかった。この連記は二系統の完全な統一を意味している。なお、日本仏教との関係を再説すると、今日仏教辞典で使われている「己心弥陀」という用語は、いまのところ中国仏教では一つも見出していない。「己心弥陀」はどうも日本天台からの用語らしい⁽³⁾ 従来の研究の中には、この用語があたかも中国で使われるかのような論考があるのは疑わしい。

第三に、このように「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の両句は唯心浄土思想の確立を端的に示す重要な用語であるが、それでは両句が定型句として中国で市民権を獲得し定着しているかと言うと、必ずしも明らかでない。関係資料総数 67 部の中で明記は僅か 18 部であり、残り 12 部は同じ唯心浄土思想を説きながらも明記していないから、定型句としては定着していなかったと考える方が無難である。しかしまた、第二類の「唯心浄土」明記 5 部、「本性弥陀(自性弥陀)」1 部、合計 6 部との関係で言えば、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」明記 18 部は多いから、唯心浄土思想を端的に示す代表的用語であることには変りない。従って、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の用語は中

国では定着しなかったが、しかし、唯心浄土思想を示す代表的用語であった、と言うのが穏当な理解であろう。それにしても、今日宋代浄土教の特徴として唯心浄土思想が喧伝されているわりには、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の明記が少ないのはやや意外であった。従来、こうした実証的研究がなされないままに著名な唯心浄土思想に限って研究されていたことの証左であろう。

次に、「唯心浄土」明記 5 部、同思想 19 部、合計 24 部と「本性弥陀(自性弥陀)」明記 1 部、同思想 8 部、合計 9 部の第二類であるが、いずれも第一類 30 部に較べて少ないから、両者とも単独では定着していないと考えてよい。

「唯心浄土」については、明記 5 部と少ないが、同じ思想を説く資料 19 部、さらに第一類 30 部にも説かれるから総数 54 部で、内容的には「唯心浄土」に関する思想が圧倒的に多い。このことは今日われわれが使う「唯心浄土思想」という用語が極めて的確な熟語であることを示す。すでに分類したように唯心浄土思想を意味する用語は「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の両句、単独の「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」であった。それを総称してわれわれは「唯心浄土思想」と呼んでいるが、この用語の厳密な概念規定はこれまでなされたことはなかった。ここでの分類整理はデータとして「唯心浄土思想」の用語が最も正しいことを立証する。これも新たな知見である。

「本性弥陀(自性弥陀)」については、明記 1 部、同じ思想 8 部、第一類 30 部、総計 39 部と少ない。それによって、この用語が定着しなかったこと、唯心浄土思想を「本性弥陀思想」あるいは「自性弥陀思想」と総称できないことも納得できよう。

ところで、唯心の弥陀思想については、本稿では「本性弥陀(自性弥陀)」と記した。それは資料によって「自性弥陀」とも書かれるからである。ここに対称的な現象がみられるので、両用語の出典を挙げる。

「本性弥陀」の資料

知礼「復楊公請住世書」、齊玉「四十八願後序」、道琛「唯心浄土説」、可旻「讚浄土漁家傲並序」、元照「無量寿仏讚」、戒度『観経義疏正観記』、『無量寿仏讚註』、江公望「念仏方便文」。

他に「唯心本性」；道琛「唯心浄土説」、可旻「懷西方詩」、戒度『観経扶新論』、(王日休)「王虚中伝」、宗曉「註(臨行自餞)」。

「自性弥陀」の資料

楊傑「直指浄土決疑集序」、宗蹟「蓮華勝会録文」、懷深「勸念仏頌」、宗杲「妙喜老人跋」、林鏞「明師勝地論跋」、王日休「浄土起信」、鍾離松「宝積蓮社画壁記」。

分類して初めて気づいたことだが、一読して「本性弥陀」は天台系、「自性弥陀」は禅系と別けられる。就中、律系の元照は天台教学に造詣が深く、居士楊傑・王日休は禅者と交わりがあることは前節で述べた。従って、「本性弥陀」は天台系の、「自性弥陀」は禅系の用語と考えてよい。その初出は「本性弥陀」は知礼、「自性弥陀」は楊傑であるが、知礼はともかく、楊傑が「自性弥陀」の最初の人か、当時両宗にこうした用語の規定があったかどうかはなお検討の余地がある⁽⁴⁾

以上、第一類「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」、第二類「唯心浄土」「本性弥陀(自性弥陀)」夫々の項目から知られる特徴を指摘した。いずれも唯心浄土思想の確立についての新たな知見と思われる。

なお、ここで第一、二類の用語の有無について補註する。「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の有無は本稿当初からの課題で、本節に入ってそれは解決したが、しかし、本節では明記されないにもかかわらず、39部を同じ思想を説く資料と無前提に規定した点である。これは前節までの峻別と矛盾する。しかし、これらの資料はいずれも明らかに弥陀浄土資料で、しかもすでに「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」が明記され標榜された同時代の思想という点でそれ以前の諸宗の資料と質的に異なる。この点で明記されないとしても、弥陀の唯心浄土思想と査定してよいであろう。以降も同様に扱うこととする。

唯心浄土思想を端的に示す用語、第一類と第二類から幾つかのことを学んだわれわれは、ここで前に留保した第二の課題から提起された疑問、諸仏の唯心浄土思想資料が僅か4部と極端に少ない理由を考えることにしよう。

まず容易に気づく理由の第一は、ここでの調査資料は弥陀浄土思想に限られたものからの関係文という点である。中でもその大半を抄出したのは『楽邦文類』収録であるから、弥陀浄土の資料ばかりであるのが当然である。従って、前の4部のうち『楽邦文類』収録の3部(義和「華嚴念仏三昧無盡燈序」、元照「開元寺三聖立像記」、戒度「追和瀧明婦去来辞」)は編者宗暁の会通であり、楊傑「宗録録序」は偶々眼に触れた資料である。また、細かな言及にみられる諸仏の唯心浄土思想もあくまでも弥陀浄土を前提としたという制約がある。むしろ本章の関係資料すべては弥陀浄土資料を前提としている点で、前章までの関係資料と決定的に異なることが重要である。それゆえに、宋代は唯心弥陀浄土思想の確立なのである。この重要性は第一類・第二類の資料の分析で評価したとおりである。本章の関係資料は『楽邦文類』を主としているがゆえに、諸仏の唯心浄土思想資料が少ない、というのが第一の大きな理由である。

そこで当然のことながら、それでは宋代仏教全体の中で諸仏の唯心浄土思想はどうかという疑問が提起される。このことは楊傑「宗録録序」が正にそうであり、前号までの先行思想の幾つかが浄土教資料ではない諸宗の代表的論書からの関係文であった。もとより、こうした宋代仏教すべての資料からの調査は要求されるし、また新たな関係文の存在も予想される。しかし、それはいまの筆者の力量及ぶところではないし、すでに「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」が明記され標榜されている以上、弥陀の唯心浄土思想を主眼とする本稿では最早大きな意味を持たないであろう。このことは冒頭「問題の所在」で規定した⁽⁵⁾

以上のように、諸仏の唯心浄土思想資料が極端に少ないのは『楽邦文類』を主とする弥陀浄土思想典籍に限定したから、と言うのが一番の理由であるが、ここで中国浄土教全体に係わる重要な要因を提示したい。

それは、浄土教の最も重要な「浄土」の用語と「浄土教」の概念がそれまで「諸仏浄土」「諸仏浄土教」も含まれていたのに対して、宋代になって「弥陀浄土」「弥陀浄土教」に専有されたという点である。

あるいは本稿以上に極めて重要な課題で、詳しい論証は別にゆずるが⁽⁶⁾ 代表的成果を紹介すると、

「浄土」という成語は羅什によって作られたが、本来「諸仏の浄土」を意味し、「弥陀の浄土」でなかった。それが曇鸞・道綽によって「弥陀の浄土」に使われ、「浄土教」が成立した。

という平川彰博士の見解である⁷⁾しかし、博士の見解は初期の漢訳経論と曇鸞・道綽に限定されて、中国浄土教全体に及んでいない。

そこで中国浄土教全体の中から「浄土」の用語を漢訳浄土経論の訳語、中国浄土教典籍の題名、中国仏教の主な浄土観、中国浄土教の主な高僧の用例、往生伝類の用語、現代中国仏教の用語と分類して調べると、すべての分野が共通して示唆する「弥陀浄土」は宋代からの資料で、隋唐代までの「浄土」の用語は「諸仏浄土」と「弥陀浄土」が、所謂〈善導流〉を除いて、両義認められる。

当面、本稿の唯心浄土思想に限ると、冒頭「問題の所在」以来、諸仏浄土と弥陀浄土の峻別を異常なまでに注意し、また、先行思想までその通りの展開であったことが両義の存在を端的に実証する。

若し、宋代になって、「浄土」は諸仏浄土でなく、弥陀浄土を指すようになったという宋代浄土教の、この新たな重要な見解が正しければ、諸仏の唯心浄土思想資料の少ない理由も納得できる。そして、この見解は宋代仏教の全資料を調査しても、おそらく諸仏の唯心浄土思想資料は少ないことを予言する。果してどうかは別な課題とする。

以上、「問題の所在」で提起した課題の第一「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の有無、それに伴う第二の弥陀浄土と諸仏浄土の判別について分析し考証した。それによって、唯心浄土思想の幾つの特徴、ひいては宋代浄土教に係わる重要な見解が知られたであろう。

それでは、第三の課題、宋代の唯心浄土思想からみた主な経典、先行思想はどうかであろうか。

初めに、すでに指摘した主な経典と先行思想の題名(要語)を再出し、『楽邦文類』宗曉附載に倣って、それを引用するその後の先行資料と宋代の唯心浄土思想資料を挙げる。それによって、唯心浄土思想の確立に至る展開と唯心浄土思想にとって何が最も重要な典拠であるかが資料的に立証される。

主な経典

『観無量寿経』「第八像観約心観仏」

曇鸞『浄土論註』、慧遠『観経義疏』、善導『観経疏』、懷感『釈浄土群疑論』、道信(『楞伽師資記』)、李通玄『新華嚴経論』、澄観『華嚴経疏』、智顛偽撰『天台観経疏』、延寿『宗鏡録』、『万善同帰集』。

知礼『妙宗鈔』、『融心解』、遵式『往生浄土決疑行願二門』、「十六観経頌」、有嚴「十六観頌」、彦倫「念仏修心術」、道因「念仏心要頌並序」、冲黙「十六観近体詩」、元照『観経義疏』、「開元寺三聖立像記」、戒度『観経扶新論』、『観経義疏正観記』、宗蹟「観無量寿仏経序」、江公望※「念仏方便文」、宗曉「専談浄土経論」、汪大猷「楽邦文類序」。

『般舟(三昧)経』「修仏立三昧専念弥陀」(同本異訳『方等大集経』)

智顛『摩訶止観』、堪然『輔行釈』、延寿『宗鏡録』、『万善同帰集』。

知礼『妙宗鈔』、『融心解』、遵式『往生浄土決疑行願二門』、江公望「念仏方便文」、宗曉「専談浄土経論」。

『六十華嚴経』〈唯心偈〉

遵式『往生浄土決疑行願二門』、「依修多羅立往生正信偈」、楊傑「宗鏡録序」。

『四十華嚴經』「解脱長者得唯心念仏門」

澄観『清涼貞元疏』，延寿『宗鏡録』，『万善同帰集』，『心賦注』。

義和「華嚴念仏三昧無盡燈序」，楊傑「直指浄土決疑集序」，宗曉「專談浄土経論」。

『如来不思議境界経』

延寿『宗鏡録』，『万善同帰集』。

『維摩経』〈心浄土浄説〉

智顛偽撰『浄土十疑論』，慧能(『六祖壇経』)。

遵式「依修多羅立往生正信偈」，丁注「讚諭弥陀偈」，楊傑「安楽国讃三十章」，王古「浄土宝珠集序」，海慧「海慧禅師示心浄土浄」，宗曉「註(靈山安養菴記)」，「弁心浄則国土浄」。

先行思想

『天台観経疏』

延寿『宗鏡録』。

知礼『妙宗鈔』，道因「念仏心要頌並序」。

『浄土十疑論』

延寿『万善同帰集』。

仁岳「義学編論席解紛」，楊傑「浄土十疑論序」，「安楽国讃三十章」，王古「浄土宝珠集序」，宗曉「蓮華勝会録文」。

『六祖壇経』

可観「勸修西方説」，王仲回「王司士伝」，王古「寂照集揀西方要義」。

以上、限られた資料に明示される記述であるからその数は極めて少ないが、⁽⁸⁾それゆえに最も確かな影響関係を立証する。さらに資料全体に当れば多くの引用経典・先行資料が見出せるが、ここでは当該資料に限って知られる確かな展開と重要な典拠を指摘するにとどめる。

まず、唯心浄土思想の典拠として最も重視された経文は、当初から予想されたことであつたが、『観無量寿経』第八像観「是心作仏，是心是仏」である。『観経』はすでに隋唐代でも諸註釈書、諸師の引用で知られたように主要な経典であつたが、しかし、当該経文によって唯心浄土思想を主張するには至らなかつた。それゆえ、正確には唯心浄土の思想として大きく底流していた。その中でも七世紀後半から八世紀前半頃に智顛に仮託して作られた『天台観経疏』が後の天台浄土教に与えた影響は大きい。やがて知礼が本疏を精緻に注釈した『同妙宗鈔』六巻を著わすことによって、唯心浄土思想は初めて歴史の表面に姿を現わす。知礼は“「是心作仏，是心是仏」こそ〈一心三観〉であり、『観経』の総体，妙宗である”(「作是一心修者乃不思議三観。十六観之総体，一経之妙宗」『妙宗鈔』巻四)とまで高く評価し、「唯心之浄土，本性之弥陀」を初めて明記し標榜した。因みに延寿『宗鏡録』にも当該経文は引用されるが、弥陀浄土思想の言及ではなく、また、彼の「唯心浄土」は『如来不思議境界経』による諸仏浄土で、弥陀浄土でなかつた。このことは前章で詳論した。知礼の唯心浄土は「本性之弥陀」と連記されるゆえに疑いなく唯心弥陀浄土思想である。やがて知礼門下が趙宋天台の主流になるから、そこでの唯心浄土思想の典拠はことごとく『観経』〈是心是仏〉の経文にあると言っても過言でない。加えて、天台系以外の諸師もこの経文を引用していることは資料が示すとおりである。

『観経』〈是心是仏〉と同じ思想を説く『般舟三昧経』は智顛の〈常行三昧〉の典拠としてあまりにも有名である。やがてこの常行三昧(般舟三昧)は堪然の解釈から遠く比叡山の常行三昧堂につながり、そこから法然・親鸞の浄土教へと新たな発展を遂げる。中国浄土教でも最初期廬山慧遠(334-416)定中見仏の典拠となり、遙か後世、宗暁・志磐による蓮社(蓮宗)の系譜の共通思想になった。蓮社第二祖善導と言えども般舟三昧行者と考えられた。このように本経の影響は大きく、唯心浄土思想にとっても有力な典拠であったことは誤りでない。しかし、『天台観経疏』から知礼『同妙宗鈔』の系譜がはるかに強く、主流は『観経』に移行したことが資料に現われている。

華嚴経類では、とくに『四十華嚴経』「解脱長者得唯心念仏門」のみ「安楽世界無量寿如来」の記述があり、資料を辿れるのは宗暁「専談浄土経論」の功績である。他の二経は阿弥陀ではなく、唯心諸仏思想であるが、華嚴・天台・禅を代表する唯心浄土思想家たち(延寿・遵式・楊傑)に引用されていることは、宗派を越えた融合的宋代仏教の特徴を示している。

以上の経典がいずれも唯心諸仏思想であるのに対して、『維摩経』〈心浄土浄説〉のみ唯心諸仏浄土思想である。それを経証とする『浄土十疑論』が天台宗に、『六祖壇経』が禅宗に及ぼした影響は極めて大きく、唯心浄土思想の有力な典拠となった。

これら僅かな経典からも、その思想内容によって唯心の諸仏思想と諸仏浄土思想の二系統があり、いずれも弥陀浄土思想ではなかったが、後に唯心弥陀浄土思想に引用され、しかも宋代には宗派を超えて唯心浄土思想の典拠とされたことが知られる。その中でも主要な浄土経典『観経』〈是心是仏〉の経文が主流であったことを諸師の引用は示している。

次いで、先行思想についてはいま辿った主な経典の引用資料に収まるから再説しない。新たな見解を加えれば、智顛偽撰『浄土十疑論』の宋代浄土教に及ぼした影響も『天台観経疏』と同様に大きく、その一端が示されている。『六祖壇経』については西方浄土批判(「迷人念仏求生彼[西方浄土]、悟人自浄其心」大正48・352上)であり、善導の指方立相論と対立する説である。それをどう解釈するか。唯心浄土思想と指方立相論との関係は本節初めに宋代浄土教の特徴から提起された課題であった。宋代の唯心浄土思想では『六祖壇経』の影響をうけて指方立相論を否定したのか肯定したのか、後の具体的思想形態で明らかにしよう。

以上、主な経典、先行思想の展開を明示された資料に限って辿り、宋代の唯心浄土思想の典拠を明らかにした。これらは数は少ないが、明示されているがゆえに極めて説得力がある。

最後にこの全体から示唆される留意点と課題を確認して、第三の課題の結びとする。

第一に、ここで指摘された諸資料の相互関係のほぼすべては宗暁『楽邦文類』の功績という点である。極く一部は新たな現存資料であるが、他の多くは『楽邦文類』によって知られたのであり、また「専談浄土経論」と附載資料なくしては、われわれはその多くを看過したであろう。宗暁『楽邦文類』の中国浄土教史における評価はすでに本章第二節「唯心浄土思想の諸資料—『楽邦文類』の関係資料—」で述べたが、本書は宋代浄土教研究に豊富な資料を提供するだけでなく、共通思想を繋ぐことによって中心浄土教の系譜すらも示唆する。唯心浄土思想の実態も宗暁『楽邦文類』ゆえに可能になったことを銘記すべきである。

第二に、ここでも唯心浄土思想の最初の提唱者永明延寿の宋代での影響は資料的に明らかでな

い。すでに前号第四章「唯心浄土思想の成立—永明延寿の浄土思想—」で詳論したように、大著『宗鏡録』百巻には洪水の如く膨大な経論・典籍が引証され、その中に唯心浄土思想の主な經典・先行資料も含まれている。しかし、それらは唯心思想の典拠であって、唯心浄土思想の典拠は『如来不思議境界経』だけである。それよりも気になることは、宋代の唯心浄土思想資料には延寿著述の引用が『楽邦文類』に至るまで無いという点である。確実な引用による実証的研究を意図する本稿では、延寿の唯心諸仏思想は宋代の唯心弥陀思想の先行思想でないとして再び保留しておく。

なお、ここでは経論名、先行典籍名を唯心浄土思想関係文に限って指摘したので、その数は非常に少なかった。しかし、諸師の浄土思想全体から見ればさらなる先行思想は見出せるし⁽⁹⁾、共通思想となるとまた新たな諸相も認められる。こうした点からの指方立相論との関係、延寿の影響等の解明は次の課題としよう。

第三の課題、宋代の唯心浄土思想からみた主な經典、先行思想を総括すると、唯心浄土思想の典拠としての經典は『觀無量寿経』〈是心是仏積〉、『般舟三昧経』〈常行三昧〉、華嚴経類〈唯心思想〉、『維摩経』〈心浄土浄説〉であるが、最大の経証は『觀無量寿経』〈是心是仏積〉で、やがて『天台觀経疏』『浄土十疑論』から知礼・遵式に展開する天台系唯心弥陀浄土思想の主流の系譜となる。一方、『維摩経』〈心浄土浄説〉は『六祖壇経』の西方浄土批判説を経て、禅系唯心浄土思想の系譜となり、両系譜が融合して弥陀の唯心浄土思想が確立した。これらの經典・先行思想は宋代の唯心浄土思想の依って立つ強力な思想基盤である。融合的とは言え、唯心浄土思想の主要な形態と論拠はどうやら天台系と禅系に集約されそうである。

- (1) たとえば、「出家楽讃」、「帰西方讃』『浄土五会念仏法事讃』広略二本(大正47・483下, 大正85・1247中, 1261中下), 塚本善隆『唐中期の浄土教』242, 254-255頁, 金岡照光『敦煌の文学』131-133頁。
- (2) 前号第一章「従来の見解と問題の所在」4-7頁, 神子上恵龍『弥陀身土思想の展開』(『弥陀身土思想展開史論』) 仏身篇, 仏土篇。
- (3) 前号第一章4-7頁, 次章「附 日本仏教における唯心浄土思想」87-89頁参照。
- (4) 「唯心之浄土, 本性之弥陀」の嚆矢は知礼であるから、「本性弥陀」を知礼とすることに異論ないが、「自性弥陀」を楊傑とするには彼の師天衣義懐も唯心浄土思想家(守納「唯心浄土文」)であり、同時代の宗蹟も用いるから一概に言えない。ただ、その先行思想として『六祖壇経』には「自性」の用語が多く(たとえば「無上菩提之自性也」、「何期自性本自清浄, ……自性本不生滅, ……自性本自具足」, 「吾与説一体三身自性仏」など, 大正48・348下, 349上, 354中, 忽滑谷快天『禅学思想史』上巻389-390頁), とくに西方浄土往生批判を説く項では「自性迷即是衆生, 自性覺即是仏, ……平直即弥陀」(352中)とあるが最も有力な典拠と思われる。従って、「自性弥陀」の用語が『六祖壇経』に由来することは確かであろう。
- (5) “本稿ではあくまでも弥陀浄土を意味する唯心浄土思想を主眼とし……。” 前号第一章4頁。
- (6) 本稿執筆と並行してこの数年, 中国仏教における「浄土」の用語と「浄土教」の概念について調べている。その目的は, 羅什によって作られた「浄土」の用語は本来「諸仏浄土」であったにもかかわらず, 何ゆえ何時から「弥陀浄土」を指すようになったかを漢訳経論から中国典籍まで洗い直し, 引いては複雑多様な形態を持つ中国浄土教全体の概念規定を明確にしたように意図しているからである。その一端はすでに発表した(拙稿「訳語としての阿弥陀仏の「浄土」」『印度哲学仏教学』第7号, 同「中国仏教における「浄土」の用語」, 『宗教研究』第299号), 詳論は別に予定している。

この研究の直接の動機は本稿執筆中で, 本来諸仏浄土の唯心思想が宋代に入って弥陀の唯心浄土思想に忽然と変容し確立する。まさに「諸仏浄土」から「弥陀浄土」への大転換である。従って, 本稿では「浄土」が諸仏浄土か弥陀浄土かを峻別することが必須である。そしてこのことは中国仏教における「浄土」の用語についても両義あるこ

とを教える。とくに本稿で厳しく注意したのは、永明延寿の浄土思想(前号第四章)である。従来、日本浄土教の感覚に慣れて、われわれは「浄土」と言えば無前提に「弥陀浄土」と考えているようである。

(7) 平川彰「浄土思想の成立」, 「浄土教の問題点」, 「浄土教の用語について」『平川彰著作集』第七巻。

(8) その他, 細かな引用資料としては,

曇鸞『浄土論註』→道綽『安楽集』→延寿『宗鏡録』。

道綽『安楽集』→延寿『宗鏡録』, 『万善同帰集』, 有厳「浄土修因或对」。

延寿『宗鏡録』→楊傑「宗鏡録序」。

遵式「依修多羅立往生正信偈」→元照「観経義疏」, 戒度「観経義疏正観記」(統蔵1・33・1, 16)。

天衣(義)懐→守納「唯心浄土文」, 明智(中立)→陳瑾「陳了翁談唯心浄土」

などが認められる。

就中, 延寿『宗鏡録』巻22の曇鸞『浄土論註』引用は僅か1個所で, 当時『論註』の存在は疑わしい(青山法城「『往生論註』流伝に関する一考察」『宗教研究』第299号)。『宗鏡録』には道綽『安楽集』が4個所引用され, 『論註』当該文(二種法身)も『安楽集』に引用されているから, 『宗鏡録』の『論註』は『安楽集』からの引用と補正する。なお, 道綽・善導の中国後世への流伝は一部に認められても(道端良秀「宋代以後の浄土教と善導」『中国浄土教史の研究』, 山本仏骨「道綽教学の研究」142-173頁, 佐藤成順「中国と日本における善導観」『中国仏教思想史の研究』など), 曇鸞については未明である。後の課題とする。

遵式→元照, 戒度。義懐→守納。中立→陳瑾については望月信亨『中国浄土教史』369, 396, 403頁参照。

(9) ここでは唯心浄土思想関係文に限ったが, たとえば遵式『往生浄土決疑行願二門』の「決疑門」が『浄土十疑論』(「第一決疑門者……或曰, 天台智者已有釈十疑論。何須此文。然略由三意」大正47・145上)に由ることは良く知られている。高雄義堅『中国仏教史論』169-173頁。

第四項 天台系・禅系唯心浄土思想と諸問題

これまで, 宋代唯心浄土思想についての宋代浄土教全体との関係, 「問題の所在」で提起された諸課題の解明をなし終え, すでに唯心浄土思想の具体的形態の一部と新たな知見と課題を得た。そこで本項では, これまでの考察が共通して指示した主要な天台系・禅系唯心浄土思想の形態と論拠を取挙げ, それに係わる諸問題と新たな疑義を探究する。

具体的思想形態については前節38師67部のとおりであるが, 諸師諸資料夫々の立場・内容が異なるために一貫した支柱のないこと, 実はそれが唯心浄土思想の特徴であることをすでに宋代浄土教全体から学んだ。従って, われわれには依然として38師67部すべてを考証する義務が課せられている。しかし, それが歴大な論述になることは前章「永明延寿の浄土思想」あるいは知礼・遵式等に関する先学の研究が示すとおりである。しかも本稿では宋代唯心浄土思想の総合的成果を意図している。どうしたらそれが可能であるか。われわれは再び原点に戻って諸資料を分析し考証することから始めよう。それはまた, これまでの論述の可否を検証することにもなる。

こうして原点に戻ると, これまでの論述の中には実は思想形態に係わる幾つかの重要な示唆が語られていることに気づく。まず初めにそれらを整理し, 思想形態の最初の要点としよう。

これまでの論述から教えられる第一は宋代唯心浄土思想の代表的思想家は誰れか, その思想形態は何かである。

それを知るには再び第一節「従来の見解と問題の所在」に学ぶのが好便である。それはまた独断と偏見を避けるためと本稿立論の客観性を保証するためでもある。

従来の見解では, 知礼「観無量寿仏経疏妙宗鈔」三文, 遵式『往生浄土決疑行願二門』二文, 元照

『観無量寿仏経義疏』, 守納「唯心浄土文」, 道琛「唯心浄土説」の関係文が紹介され, さらに参考資料として知礼『観経融心解』, 智円「西資鈔」, 王日休『龍舒浄土文』, 宗曉『楽邦文類』などが挙げられていた。これだけでもわれわれは天台系(知礼・遵式・智円・道琛・宗曉), 律系(元照), 禅系(守納・王日休)の大略を知ることができた。その後の研究成果を見ても彼等に集中している。しかし, 本稿で従来の見解を不満とした理由はそれ以外の多くの資料の調査, 「唯心浄土, 本性弥陀(自性弥陀)」の有無等の課題で, それらは先刻なし終えたところである。

ここで, 従来の見解で指摘された代表的唯心浄土思想家の要点を略述すると, 名実ともにその筆頭は「唯心之浄土, 本性之弥陀」を標榜した最初の四明知礼(960-1028)である。しかし, 彼の唯心浄土思想を含めた思想体系はすでに安藤俊雄博士の精緻な研究があり,⁽¹⁾ 最早贅言を要しない。その代表的資料が『観経疏妙宗鈔』で, 端的な一文が「是心是仏釈」であることは再三指摘した。ここで注意すべき主張を一点だけ挙げると, 唯心浄土と現象世界(従って西方浄土)の関係で, 正確を期すために安藤博士の説明を引用する。

知礼はむしろ眼対の弥陀を見ることを積極的に肯定する。すなわち妙宗鈔卷二に云う。

雖従心相, 如在目前。故云与眼作対。……, 知色唯心, 知心唯色, 五眼所対, 尚体唯心。……。

この目によって見ることのできる弥陀の依正を眼対の依正と名付ける⁽²⁾

すなわち, 知礼の唯心浄土思想は天台の「色心不二」の立場から⁽³⁾ 西方浄土を積極的に肯定するという点である。ここに天台系に殊の外, 唯心浄土思想家の多い大きな思想的要因が認められる。そして, その後知礼門下の天台宗が栄えることは唯心浄土思想家の輩出を予告しており, 実際にとおりの展開になっている。知礼は西方浄土を積極的に肯定する唯心浄土思想家があった。われわれは従来の見解による知礼一師の思想だけで, 唯心浄土思想と指方立相論(西方浄土)の関係について有力な論拠をえる。

次に知礼と同門の慈雲遵式(964-1032)は, 理論家知礼に対して実践家としてとくに称名十念の行業で知られるが,⁽⁴⁾ また関係文を読む限り唯心浄土思想家でもあった。しかし, 細かく注意すると彼の唯心浄土は上輩三品の理解と修行で, 続けて中下品とくに下下品の十念往生を説く(「上輩三品須解須行……。若其中下之流六品生因, 只是精持禁戒行世仁慈, 乃至下下品生本是惡逆, 十念精誠便生彼国」『往生浄土決疑行願二門』)⁽⁵⁾ から, 彼は上品の唯心浄土, 中下品の浄土往生と考えていた。この上根は唯心浄土, 中下根は浄土往生の機根論は当時の一般的浄土観であったようで, その他の事例は後に指摘しよう。ここでも唯心浄土と西方浄土の関係について, 知礼と異なる論拠をえる。

律の元照(1048-1116)が天台教学を学び, とくに遵式を引用する程の唯心浄土思想家であるが, 彼も「利根達理, 則一切唯心。鈍根未達, 則事依事行」とあるように機根論で唯心浄土と西方浄土を考えている。禅の守納「唯心浄土文」は唯識の立場から唯心浄土思想を主張(「吾嘗学唯識, ……心外無境, 境全是心。……生仏同体, 弥陀全是於自心」)するが, また西方浄土否定論者を批判(「然学頓者, 扞之為權説。不通理性者, 泥之於事相」)し, 決定して往生を求めよと結ぶ。天台の道琛「唯心浄土説」も「約事須当往生, 扞理即心而是」を議し, 円家の事理一体の立場から唯心浄土と西方浄土と認める。

以上は従来の見解で指摘された代表的唯心浄土思想の一端であるが、僅か五師に限っても思想形態には微妙な差異が認められ、さらに西方浄土[指方立相論]との解釈も異なる。ただ、代表的唯心浄土思想でありながら、いずれも共通して西方浄土を肯定している点は注意されてよい。それは唯心浄土思想が指方立相論を否定した形で成立したのではなかったことを予告している。

次いで、第二・三節では唯心浄土思想関係資料を調査し、38師67部を便宜的に分類し整理したが、概数は天台系19師34部、律系2師7部、華嚴系1師1部、禪系10師18部、その他(居士)6師7部であった。このことは便宜的であったにせよ、唯心浄土思想の諸形態が天台系・禪系にあることを指示する。そして具体的記述内容に入った本節では、宋代浄土教の特徴、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の用語、典拠の経典・先行思想の引用資料を取挙げた。ここでも主流は『観経』是心是仏釈→『天台観経疏』『浄土十疑論』→知礼『妙宗鈔』、遵式『往生浄土決疑行願二門』をはじめ各宗諸師関係文と『維摩経』心浄土浄説→『六祖壇経』西方浄土批判説→主に禪系・居士関係文であった。これらはそのまま宋代唯心浄土思想の依って立つ思想基盤であると同時に、天台系・禪系の思想形態を指示している。

以上のように、これまでの論述が共通して指示する宋代唯心浄土思想の諸相は、融合的であるとは言え、天台系・禪系の立場である。しかし、天台系は西方浄土を積極的に肯定し、禪系は『六祖壇経』の西方浄土批判説ゆえにそれをどう解釈し会通するかに分かれるようである。われわれは以上の要点を唯心浄土思想の諸形態の第一の特徴とし、以下に具体的思想形態の諸相を取挙げながら主な特徴を探究していこう。

そこで第二に、これまでの論述から指示された天台系、次いで禪系唯心浄土思想の諸相とそれに係わる諸問題について考え、次いで残された思想形態に言及しよう。

初めに、天台系唯心浄土思想の形態と諸問題を取挙げる。

われわれは天台学の中心思想として、一般的に天台性具説、一心三観、五時八教、一念三千論、性悪説、四種三昧等々を学んでいるが⁶⁾ 試みに「唯心浄土思想の主な要語」(前出)から天台関係の言及を抽出すると、

般舟三昧、約心観仏、心具心造、是心是仏釈、一心三観、心外無仏(知礼)、生仏体等、是心是仏、般舟三昧経、起信論、介爾心中(遵式)、心性之為体(智円)、天台智者、生即無生(仁岳)、無生妙観、理観相応(有巖)、即心観仏、唯心本具、是心是仏、心外無仏(彦倫)、明智法師、一念三千(陳瑾)、去則実無去(齊玉)、円家事理、十界四土本具、具足百界、只一三千、心具楽邦(道琛)、天台智者、実相為体、我与弥陀不二(道因)、本心自具仏性(思梵)、法華、我心本具妙法(呉克己)、是心是仏、慈雲云、理観事想、非相即相、理事一如、真俗不二(元照)、唯心本具(戒度)、聖凡一体、機感相応、無生即是生、以理奪事(楊傑)、生而無生、第一義諦、不離三千(宗蹟)、生仏同体、弥陀全是於自心(守納)、衆相具足(守一)、有理有事(王日休)、唯心本性人人皆具、円観事理(宗暁)

などである。さらに関係文前後の記述に当れば多くの天台典籍と要語が見出せる。しかもそれは天台系以外の諸師にも及んでいる。ここでは天台系唯心浄土思想を強調するあまりに一部牽強があったとしても、その多くは容認されよう。宋代唯心浄土思想は融合的であったが、強いて支柱を挙げ

るとすれば天台思想ということが要語を通して知られる。

それでは、この天台系唯心浄土思想からわれわれは何に注意し、何を学ぶか。

まず第一に、天台思想による限り西方浄土[指方立相論]は絶対的に肯定されるという点である。諸師夫々の主な立論は後の唯心浄土思想と指方立相論の関係で指摘するが、天台本来の思想からは西方浄土否定論は成り立たないという点を銘記すべきである。一般に天台性具説とは現実の差別・相対の現象世界に即して普遍・絶対の世界が本来的に具わっているという意味で、そこから一心三観、一念三千論、性悪説などが説明される。これを浄土観に適用すると、事相の西方浄土に即して唯心浄土は本来的に具わっているのであり、西方浄土なくしては唯心浄土も成り立たない。天台思想による限り必然的に西方浄土を肯定せざるをえないのである。もとより天台の四種浄土観では西方浄土は最下位の凡聖同居土で上位の常寂光土とどう係わるかなどの論議はあるが⁽⁷⁾それは問わない。ここでは天台思想の根本に係わる性具説から必然的に帰着する浄土観は相即(西方浄土即唯心浄土)であることを確認しておく。

第二に、このことは西方浄土を否定して、唯心浄土が成立したのではないことを意味する。この点は中国浄土教史の変遷を考える上では極めて重要である。すでに述べたが、経論に説かれる弥陀浄土は、『観経』「是心是仏」(あるいは「去此不遠」)を例外として、すべてが有相の西方浄土であった。従って、経論を絶対の真理とする弥陀浄土教は西方浄土を否定しては成り立たない。しかし、無相の唯心浄土はその対極に位置する。ではどうして唯心浄土思想が成立したのか。主流の西方浄土思想を大前提とし、肯定した上で新たに唯心浄土思想に展開させたのである。宋代浄土教は唯心浄土思想と対立することなく、西方浄土思想も盛んであった。その端的な現象が知礼・遵式を含めた実践としての念仏結社であろう⁽⁸⁾。第二節「唯心浄土思想の諸資料」の「宋代浄土教は唯心浄土思想だけでない」という留意点の正当性はここでの天台系西方浄土肯定論で思想的にも立証される。また、本節初めに論述した唯心浄土という新思想の出現も主流の西方浄土思想を肯定した流れの中に新たに展開されたと見ることによって、より明らかになった。

天台思想はそれ自身が現象世界を不可欠とするという点で、弥陀浄土教を積極的に認めるのであり、事実その通りの展開であった。唯心浄土思想の最も大きな支流は天台浄土教である⁽⁹⁾。ただ、ここでも留意すべきは資料的にも思想的にも唯心浄土思想が天台系にあることを示唆しているが、その大きな要因は天台僧宗暁『楽邦文類』によっていることである。この点は過大視を防ぐためにも、多少割引かなければならない。

次いで、禅系の唯心浄土思想と諸問題を考える。

われわれが中国禅の中心思想として教えられる要語は一般的に不立文字、以心伝心、直指人心、見性成仏、即心即仏などであるが⁽¹⁰⁾唯心浄土思想関係の中からそれに近い言及を抽出すると、

六祖壇経(可観、王仲回、王古)、自性弥陀(楊傑、宗蹟、懐深、宗杲、林鑑、王日休、鍾離松)、直指心源(冲黙)、禅家語(宗蹟)、天衣義懐(守納)、是心即仏(守一)、伝燈録(海慧)、肉団心(江公望)、直指本心(王闡)、参禅者(王日休)、禅宗(宗暁)

などである⁽¹¹⁾天台系より少ないが、ここにも禅系特有の思想形態が認められる。

それでは、この禅系唯心浄土思想からわれわれは何に注意し、何を学ぶか。

第一は、禅本来の思想による限り、弥陀浄土は如何なる場合も唯心浄土でなければならないという点である。この点は天台系唯心浄土思想と同じである。

第二は、しかし、西方浄土説については否定され批判されねばならない。これは天台思想と全く異なる。ただし、それは理論的に否定されるという意味で、修行という実践的にも否定されるという意味ではない。このことは浄土行を實踐する禅浄双修の禅師たちに深く係わる事柄で後に述べる。

禅系唯心浄土思想で看過できない事項は何と言っても『六祖壇経』に認められる西方浄土批判説とそれに係わる一連の唯心浄土思想家からの禅者批判である。

『六祖壇経』西方浄土批判説(大正 48・352 上)

(刺史又問曰、弟子常見僧俗念阿弥陀仏願生西方。請和尚説、得生彼否……。)

師言、……、迷人念仏求生於彼、悟人自浄其心。所以仏言、随心浄即仏土浄。……、凡愚不了自性、不識身中浄土……。悟人在処一般。

この主張は『維摩経』心浄土浄説を經証とする唯心浄土思想であるが、天台系思想と基本的に異なる点は西方浄土を否定して、唯心浄土を主張する立場である。

関係文から西方浄土批判説とそれに対する反論をまとめて挙げる。

或曰、豈用迢然求生他方浄土耶。釈曰、子又不善心土之義也(遵式)

何必定生西方極樂。……大妄語罪、其誰当之(仁岳)

世伝六祖壇経……六祖答、……何処覓西方……。噫、如此鄙俚一笑可也(可観)

慈雲云、(豈用迢然求生他方浄土也……、元照)

有人云、……西方何必求生他方浄土。今謂非無此理(元照)

発三種不信心、不求生者、尤可嗟惜。一曰、吾当超仏超祖、浄土不足生也。二曰、处处皆浄土、西方不必生也。三曰、極樂聖域、我輩凡夫不能生也(楊傑)

祖師云、……不用更求生西方(王仲回)

六祖壇経云……、誌公云、愚人愛往西方……、何故二大士排遣(王古)

学人問曰、願生浄土未審、実有浄土否(海慧)

世有專於參禅者云、惟心浄土、豈復更有浄土。自性阿弥、不必更見阿弥。此言似是而非也(王日休)

禅宗不修浄業者云、……何用別求生処。……其自欺之甚也(宗曉)

38 師のうち、10 師に西方浄土往生批判説の言及があることは、当時相当根強い西方浄土教批判のあったことを窺わせる。ただ、細かく注意すると、「六祖壇経」「祖師云」の引用や「参禅者」「禅宗云」の批判は禅宗の人々と考えて良いが、「或曰」「有説云」は禅宗とは特定できないし、三種不信心の「三曰、我輩凡夫不能生也」(楊傑)は禅宗ではありえない。また「願生浄土、未審」(海慧)も今日でもありうる一般的疑問であるから、すべてが禅宗からの西方浄土批判説とは限らない。それに対する反論も多くは手厳しい(大妄語罪、此鄙俚一笑、似是而非、自欺之甚)が、また元照のように一応認める立場(非無此理)と様々である。従って、西方浄土往生批判者は禅宗系とは限らないが、その絶対的根拠が多く『六祖壇経』にあることから、西方浄土批判説を一先ず禅宗系に代表させて考えること

にする。

これを唯心浄土思想の立場から見れば、種々の禅師が浮び上がる。まず禅師にとっては直指人心、見性成佛が真の目的であるから、唯心浄土は当然のこととして齒牙にもかけず、真摯に求道する禅師たちである。彼等にとっては西方浄土も唯心浄土も関心事にはなりえなかった筈である。それが禅宗本来の正統的流れであり、われわれが学ぶ中国禅宗思想史であることを忘れてはならない。しかし、こうした大きな歴史の流れの中で、おそらく浄土教が無視できない勢力となったのであろう。弥陀浄土をどう考えるかの論議と疑問が現われる。その端的な例が『六祖壇経』西方浄土批判説であり、一方、天台宗では智顛に仮託して『天台観経疏』『浄土十疑論』を創作した。その後の禅師たちは六祖慧能の故事を絶対として、激しく西方浄土往生を非難し、天台の法師たちは智顛の教説と信じて西方浄土往生を鼓吹した。従って、禅系の場合には西方浄土を否定し無視した上での唯心浄土思想である。しかしまた、宋代にはおそらく天台浄土教の影響であろうか、西方浄土を肯定する禅系唯心浄土思想家が現われた。唐代までには無かった現象である。彼等は逆に西方浄土否定論者を厳しく非難し、唯心浄土と西方浄土の両立を主張した。その僅かな事例が前出の関係文である。

このように、禅系唯心浄土思想については、禅本来の立場から言えば当然のことで全く無関心、無視の真摯な禅師たち、『六祖壇経』のとおり西方浄土を否定する禅師たち、唯心浄土だけを主張する禅師たち、そして西方浄土を否定する禅師たちを激しく非難し、西方浄土を認めつつ唯心浄土を主張する禅師(法師・居士)たちに分かれる。

ところで、西方浄土批判説は唯心浄土思想に限られた問題ではない。浄土教史の上では、すでに慈愍慧日(680-748)の『往生浄土集』巻上(残存)には⁽¹²⁾

或有一類男女道俗，於彼浄土，都不信有。但令心浄，此間即是。何処別西方浄土。奇哉罪業，不信聖教，豈仏世尊虚妄説耶。

を含め、空見に確執し、諸行を否定する禅師を終始痛烈に非難し、諸行兼修の浄土教を主張する。さらに、唐中期の法照『浄土五会念仏法事讚』(略本)には⁽¹³⁾

豈同今之学者，柴金之容都撥為有相，髻珠之教懸指為文字，語無色則捨於真色，論無声乃厭於梵声。坐号無為，行称失道。即顛墜邪山，良可悲矣。

今坐禅，但当念仏。豈同離念求乎無念，離生求於無生，離相好求乎法身，離文字求解脱。夫如是者，則住於断滅見，諦仏毀経，成櫃法業，墜無間矣。

それを継いで、延寿(904-975)『万善同帰集』巻中も⁽¹⁴⁾

古徳釈云，禅宗失意之徒，執理迷事云，性本具足，何仮修求，但要亡情，即真仏自現。

と非難し、「慈愍三蔵録」を引証する。

時代は正に慧能系の南宗禅の成立と流行に相応するから、中には禅の本質を心得ない人々[一類男女道俗]であったとしても、禅徒に強力な西方浄土批判があったことは史実である。その絶対的根拠が『六祖壇経』西方浄土批判説であり、それに対する浄土教側からの反論である。

ここでまた新たな疑問が生じる。禅系唯心浄土思想は禅本来の思想からも肯定されるものであるが、しかし、天台系と異なり、西方浄土思想は論理的に否定されるのであれば、宋代から現われた

禅浄双修の浄土とは何かという点である。唯心浄土思想の場合には、無方無相の唯心浄土を悟ることにあるから、禅本来の思想と矛盾しないが、若し禅浄双修の「浄」が西方浄土であるなら、往生が不可欠となり、悟りを目的とする「禅」と往生を目的とする「浄」との双修は論理的に成り立たない⁽¹⁵⁾

ここで想起されるのは、前号で扱った永明延寿の「四料揀」の疑義である⁽¹⁶⁾

『浄土指帰集』大佑(1393年、続蔵2・13・1、67-68)

一曰有禅無浄土 十人九蹉路 陰境若現前 警爾随他去 ……

二曰無禅有浄土 万修万人去 但得見弥陀 何愁不開語 謂未明理性 但願往生……速登不退。

三曰有禅有浄土 猶如戴角虎 現世為人師 来生作仏祖 ……

四曰無禅無浄土 鉄床并銅柱 万劫与千生 没個人依怙 ……

ここでの疑義は後世の資料で、延寿の浄土思想からは資料的にも思想的にも禅浄双修は成り立たないという論証であった。「四料揀」の浄土は明らかに西方浄土往生を意味するから、上根の唯心浄土、中下根の西方浄土を主張する延寿の思想では機根が違うゆえに成り立たないのである。

この論理的矛盾は禅系唯心浄土思想の場合にも当てはまる。彼らが唯心浄土だけを肯定するのであれば問題ないが、若し西方浄土思想を肯定するのであれば、また別な論理を必要とする。禅浄双修にはこうした重要な問題があるが、本稿の課題ではないので他日に期し、ここでは唯心浄土と西方浄土(指方立相論)の関係解明の折に注意し、そこで論拠を探そう。

以上が、天台・禅の中心思想から知られる唯心浄土思想と、とくに西方浄土思想との対称的な肯定論と否定論である。この中にはすでに律系元照・戒度、その他の居士もほぼ含まれるから、概ね宋代の唯心浄土思想の諸形態は天台・禅思想を背景として確立したと規定してよい。

そこに洩れた思想形態としては、「華嚴念仏三昧無盡燈序」義和は先行思想の澄観(738-839)、延寿(904-975)を継承する唯一の華嚴系唯心浄土思想で、それゆえか諸仏の唯心浄土思想の色彩が強い。資料的には残存の一文に過ぎないが、後世明代の高僧雲棲株宏(1532-1612)、蕩益智旭(1599-1655)の華嚴思想を根底にした荘大な唯心浄土思想を考える上では貴重である。

その他としては、「十六観経頌」遵式、「十六観頌」有嚴、「示陳行婆頌」従諫、「雕弥陀香像頌」可観、「懷西方詩」「讚浄土漁家傲並序」可旻、「靈山安養菴記」程俱などの主に偈頌に認められる唯心浄土思想は多く咏嘆調で、具体的思想形態は窺えない。

以上によって、宋代唯心浄土思想の具体的諸形態とそれに係わる問題点は指摘できたと思われる。

- (1) 安藤俊雄『天台性具思想論』191頁以下、『天台思想史』34頁以下、『観無量寿仏経疏妙宗鈔概論』(真宗大谷派安居講本)、とくに唯心浄土思想については4-5、80-89、119-122頁、『天台学』329-384頁など。なお、最近では池田魯参駒沢大教授の一連の研究(「趙宋天台学の背景」『駒沢大仏教学部論集』第14号、『四明尊者教行録の研究』、『四明知礼の生涯と著述』『東洋文化研究所紀要』第100冊など)が注目される。
- (2) 安藤俊雄『妙宗鈔概論』88頁、そこでの典拠『妙宗鈔』第二(大正37・202上)。なお「雖託彼境、須知依正同居一心」巻一(195中)も同じ主張である。
- (3) 「色心不二」は知礼の中心思想である。『十不二門指要鈔』大正46・708中-711中。

- (4) 知礼と遵式の学風については「慈雲法師之教行，四明法師之觀智，近者靈芝律師之弁論」(晁説之「浄土略因」『楽邦文類』卷四，大正 47・209 上)，称名十念については「十念門者」『往生浄土決疑行願二門』(大正 47・147 上中)，「往生西方略伝序」，「念仏方法」，「往生正信偈」(『楽邦文類』第二，四，五。大正 47・167 下-168 中，210 下，216 上中など)。望月信亨『中国浄土教理史』356-360 頁，高雄義堅『中国仏教史論』169-173 頁等参照。
- (5) 『往生浄土決疑行願二門』大正 47・146 上。
- (6) 天台学の中心思想が何か，ましてや趙宋天台の山家山外派で展開される難解な論議からの確な要語と概念(たとえば別理随縁，理事兩重総別など)を抽出することは本稿の及ぶところではないし，関係文を見る限りそこまでの言及は認められない。ここでは極く一般的な要語にとどめる。島地大等『天台教学史』，塩入良道「天台思想の発展」『講座東洋思想 6』，田村芳朗「天台法華の哲理」『仏教の思想 5』，とくに安藤俊雄，前掲書など参照。
- (7) 望月信亨，前掲書，107-111，280-290，342-366 頁，山口光円『天台浄土教史』91-98，127 頁以下。安藤俊雄『妙宗鈔概論』67-89 頁。
- (8) 小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』42-50 頁。
- (9) かつて山口光円師は，法然の浄土三流に加えて「その何れにも摂することのできない天台独特の浄土教」を「前代未聞である天台浄土教と命名」し提唱したが(前掲書，105-109 頁)，傾聴すべきである。
- (10) 天台以上に禅宗，とくに五家七宗の禅風は異なり，ここでも一般的な要語にとどめる。忽滑谷快天『禅学思想史』，関口真大『禅宗思想史』，柳田聖山「中国禅宗史」『講座禅』第三など。
- (11) 他に「是心即仏」(遵式)，「即仏浄土」(有叡)，「眞禅侶之棲止」(齊玉)など類似語はあるが，天台系諸師で禅の要語と特定できない。
- (12) 『略諸経論念仏法門往生浄土集』卷上(大正 85・1241 中)，小野玄妙「慈愍三蔵の浄土教」『現代仏教』第 18,19 号，道端良秀「真宗より見たる慈愍三蔵」『中国浄土教史の研究』，拙稿「慈愍三蔵慧日に関する二，三の問題」『印仏研』第 17 卷第 2 号。
- (13) 『浄土五会念仏略法事儀讃』(大正 47・475 上，476 中)，塚本善隆『唐中期の浄土教』278-279 頁。
- (14) 『万善同帰集』卷中(大正 48・973 中)。
- (15) 忽滑谷快天師は『六祖壇経』西方浄土批判説を紹介した後に，「禅門の本義当に是の如くなるべし。後世禅浄習合の説，慧能の法門と天淵の別あり。」(前掲書，上巻 394 頁)と後の禅浄双修を厳しく批判されるが，傾聴すべきである。
- (16) 第四章第二節「永明延寿の唯心浄土思想」60-61 頁，第四節「中国浄土思想史における永明延寿」91-93 頁。

第五項 残された課題 ― 唯心浄土と西方浄土，永明延寿の影響

最後に，残された課題，具体的には唯心浄土と西方浄土の関係，そして永明延寿の影響を考え，宋代唯心浄土思想の未だ気づかない諸相を明らかにし，本節を終えることにする。

まず，唯心浄土と西方浄土の関係であるが，すでに提示された事項から手掛りを挙げれば，天台思想からの積極的肯定論と禅思想からの否定論に対する反論，さらに禅浄双修の「浄土」の概念である。唯心浄土思想家がそれをどう考えたかは中国浄土教史を考える上では極めて重要であり，また今日的課題でもある。

今一度調査して，西方浄土，広く事相世界に係わる具体的な論述を取挙げる。

知礼『妙宗鈔』卷二(大正 37・202 上)

雖従心相，如在目前。故云与眼作对。……，知色唯心，知心唯色，五眼所对，尚体唯心。

遵式『往生浄土決疑行願二門』(大正 47・146 上)

上輩三品須解須行……。若其中下之流六品生因，只是精持禁戒行世仁慈。乃至下下品生本是恶逆。十念精誠便生彼国。

有嚴「浄土修因或对」(大正 47・206 上)

所云修無生妙觀……乃上根得生之一門耳。……安樂集云，生得生者，有二種。一有相心，謂著相忻樂。二無相心，謂理觀相應。若今之世，中下鈍根，愚迷障重。※『安樂集』に当該文なし。

彦倫「念仏修心術」(大正 47・211 中下)

諸大乘經勸生浄土，因通二種。一定二散。定謂即心觀仏……唯心本具……。二者散善，用純実心，信有西方……。是知，若定若散，或鈍或利，皆浄土因。

道琛「唯心浄土説」(大正 47・207 上-下)

或答，事理有異。約事須当往生，掘理即心而是。今議曰，円家事理，一体無殊。何得抗分而通此義。……，若了唯心本性，只一三千融妙之法，十万遐方皆不為礙。

元照『觀經義疏』(大正 37・280 下，282 中下，284 中)

利根達理，則一切唯心。鈍根未達，則專依事行。……，利根修者莫非理觀，鈍根修者皆歸事想。

一者法性土……，此謂唯心浄土……。二者応化土……。今經所明即是弥陀所取同居浄土。

有人云，心若清浄即是自性，西方何必求生他方浄土。今謂非無此理。斯乃教中之法性理土而非今經所明也。

同「開元寺三聖立像記」(大正 47・186 下)

如能達此相即非相，非相即相，……莫非諸仏法身之体。……，理事一如，眞俗不二。

「王司土伝」(楊傑記)(大正 47・195 下-196 上)

祖師則云，心即是浄土，不用更求生西方，其不同何也。

答云，實際理地，無仏無衆生……，豈得更以生不生為心耶。此以理奪事也。……，於無念中起念，於無生中求生，此以事奪理也。

(宗曉註)此伝不可棄。但論事理相奪，未若台宗所謂円觀事理，一念具足。

王古「寂照集揀西方要義」(大正 47・201 上)

問。六祖壇經云，凡愚不了自性，不識身中西方……。誌公云，智者知心是仏，愚人愛往西方……。

答。仏説法有隱顯，教有權実，人根有利鈍……。

宗蹟「蓮華勝会録文」(大正 47・177 中)

念而無念，生而無生者，第一義諦也。……，所以終日念仏，而不乖於無念，……而不乖於無生。

守訥「唯心浄土文」(大正 47・207 下)

仏説極楽浄土，……应当発願生彼国土。然学頓者，弘之為權説。不通理性者，泥之於事相。吾嘗学唯識，唯遮外境，識表自心，心外無境……。浄土豈離乎当念。

王日休「浄土起信」(大正 47・255 下)

世有專於參禪者云，惟心浄土，豈復更有浄土。自性阿弥，不必更見阿弥。此言似是而非也。何則西方浄土有理有跡。論其理，則能浄其心……為唯心浄土矣。論其跡，則実有極楽世界。

鍾離松「宝積蓮社画壁記」(大正 47・189 中)

一以万法唯心，一以指西方徑路，較余功德，眞所謂百千万億分不及一者歟。

これらの記述から、われわれは唯心浄土と西方浄土の関係についての具体的な論証を知るだけでなく、それに係わる禪浄双修の「浄土」の概念と新たな事柄についても学ぶことができる。

第一に天台思想による限り、西方浄土は積極的に肯定されるという点である。すでに天台系唯心浄土思想で指摘したが、ここでの記述は一部重出で再確認である。一方、禪思想本来の西方浄土批判説はその反論として言及される。

第二に、その論証として多いのは所謂「理事無礙」で解釈する浄土観である。「理事無礙」は華嚴宗の澄観「四法界」、延寿の中心思想として有名であるが⁽¹⁾ここでは有嚴・道琛・元照・王仲回・王日休・宗曉などに認められるから、すでに宗派を超えた宋代仏教の代表的見解と考えてよい。就中、唯心浄土と西方浄土の関係を端的に示す言及を重ねて挙げる。

道琛「唯心浄土説」(大正 47・207 上)

約事須当往生，拋理即心而是。

元照『観経義疏』(大正 37・280 下)

利根達理，則一切唯心。鈍根未達，則事依事行。

王日休「浄土起信」(大正 47・255 下)

論其理……為唯心浄土。論其跡，則実有極楽世界。

この論証は極めて判り易い。普遍的な理性としての唯心浄土は現象世界の事相としての西方浄土との相即・一如・不二と解釈する。同様の論法は有嚴の有相心と無相心，元照の法性土[唯心浄土]と応化土[弥陀浄土]，宗暉の第一義諦(と俗諦)にも認められる。

このように唯心浄土と西方浄土の関係は「理事無礙」の解釈が最も有力であるが、この僅かな論証からだけでも、また新たな事柄に気づく。

まず第 1 に、道琛「唯心浄土説」の「約事須当往生，拋理即心而是」の答えに対して、

いま、それを論議すると、円家の事理は一体無殊(が当然であるのに)、何ゆえ(事と理)に分けて通解しようとするのか。……、唯心(浄土)本性(弥陀)を了解することは、ただ一念三千の融妙の法で、十万(億土を超えた)遠い西方(浄土)を礙げない。

という記述である。これは殊更「理事」に限定する解釈が天台本来の立場を狭くすることを注意し、理としての唯心浄土と事としての西方浄土だけに執着することを暗に諫めている。天台本来の思想に在る限り、西方浄土は積極的に肯定されるという第一の論証と理事無礙に限定して解釈する第二の論証は同じようでも天台思想全体か、理事の個別かで違うことを注意したい。殊更、第一で天台思想による西方浄土肯定面論を重出し再確認したのはそのためである。

第 2 に、このことから禪浄双修の「浄土」を考える場合の一つの有力な示唆を受ける点である。浄土に関する理事無礙は、本来、「理としての唯心浄土」の了解と「事としての西方浄土」の往生の無礙である。この中の事としての西方浄土だけが禪師に肯定されたらどうなるか。事としての西方浄土を認めるから、必然的に理としての禪にならざるを得ない。すなわち、理としての禪，事としての西方浄土の禪浄双修の論理であり、成立である。しかしこれは禪系唯心浄土思想からは論理的に成り立たない。すでに知ったことだが、禪本来の思想の仮りに直指人心・見性成仏の立場では、唯心

浄土を直指し見性することが眼目で、事としての西方浄土を容認する余地はない。それゆえ、『六祖壇経』の西方浄土批判説である。理事無礙は天台には天台の理事無礙であり、浄土には理としての唯心浄土と事としての西方浄土の無礙である。当然、禅には禅の理事無礙があるわけで、仮りに直指人心・見性成仏を理とすれば、そのための実践修行が事になる。どうして西方浄土の往生行が理としての唯心浄土を直指し見性する事相になりえるのか、論理的には成り立たない。しかし、唯心浄土と西方浄土の最な有力な(おそらく天台系の)理事無礙の論証が強調されたとき、西方浄土の弥陀浄土教の大きな勢力もあって、事としての西方浄土だけが独立して、いかにも空無を探求する理性の強い禅宗と融合して禅浄双修思想が成立したのではなかろうか。

理事無礙の論理的構造から気づいた禅浄双修思想は宋代浄土教以降の大きな特徴で唯心浄土思想と深く係わるが、禅と西方浄土往生行との双修であるならば、新たな重要な課題として別に改めて考えねばならない。

第3に、元照『観経義疏』

一者法性土……、此謂唯心浄土……。二者応化土……。今経所明即是弥陀所取同居浄土。の記述である。元照は唯心浄土を法性土、観経の弥陀浄土を凡聖同居の応化土と解釈する。

唯心浄土が通常の浄土観(法性土・報身土・応化土など)のいずれであるかは、これまで全く論及していない。

唐代までの主な浄土観については前号第三章「唯心浄土思想成立以前の先行思想」で迎ったが⁽²⁾われわれが一般的に学んでいる弥陀浄土観は浄影寺慧遠・吉蔵・智顛等の諸師が事浄土・凡聖同居土と低く解釈したのを古今楷定して、善導が指方立相の報土説に高めたことが有名である。いずれにせよ、経論による限り、弥陀浄土はことごとく西方有相浄土であって、経論を絶対とする諸師には弥陀浄土を無方無相の法性土と解釈できなかつた。ところで、唯心浄土は心の表われであるから無方無相の浄土であって、西方浄土にはなりえない。従って、論理的には法性土・法身土にならざるをえない。こうした論理を背景として、先行思想の主な浄土観の考察では、唯心浄土思想は弥陀浄土観の展開ではなく、諸仏浄土観が後に転用されたと予測した。ただ、細かく注意すれば、諸師の弥陀浄土観にも法性土的萌芽があり、それが永明延寿の諸仏唯心浄土思想に展開し、さらに宋代の知礼・遵式を初めとする弥陀唯心浄土思想になった。元照の記述は唯心浄土が法性土であることの一例に過ぎないが、『楽邦文類』には弥陀法身説が十数部認められる⁽³⁾宋代の唯心浄土思想が善導の報身報土説を更に高めて法身法性土説を成立されたことは弥陀仏身仏土観の展開として銘記してよいであろう。

唯心浄土と西方浄土についての「理事無礙」の解釈による浄土観は有力な論証であるだけでなく、禅浄双修の成立、弥陀法身法土説という新たな諸相も示唆している。

第三に、「理事無礙」による浄土観とも係って、定善と散善、理観と事観の行業論からの解釈である。主な記述は、

彦倫「念仏修心術」(大正47・211中下)

諸大乘経勸生浄土、因通二種。一定二散。定謂即心観仏、……唯心本具。……経云、……是心作仏、是心是仏。此乃如来親示唯心三昧。……心外無仏、性外無土……。二者散善。用純実

心，信有西方……。然事想彼国，但無三觀，名散善耳。……。吾祖智者云，根有利鈍，行有定散，觀仏三昧名定，修余善業説以為散。

元照『観経義疏』(大正 37・280 下)

今経観法，通摂利鈍。利根修者莫非理観，鈍根修者皆帰事想。

などである⁽⁴⁾彦倫は定善の即心観仏は唯心三昧であるから唯心浄土，散善は西方浄土があると信じることとし，元照は利根者が理観を修するゆえに唯心浄土，鈍根者は事想を修するゆえに西方浄土と説く。

観経十六観法を理観とみるか事観とみるか，定散二善をどの経文に当てるかは浄影寺慧遠以来，種々の解釈があり，とくに善導の定散二善・事想観は有名であるが⁽⁵⁾ 当時も諸説に別れたようで，元照『観経義疏』巻上には，前引の見解に続けて，

然古今利积，互説不同。一云，十六妙境無非理観。一云，捩経始末皆是事想。一云，前後十五是事，唯第九仏観為理。

それを註釈した戒度『同正観記』巻上は，すべて理観は知礼，事想は択瑛，第九理観・他の十五事観は智円の主張と言う⁽⁶⁾

これを唯心浄土に当てはめると，定善は理観ゆえに唯心浄土，散善は事想ゆえに西方浄土という図式になる。観経解釈は諸師夫々に異なるから，別に細かな論証を必要とするが，この僅かな記述からだけでも，知礼は理観ゆえに唯心浄土，元照は「通摂」ゆえに唯心浄土と西方浄土を主張したことが知られる。観経十六観法は当時も重要な行業論で，著名な唯心浄土思想家知礼・元照等の見解ゆえに一つの代表的解釈である。

第四に，これまでの論証に再々認められたが，上根と中下根の機根論からの解釈である。主な事例としては，

遵式『往生浄土決疑行願二門』(大正 47・146 上)

上輩三品須解須行……。若其中下之流六品生因，只具精持禁戒行世仁慈，乃至下下品生……。有嚴「浄土修因或对」(大正 47・205 下-206 上)

浄土非難易，難易在人。……所云修無生妙観……乃上根得生之一門耳。……。若今之世中下鈍根……。

彦倫「念仏修心術」(大正 47・211 下)

若定若散，或鈍或利，皆浄土因。

元照『観経義疏』(大正 37・280 下)

利根達理別一切唯心，鈍根未達則専依事行。

王古「浄土宝珠集序」(大正 47・173 上)

被円頓機，則皆一生補処，明方便門，則有九品階差。

同「寂照集揀西方要義」(大正 47・201 上)

仏説，法有隠顕，教有権実，人根有利鈍，宗師有抑揚。

江公望「念仏方便文」(大正 47・212 中下)

若是利根之人，念念不生……。初機後学……心口念念声声，称誦勝号。

などである⁽⁷⁾

この先行思想としては、『観経』九品往生説(あるいは『無量寿経』三輩往生説)の解釈、さらには『浄土十疑論』(「智者熾然求生浄土、達生体不可得……。愚者為生所縛聞生……不遠此理」)、『六祖壇経』(「人有兩種、法無兩般。……迷人念仏求生於彼、悟人自浄其心」)の強い影響があり⁽⁸⁾、近くは延寿『万善同帰集』(「唯心浄土者、了心方生……。其乃力量未充、観浅心浮……須生仏国」「九品経文自有昇降。上下該攝不出二心。一定心、如修定習観、上品往生。二専心、但念仏名号……得成末品」)とあるから⁽⁹⁾、上根の唯心浄土、中下根の西方浄土という機根論は長い歴史を継承した当時の一般的解釈と考えてよい。

以上、唯心浄土と西方浄土の関係について、多少とも西方浄土に言及する資料を摘出し、そこから知られる解釈を探求した。初めに天台思想からの西方浄土肯定説と禅思想からの批判説を確認し、理事無礙の浄土観、理観事観・定散二善の行業論、上根下根の機根論からの解釈を知った。ここでは夫々別個に論述したが、同一資料が再出されていることは諸師夫々に微妙な違いを見せながらも浄土観・行業論・機根論が唯心浄土と西方浄土の関係という同一基盤で相互に密接に繋がっていることを意味する。一思想家の思想大系としては当然のことである。仮りにそれを図示すれば、

弥陀浄土 { 唯心浄土—理性—理観・定善—上根
西方浄土—事相—事観・散善—下根

となろう。就中、浄土観については天台思想の立場から言えば「無礙」「相即」「不二」であり、禅思想では西方浄土は否定されるから安易な会通は許されない。行業論と機根論は明らかに異なるのであり、会通すら成り立たない。従って、なお細心な論証の余地は残されているが、これまでの論述で唯心浄土と西方浄土の関係だけでなく、唯心浄土思想の具体的な諸形態すらもより明らかになったと思われる。さらに、各論から派生した問題として、禅浄双修思想の「浄土」の概念、弥陀浄土の法身法性土説、観経解釈の諸説などを知ったが、これらの課題は別に稿を改めるにしても、宋代浄土教の諸相を多少とも解明できたと思われる。

最後に唯心浄土思想の最初の提唱者永明延寿(904-975)の宋代唯心浄土思想に及ぼした影響について整理し論及する。

延寿は偉大な唯心思想家ゆえに宋代仏教に与えた影響は当然予想されることで、とくに趙宋天台との関係については勝れた成果が認められる⁽¹⁰⁾しかし、彼の浄土思想の宋代への影響については未だ詳細な論証は認められない。それ以前に延寿の龐大な著述、とりわけ『宗鏡録』百巻を対象とした浄土思想の解明も無かったわけで、それゆえ詳論したのが前号第四章「唯心浄土思想の成立」である。

細かな諸点は前章にゆずり、従来の研究でも必ず言及される有名な唯心浄土思想の典拠を挙げる。

『万善同帰集』巻上(大正 48・966 中下)

問。唯心浄土、周遍十方。何得託質蓮台、寄形安養……。

答。唯心仏土者、了心方生。如来不思議境界経云……。故知識心方生唯心浄土。……乃知心外無法。又平等之門、無生之旨、雖即仰教生信。其乃力量未充、観浅心浮、境強習重、須生仏国……。

彼の浄土思想は『如來不思議境界經』を引証する十方に周遍の「唯心浄土」と力量充たず観淺く心浮く者の生ずる「仏国」(安養浄土)の二つの見解であり、両者の関係は同書の根本思想「理事無礙」で会通される。

ここで、延寿の浄土思想と宋代唯心浄土思想の共通点、従って影響関係を挙げると、第1に「唯心浄土」の明記である。この用語はすでに李通玄(635-730)の十種浄土「第九唯心浄土」にあったが、『維摩經』の浄土で、弥陀浄土は「第一阿弥陀經浄土……第二無量壽觀經浄土」と最下位の査定である。⁽¹¹⁾延寿の唯心浄土は特定されていないから諸仏の唯心浄土で、その一浄土として弥陀の唯心浄土を認めるに過ぎない。しかし、「唯心浄土」明記の主張は画期的なことで、高く評価されたのである。第2に「理事無礙」による唯心浄土と西方浄土の解釈である。この解釈が『万善同帰集』の根本思想であることは確かであるし、宋代の唯心浄土と西方浄土の関係を解く最も有力な浄土観であることはすでに論証したとおりである。理事無礙は延寿の中心思想であるとともに宋代浄土教の主要な浄土解釈である。第3に延寿は西方浄土往生を中下根の人に積極的に勧める。宋代浄土教でも上根は唯心浄土、中下根は西方浄土の機根論は非常に多い。このように、延寿の浄土思想と宋代浄土教は驚くほど一致するから、われわれは延寿の宋代唯心浄土思想、広く浄土教に及ぼした影響は極めて大きいという印象を受ける。

しかし、これらの共通点は以下の反証で消失する。

第1の「唯心浄土」の用語を彼が最初に用いたという点は高く評価すべきである。しかし、それは『如來不思議境界經』を引証とし、十方に周遍する諸仏の唯心浄土で、彼は弥陀浄土を前提とし特定して主張したのでは無い。諸仏の中の一仏として弥陀の唯心浄土を認めるのと、初めから弥陀浄土を前提とし特定して唯心浄土を主張するのとでは大きな違いがある。この点で『觀經』「是心是仏」を経証とし、「唯心之浄土、本性之弥陀」を明記し主張した知礼と根本的に異なる。第2の「理事無礙」の解釈は華嚴教学に対抗した湛然(711-782)以降の長い天台教学での中心命題で、趙宋天台では山家派知礼の「別理隨縁」「事理兩重總別」、山外派智円等の「縁理断九」「理総事別」の難解な論争に展開するのであって、⁽¹²⁾延寿や唯心浄土思想に限られた解釈ではない。それゆえ宗派を超えた宋代仏教の最も有力な解釈と前に注意したのである。第3の中下根の西方浄土往生も『觀經』九品往生説、あるいは『無量壽經』三輩往生説の經文を忠実に解釈する限り、浄影寺慧遠(523-592)の註釈以降弥陀浄土教では伝統的解釈で、延寿に特筆される主張ではない。延寿も諸師の解釈を踏襲したことはすでに述べた。従って、宋代浄土教の機根論も延寿の影響と特定できない。このように延寿の唯心浄土思想と宋代唯心浄土思想を結ぶ共通点は、弥陀浄土教、広く唐宋仏教思想の大きな流れの中に埋没し、影響関係は色褪せる。反って、ここで残された延寿の諸仏の「唯心浄土」と宋代唯心浄土思想家の「唯心浄土、本性弥陀」の質的違いの方が大きく際立つ。延寿の宋代唯心浄土思想に限った影響は特定できない。

加えて、大きな理由は唯心浄土思想資料に延寿著述の引用が今のところ一つも見出していない点である。第三項で論証したように、『觀經』「是心是仏」をはじめ諸經典、『天台觀經疏』『六祖壇經』等の先行思想の引用は認められるのに、時代的地理的にも最も近い延寿著述の引用は何故か一点も認められない。資料的に立証できないのが最大の難点である。

しかし、このことは延寿が宋代仏教で評価されていなかったと言うのではない。彼の伝記は早く『宋高僧伝』巻二八(988年)、『景德伝燈録』巻二六(1004年)に載せられるが⁽¹³⁾、厳しい修行者としてで、浄土思想家としてではない。浄土資料でも『新修往生伝』巻下(1084年)、『龍舒浄土文』巻五(1162年)に載るが⁽¹⁴⁾、唯心浄土思想を伝えるものではない。延寿を高く評価したのは宗曉『楽邦文類』巻三、四、五(1200年)で、前引の『万善同帰集』第28問答を始め6問答と伝記が収録される。しかし、宗曉は蓮社継祖(慧遠・善導・法照・少康・省常・宗贖)に入れていない⁽¹⁵⁾。それ以降、延寿の評価を決定した志磐『仏祖統紀』巻二六(1269年)を経て、元代から益々讃仰される。延寿像の変遷と禅浄双修思想(四料揀)の疑義は前章で辿ったし⁽¹⁶⁾、次章の資料がそれを証明しよう。延寿の評価は『楽邦文類』に依るところが大きく、それまでの唯心浄土思想資料には認められない。

延寿の膨大な著述と荘大な唯思想が時代の近時性から考えて宋代仏教に影響を与えない筈はないと思われるが、唯心浄土思想に限っては資料的にも思想的にも今のところ立証できない。さらに探求を続けるつもりである。

- (1) 澄観『大華嚴経略策』(大正36・707下)、同『華嚴法界玄鏡』巻上(大正45・672下)、木村清孝『中国華嚴思想史』221-225頁。
延寿『万善同帰集』巻下(大正48・991上, 992上)、前号45-47頁。
- (2) 前号第三章第一節第一項「中国仏教における主な浄土観と唯心浄土思想」27-31頁。
- (3) 拙稿「弥陀法身説とその展開」『印度哲学仏教学』第5号。
- (4) 他に有嚴「一有相心、謂著相忻樂。二無相心、謂理觀相應」(「浄土修因或对」)など。
- (5) 坪井俊映『浄土三部経概説』347-352頁。
- (6) 戒度『観経義疏正観記』巻上(統蔵1・33・1, 18)。
- (7) 他に「衆生根有利鈍、其近而易知。簡而易行者、唯西方浄土也」(「大宋無為楊提刑伝」『楽邦文類』巻三、大正47・195中)など。
- (8) 『浄土十疑論』大正47・78上、『六祖壇経』大正48・352上。(王古)「寂照集揀西方要義」の「誌公云、智者知心是仏、愚人愛往西方」も同じ見解。
- (9) 延寿『万善同帰集』『』巻上、大正48・966中下, 968下。その他『宗鏡録』巻16, 17, 36(大正48・501下, 506上, 623中下)、『受菩薩戒法』(統蔵2・10・1, 10)など。前号第四章「唯心浄土思想の成立—永明延寿の浄土思想」64-67, 71-73頁参照。
- (10) 安藤俊雄『観無量寿経疏妙宗鈔概論』4-5, 81頁、池田魯参「趙宋天台学の背景」『駒駒大学仏教学部論集』第14号など。
- (11) 李通玄『新華嚴経論』巻六(大正36・759中-760上)。
- (12) 安藤俊雄『天台性具思想論』136-145, 171頁以下、同『天台思想史』37-41頁、塩入良道「天台思想の発軀」『講座東洋思想』6、日比宣正『唐代天台学研究』255-265, 274-277, 315-381頁など。
- (13) 『宋高僧伝』巻二八(大正50・887中)、『景德伝燈録』巻二六(大正51・421下-422上)。
- (14) 『新修往生伝』巻下(『統浄土宗全書』巻一六, 124-125頁)、『龍舒浄土文』巻五(大正48・268中下)。
- (15) 『楽邦文類』巻三、四、五(大正47・192下, 195上中, 198下-200上, 214下-215上)。
- (16) 前号第四章第四節「中国浄土思想史における永明延寿」89-95項。

要 結

本章では、唯心浄土思想家が輩出する宋代を唯心浄土思想の確立と規定して、初めに関係資料の調査・整理・分析等の資料研究を行なった。次いで、思想研究に進み、宋代浄土教全体の特徴から

唯心浄土思想の手がかりを得てから、具体的な思想形態の諸相と諸問題を解明した。それによって、宋代の唯心浄土思想の総合的研究はなし終えたと思われるが、また新たな課題も提起された。

第一節「従来の見解と問題の所在」では、唯心浄土思想に関する従来の研究は宋代仏教、とくに趙宋天台に多く、初めて「唯心浄土、本性弥陀」の用語が認められたが、知礼・遵式・元照等の著名な思想家に限られ、未だ総合的成果は認められなかった。そこで、本章の問題の所在は唯心浄土思想資料を調査し整理し、思想形態とそれに係わる諸問題を解明し、総合的成果を意図した。

第二節「唯心浄土思想の諸資料—『楽邦文類』の関係資料—」では、多くの浄土資料を集録する『楽邦文類』を客観的に評価し、そこに認められる唯心浄土思想関係文を指摘した。総数は58文に及び、それに伴う留意点(総数の多寡、西方浄土との関係、弥陀と諸仏の会通など)に注意した。

第三節「唯心浄土思想の形成過程—宋代までの唯心浄土思想資料集成—」では、さらに現存資料・先行資料・引用資料を加味し、可能な限り年代別系統別の分類・整理を試みた。概数は経典7部、先行思想8部、宋代関係文38師67部である。それによって宋代までの資料集成、従って、本稿の大きな意図の一つ、資料に係わる総合的成果はなしえたと思われる。次いで、資料から知られる宋代の唯心浄土思想の特徴に論及し、第一に中国浄土教史の一大潮流、第二に延寿の影響の有無、第三に融合的傾向を指摘した。

第四節「唯心浄土思想の諸形態」では、宋代の唯心浄土思想の具体的形態と論証、それに係わる諸問題等を解明した。

初めに、第一項で思想解明の手がかりを宋代浄土教の特徴から学び、唯心浄土思想の融合的性格、それに伴う成立の事情と課題(西方浄土との関係・延寿の影響など)の示唆を得た。

次いで、第二項で唯心浄土思想関係文から主要な要語を整理し、第三項で「問題の所在」で提起した課題(「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の有無、弥陀浄土と諸仏浄土の判別、先行思想の確定など)を吟味した。

「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の用語については知礼が初出で、初めて唯心浄土系の浄土観と本性弥陀系の仏身観が統一され、唯心弥陀浄土思想が成立し確立した。中国では「己心弥陀」の用語は無い。「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」明記は18部で資料的に多くないが、われわれが使う「唯心浄土思想」という総称は資料からみても的確な用語である。天台系は「本性弥陀」、禅系は「自性弥陀」が多いことなどが知られた。これらは新しい知見と思われる。

また、唯心の弥陀浄土と諸仏浄土の判別では、前代までに較べて唯心諸仏浄土思想資料が極端に少ない理由は『楽邦文類』によるが、宋代には「浄土」は弥陀浄土に専有されたという中国浄土教史上の傾向を指摘した。

典拠の経典・先行思想の確定では、宋代引用典籍を指摘して実証した。就中、『観経』是心是仏釈→『天台観経疏』→『同妙宗鈔』の天台系と『維摩経』心浄土浄説→『六祖壇経』西方浄土批判説→禅師・居士の禅系が主要な流れである。それによってまた、西方浄土との関係、延寿の影響の課題が残された。

第四項、天台系・禅系唯心浄土思想と諸問題では、まず従来の研究から知礼・遵式・元照・守納・道琛の見解を整理し、前節までの考察から天台系・禅系の大要を辿った。そこでも共通して唯心

浄土と西方浄土の関係が課題であった。

次いで天台系唯心浄土思想を主な要語から指摘したが、それは最早天台系諸師に限られたものではなかった。思想としては天台思想であるが、人としては律師・禪師・居士に及んでいる。天台系唯心浄土思想の特徴は第一に西方浄土肯定論で、理論的根拠は天台性具説の「相即」「不二」である。第二に天台系唯心浄土思想は唐代までの弥陀浄土教を否定したのではなく、肯定した上で新思想として出現した。それゆえ天台系思想家が多いことも論理的に立証できた。

禪系唯心浄土思想については、禪本来の立場から唯心浄土は肯定されるが、しかし、天台系と異なり、西方浄土説は論理的に成り立たない。そこで、禪家の西方浄土批判説とそれに対する唯心浄土思想家からの禪者批判が現われる。ここでは具体的資料を挙げ、併せて中国浄土教史上の禪家批判を紹介し、当時の状況を推定した。そこで新たな疑問が生じた。禪本来の立場から西方浄土説が批判されるとしたら、宋代から現われた禪浄双修思想の浄土とは何かという点である。禪と唯心浄土との双修は問題ないが、禪と西方浄土往生行との双修は論理的に矛盾する。それは別な課題とした。

その他の形態としては、華嚴系唯心浄土思想、思想形態が窺えない偈頌に多い咏嘆調の表現などがあり、以上で宋代の唯心浄土思想の諸形態と諸問題は論述できたと思われる。

第五項では、これまでに再三提起された課題、唯心浄土と西方浄土の関係、延寿の影響について考えた。

唯心浄土と西方浄土との関係については、具体的資料を挙げて主な理論的根拠を調べた。第一は天台性具説の再確認である。第二は理事無礙の浄土観からの解釈である。理としての唯心浄土、事としての西方浄土の無礙で、最も有力な論証である。また、それによって禪浄双修思想の成立、唯心浄土の法性土説という新たな事柄が知られた。第三は定散二善・理観事観の行業論からの解釈である。第四は上根・中下根の機根論からの解釈である。行業論・機根論とも『観経』解釈の長い歴史を継承した宋代の一般的見解である。総括すると、理としての唯心浄土は上根の人の定善理観行で、事としての西方浄土は中下根の人の散善事観の往生行となるが、諸師によって微妙に異なり、安易な会通に注意した。

最後に延寿の宋代唯心浄土思想に及ぼした影響については、「唯心浄土」の用語、理事無礙思想、中下根の西方浄土往生に共通点はあるが、「唯心浄土」は質的に異なり、他も延寿個有の思想とは限らない。それよりも、宋代の唯心浄土思想資料に延寿著述の引用が一点も認められない。唯心浄土思想に限っては資料的に立証できないのが最大の難点である。

以上によって、「唯心浄土思想の確立」の資料的思想的研究はほぼなされたと思われる。それはまた本稿「中国浄土教における唯心浄土思想の研究」で意図した総合的成果の最大のテーマを終えたことを意味する。

第六章 唯心浄土思想の継承 —— 元明清代の唯心浄土思想資料 ——

前章では唯心浄土思想に関して最も重要な確立の時代、すなわち宋代の唯心浄土思想の諸資料と思想形態、それに係わる諸問題について考察した。それによって、中国浄土教における唯心浄土思想の研究として重要分野の考証はほどなしえたと思われる。しかし、唯心浄土思想の総合的成果を意図する本稿では、なおその後続く元明清代の資料と思想についての考究も課せられている。時代社会が異なる以上、思想もまた新たな展開を遂げるからである。

しかし、前号と同じく本号でもなすべき課題は多く、最早紙数も時間的制限も越え、加えて次号の見通しも諸般の事情で約し難い。それゆえ本章では元明清代の唯心浄土思想資料の抄出にとどめざるをえない。資料はわれわれが被見しやすい大正蔵経諸宗部(浄土関係資料)、続蔵経浄土宗部などの唯心浄土思想である。一読して宋代からの明らかな影響、新たな諸相と課題等が認められるが、こうした総合的成果はその他の資料調査を含めて他日を期したい。

元代(1206—1367)の唯心浄土思想資料

『礼念弥陀道場懺法』十卷 王子成(1213年頃, 続蔵2乙・1・1-2)

※「重刊礼念弥陀道場懺法序」(75)

余觀古今論, 念仏往生者, 多誇自力, 所謂唯心浄土, 不往而往, 自性弥陀, 不成而成之類也。

竊意斯論, 似輕仏力也。 至順三年(1332年)日本国沙門至道序。

「弥陀懺序」李純甫撰 崇慶二年(1213年)序(76)。

卷三 「引教比證」第三(90)

「龍舒虚中 浄土法門」 勤修須断 勤執求生

世有專於執著者云。唯心浄土, 豈復更有浄土, 自性弥陀, 不仏更見弥陀。此言似之而非也。

卷六 「発菩提心」第七(106)

欲了唯心浄土, 須依離相菩提。

『仏祖統紀』五四卷 志磐(1269年, 大正49)

卷一六(230下, 231上)

道琛。

忽感悟曰。唯心浄土一而已矣。良由弥陀, 悟我心之宝刹。我心具弥陀之樂邦。

書偈曰。唯心浄土, 本無迷悟。

卷二二(247上)

王闡。

衆生本心, 具四浄土。

『蓮宗宝鑑』十卷 普度(1305年, 大正47)

※蓮宗宝鑑序(302下, 303上)

觀經金口所宣而曰。是心作仏是心是仏，故觀心即觀仏也。

或難言，三聖接引，則淨土在西方明矣。得無与自性惟心之旨相矛盾乎。

余曰，弥陀者衆生之弥陀也。衆生者弥陀之衆生也。極樂者弥陀之惟心也。惟心者衆生之極樂也。故識自性惟心之旨。

紫柏弟子錢士升

卷二 「念仏正教説」

「離相念仏三昧無住法門」(310 下)

是名離相念仏三昧。此則見一切衆生，本性皆同弥陀。

「參禪念仏三昧究竟法門」(312 上)

是我本性阿弥陀。

「攝心念仏三昧調息法門」(312 中)

三昧忽爾現前，即是唯心淨土。

「慈照宗主円融四土選仏凶序」(313 中，第五章第三節参照)

自性弥陀仏 唯心淨土機

「常寂光淨土」(314 下)

唯心淨土，唯心淨。

「西方四土」(315 中)

善觀心者，一切万法，唯心本具耳。

「心仏無殊」(316 下)

此心即是弥陀仏 弥陀即是自心源

卷三 「念仏正宗説」

「李長者華嚴合論十種淨土權実宗体」(318 上中)

第一阿弥陀經淨土……。第二無量壽觀經淨土……。第九唯心淨土……。

「寂室大師示淨土実見」(319 上)

不修淨業者云，……淨土唯心，我心既淨則国土淨，何用別求生處。寂室曰，……。

卷四 「念仏正派説」(319 下)

故我祖師欲令大地衆生，見本性弥陀，達唯心淨土，普能覺悟菩提之妙道。

「天竺慈雲懺主」(325 中)

懺主悟本性之常寂光，履唯心之仏土，淨自利利他……。

「龍舒居士王虛中」(326 下)

噫，自非了唯心本性之道，達生死变化之数。不臻于是。

卷五 「念仏正信説」(327 中)

夫，唯心樂国普遍十方，自性弥陀円融一智。

「断疑生信」(328 上)

所以正信心中憶念仏名，淨念相繼自性弥陀現前。

「無為楊提刑直指淨土決疑序」(330 上)

唯心淨土自性弥陀，大光明中決無魔事。

卷六 「念仏正行説」(330 下)

清涼国師云、諸仏心内衆生新新作仏、衆生心中浄土念念証眞。

「修進工夫」(331 上中)

浄土唯心之説既已明矣。

上上根智人直下自悟、識自本心、見自本性即是弥陀、此則是如来……。其未能頓悟之人、須是諦信浄土……。

「自行化他」(334 下)

自見本性弥陀、亦教人見本性弥陀。

「以事檢心」(335 中)

今引万善同歸集後偈。……願生唯心浄土。

卷七 「念仏正願説」(335 下, 336 上)

願我盡生無別念、唯心浄土独相隨。

從這裏入頭悟自性弥陀、達唯心浄土入諸仏境界。

「勸發大願」(336 中)

予応之曰。不然善知識仏是覺也。浄土是心也。此心誰不有之覺即心也。迷則衆生也。

「慈照宗主示念仏人発願偈並序」(336 下, 第五章第三節参照)

臨終見仏、即非外来、盡是唯心顯現。……臨終発現浄土弥陀、即非外来、皆從自心出也。

卷八 「念仏往生正訣説」(338 中-339 上)

必欲生浄土見阿弥、而後已須知仏本無身亦無、其土皆衆生心浄所由致感也。經不云乎、是心作仏是心是仏、諸仏正遍知海從心想生。

夫心者、造罪之源、成仏之本。……非但浄土唯心、蓋地獄亦唯心矣。

自性弥陀決然可見。

「化仏来迎」(340 中下)

宗鏡録或問曰……。……只此一念是本性弥陀、只此一念達唯心浄土。

卷十 「念仏正論説」(343 中)

大矣哉。浄土之道。其為体也。以弥陀即本性、其為宗也。以浄国即唯心、其為用也。

「西方弥陀説」(344 上-下)

如經所載有理有迹。論其理者西方即自性也。……, 了見本性弥陀、直達唯心浄土。

「眞如本性説」(344 下)

禪宗則曰正法眼蔵、蓮宗則曰本性弥陀、孔子則曰天理。

「破妄説災福」(345 下, 346 上)

夫仏祖正法、以本性弥陀為体、念仏信願為宗、自行化他為用。

比来学者迷失宗旨……本性弥陀罔知下落……実可悲哉。

「弁明三関」(347 下)

阿那箇是我本性弥陀。

「弁明大小二乘」(347 下)

或言。我学上乘，却又不識本性弥陀，唯心淨土之旨。

(後序)「名徳題跋」

弥陀自性時時現 淨土唯心法法彰(352 中)。

以惟心淨土，本地風光(352 下)。

仏子，見自性弥陀，悟本来清淨(353 上)。

「西蜀楚山和尚示衆念仏警語」(353 下)

便見自性弥陀，頭頭顯現常光淨土。

『淨土境觀要門』 懷則(1310 年，大正 47)

弥陀海衆正報之身三十二相等，皆是我心本具，皆是我心造作……。能了此者方可論於即心觀仏。所以得云，唯心淨土，本性弥陀(290 上)。

問，淨土依正在十万億刹外。何云唯心淨土本性弥陀…。答，此義須行三諦三觀說之…(291 中)。

問，唯心淨土之唯心与本性弥陀，及十不二門唯色唯心之唯心，同異如何。答，唯心淨土是所觀陰境，本性弥陀是所顯法門……(291 下)。

『懷淨土詩』 中峯明本(1263-1323 年，大正 47)

禪外不曾談淨土 須知淨土外無禪(229 中)。

自性弥陀不用參 五千余卷是司南(229 下)。

即心自性弥陀仏 滿面塵埃又一年(230 上)。

自性弥陀絶証修 只消扣己便相投(230 中)。

因忘自性弥陀仏 異念紛飛總是魔(230 中下)。

一尊自性弥陀仏 出現扶桑照眼紅(230 下)。

『淨土或問』 天如維則[-1335~1340-]著，株宏編，広信校(大正 47・294 上-295 上)

問曰。……然亦嘗聞有惟心淨土本性弥陀之說。……所謂淨土者，……所謂弥陀者，……遠在惟心本性之外矣。果何謂耶。

答曰。汝言局矣。……当知，淨土惟心，心外無土……。惟心淨土，土外無心。

所謂，十方微塵国土者，惟吾心中之土也。三世恒沙諸仏者，惟吾中心之仏也。知此則知無一土不依吾心而建立，無一仏不由吾性而發現。然則十万億外之極樂，独非惟心之淨土乎。極樂国中之教主。独非本性之弥陀乎。

知此則知諸刹諸塵，塵塵皆唯心之極樂也。一塵一仏，仏仏皆本性之弥陀也。

『阿弥陀經句解』 性澄(1341 年，統蔵 1・33・2)

須了知弥陀世尊，雖居十万億刹之外，全我一心本具。……，能念之心，本無自性(150)。

『西齋淨土詩』三卷 梵琦(1296-1370 年，『淨土十要』卷八，統蔵 2・13・5)

卷二 「列名淨土詩一百八首」(419)

正是結交頭本性弥陀仏，人間總自由。

卷三 「析善導和尚念仏偈八首」(422)

不如及早念仏 悟取弥陀自性。……。

但念阿弥陀仏 此心念念是仏 仏外更無別心 心外更無別仏。

「西方樂漁家傲十六首」(425)

著唯心浄土誰云隔。

明代(1368-1662)の唯心浄土思想資料

『阿弥陀経略解』 大佑(1334-1407)(1392年, 続蔵1・33・2。『阿弥陀経略解円中鈔』伝燈参照)

「序」(154)

而応了唯心之本具。億刹非遥。

「略解」(159)

然須了達法界唯心, 心外無境。弥陀相好元是自心, 十万億程不踰当念。

『浄土指帰集』二卷 大佑(1393年, 続蔵2・13・1)

卷上 「宗旨門」第二

「心外無法」(63)

慈雲懺主云。或曰, 浄土在心。何須外覓……。釈曰, 子又不善心土之義也。

「浄土唯心」(63-64)

欲達唯心浄土, 先了諸法互融。……, 須知, 心外無法, 故云唯心。

心外無土, 土外無心, 此即事之理, 唯心浄土也。……而求往生, 此即理之事, 西方浄土也。

「十種無礙」(64)

修性不二。唯心浄土, 是本具之理, 全修在性也。……, 故経云, 是心作仏, 是心是仏……。

「挙一全収」(65)

真歇了禪師曰。或曰, 唯心浄土, 人人本具。何不直下承当反求之於十方億刹之外耶。

答曰。若会得唯心浄土, 豈但十万億国微塵刹土亦未為遠…。不但唯心浄土, 地獄天宮唯心所現。

「法相門」第三

「定散二業」(65)

定謂即心觀仏。想彼西方依正主伴, 唯心本具。……, 故経云……是心作仏, 是心是仏……。

卷下 「證驗門」第六

「念不間断」(81)

王仲回, 問無為子曰。……祖師則云, 心即是浄土, 不用更求西方……。無為子曰。……此以理奪事也。

「決疑門」第七

「以理奪事」(87)

六祖壇経説, ……自心有西方, 何処覓西方……。又誌公云, 智者知心是仏, 愚人願往西方。

二師所言, 皆以理奪事。……, 以事即理故, 念而無念, 生而無生。

「求仏加護」(89)

照律師云。或問, 観経云, 是心作仏, 是心是仏。心既是仏, 何須念他仏耶。

答, 祇由心本是仏故, 令專念彼仏。……, 即是以我未成之仏求他已成之仏, 而為救護耳。

『浄土簡要録』 道衍(-1418)(1381年, 続蔵2・13・2)

四明法智法師, 答楊文公請住世書略曰。……求往惟心之浄土, 願見本性之弥陀(103)。

眞歇了禪師曰。……。問, 既是人人本具。唯心浄土, 本性弥陀, 何不直下承当反求十万億国之外乎。对曰。若会得唯心浄土, 本性弥陀。何憚十万億国之程河沙国土, 亦未為遠……。故弥陀世尊直示心中之一仏耳。若指心之全体, 不值唯心浄土, 唯心地獄唯心六道, 所由生也(104)。

天衣懷禪師……見訥師惟心浄土文(108)。

山堂倫法師曰。……, 定謂即心觀仏, 想彼西方依正主伴, 唯心本具。我心空故如来本空, 我心仮故如来宛爾……。故經云……是心作仏, 是心是仏……(108)。

円弁法師曰。唯心浄土一而已矣。良由弥陀我心之宝刹, 我心具弥陀之楽邦(108)。

寂室曰。……人示以浄土, 必曰, 浄土唯心……(108)。

陳翁与明智法師論台宗三千法, 其間示唯心浄土之義曰……(109)。

「後序」(110)

心外無法, 故曰唯心。即心之法疆名浄土……。 大佑敬書於篇末。

『宝王三昧念仏直指』二卷 妙叶(1395年, 大正47)

※「序」智旭(354中)

而世之昧者, 猶以為自性弥陀, 非即楽邦教主, 惟心浄土不在十万億西……。

卷上 「斥妄顕眞」第二(357上, 中)

西方即我眞心, 眞心無性, 即彼名体以顕我心。名体本空, 亦即我心而示其相。心境一体, 生仏同源。求彼仏, 即求自心。

謂, 是唯心浄土, 本性弥陀者, 実遼遠矣。

実不出吾之心性, 故名唯心浄土本性弥陀。……得名為惟心本性之仏耶。

卷下 「附眞妄心境図説」(379中)

仏祖有云, 惟心浄土自性弥陀者, 正在此以方相為喩。

「附破妄念仏説」(380上, 下)

又我心即是彼仏之心, 彼仏即是我心之仏, 一体無二, 故云, 惟心浄土, 本性弥陀。

捨穢取浄則感応道交, 見彼本性弥陀。了悟一心則浄穢自分, 可悟惟心浄土。

『帰元直指集』二卷 宗本(1570年, 続蔵2・13・2)

卷上 「念仏正信往生文」(112)

蓮宗宝鑑云。夫唯心楽国。普徧十方, 自性弥陀, 円融一智。

「行脚求師開示序」(116)

只此一念是本性弥陀, 只此一念是唯心浄土。

「開示參禪龜鏡文」(117-118)

徧法界是箇自己弥陀, 盡虚空是箇唯心浄土。

「龍舒王居士勸人徑修浄土」(123)

世有專於參禪者, 只説唯心浄土, 豈復更有浄土。自性阿弥, 不必更見阿弥。皆失之矣。……。

「諸祖指帰浄土文」(125, 126)

寂室大師示浄土実見云。不修浄業之人……或聞説浄土，必曰浄土唯心，我心既浄則国土浄，何用別求生処。寂室曰……。

無盡居士云。自歎……本性弥陀，唯心浄土，不能悟達。

「三教眞如本性説」(135)

禅宗則曰正法眼蔵，蓮宗則曰本性弥陀，孔子則曰天理。

「西方百詠普告諸賢」(142, 143)

本性弥陀皆具足 現成公案不須參

西方直指易修持 本性弥陀孰得知

疑到情忘心絶処 元来自己是阿弥

卷下 「円修浄土決疑論」(162, 163)

或曰。自性弥陀，本具唯心，浄土現成。何須念彼仏而求生他土乎。……。一元曰。仁者雖説唯心之言，実未達唯心之理。

唯心浄土者，常寂光是也。

況可又執自性弥陀唯心浄土哉。固雖唯心浄土自性弥陀，人人本具，未到此地者，不許説此話也。

即是現成自己弥陀，何必求生他方浄土。此等之人可悲可痛可愍可笑。

可便説現成自己弥陀，不必求生西方浄土。此等盲人……自取誅滅。

「山居百詠聊述鄙懷」(175)

了得唯心眞浄土 方知極樂在娑婆

『浄土決』 李贄(続蔵2・13・2)

「前引」(179)

故知，阿弥陀仏浄土，即自心浄土。

「寿禅師勸修浄業見万善同帰集」(179)

問。唯心浄土，周徧十方……。答。唯心仏土者，了心方生……。

「西方偈贊(宗本)」(189)

西方直指易修持 本性弥陀孰得知

疑到情忘心絶処 元来自己是阿弥

『西方直指』三卷 一念(続蔵2・13・4)

卷上 「浄土弁疑」(312)

浄土唯心

心外無土，土外無心。此即事里[理]唯心浄土也。……衆生念彼土之仏，而求往生。此即理之事西方浄土也。

「題西方直指」(324)

舍唯心浄土之外，別求毗盧性海，亦無是処。 万曆丙午(1607年)……登甫題。

『中峰国師三時繫念仏事』(明代年不詳，続蔵2乙・1・1)

第一時(58)

因忘自性弥陀仏 異念紛馳總是魔

阿弥陀仏即是我心，我心即是阿弥陀仏。浄土即此方，此方即浄土。……，以自性阿弥陀……。

人人分上，本有弥陀，箇箇心中，總為浄土。

第二時(59)

經云，……，有仏号阿弥陀，今現在說法。總不出唯心浄土，本性弥陀也。

『中峰三時繫念儀範』(明代年不詳，統藏2乙・1・1)

第一時仏事(63)

前出『中峰国師三時繫念仏事』第一時と同文。

「重刻三時繫念跋」 万曆辛卯(1591年)周從龍・徐名世和南謹跋(71)参照。

『阿弥陀経略解円中鈔』二卷 大佑述，伝燈鈔(1621年，統藏1・91・4)

「序 伝燈」(382)

又曰，了唯心本具，億刹非遥。

(鈔)惟心浄土，本性弥陀之妙法，第言之雖易，理亦難精(384)。

(疏)了惟心之本具，億刹非遥。(鈔)能了事理体一，生仏原同，則十万億刹之遐方，皆我惟心本具。

雖遠不遠(385)。

(鈔)此経不出千言。備詮惟心浄土本性弥陀之旨(385)。

卷上

(疏)阿弥陀是理。(鈔)阿弥陀判屬於理者，以是本性弥陀故(388)。

(疏)経云，有信者……。 (鈔)信則信有惟心浄土本性弥陀……(389)。

卷下

(鈔)円教人，能達浄土唯心，弥陀本性……(410)。

(疏)弥陀相好，元是自心。(鈔)弥陀相好，乃我本性之弥陀，十万億刹，乃吾唯心之浄土。故曰元是自心(411)。

(疏)皆為諸仏護念。(鈔)此唯心浄土，本性弥陀之旨，皆為諸仏之所護念(414)。

「刻円中鈔跋」(422)

惟心浄土，本性弥陀者，必以是為菟狗……。 皇明天啓五年(1625年)……無盡燈僧書。

『浄土生無生論』 伝燈(1603年，大正47)

「身土縁起門」(382中)

弥陀已成吾心当果，悉由心性之所變造。心具而造，豈分能所。即心是仏，即仏是心。即心是土，即土是心。

「心土相即門」(382中)

謂十万億遠之仏土，居於凡夫介爾之心。即心是土，即土是心。

「生仏不二門」(382下)

蓋諸仏乃悟衆生心内諸仏，衆生乃迷諸仏心内衆生。……。故古徳云，諸仏心内衆生塵塵極樂，衆生心内諸仏念念證眞。故弥陀即我心，我心即弥陀。

「感応任運門」(383中)

故曰，諸仏是衆生心内諸仏，衆生是諸仏心内衆生。

「彼此恒一門」(383 下)

蓋西方極樂世界乃吾心之一土耳。娑婆世界亦吾心之一土耳。

『幽溪無盡法師浄土法語』 正知(『浄土十要』卷九，統藏 2・13・5)

言言闡浄土之惟心，句句演弥陀之本性(429)。

悟極樂原是我惟心之浄土，不是他土。了弥陀原是我本性之眞仏，非是他仏(430)。

※『観無量寿経図頌』伝燈(統藏 1・33・1)

「叙」各有自性弥陀，自現惟心浄土。 歲次乙未(1655 年)張文嘉仲嘉甫(50)。

『浄土生無生論註』 正寂(1612 年，統藏 2・14・1)

土既唯心，心非遠近(16)。

既曰浄土唯心……(16)。

『浄土生無生論親聞記』二卷 受教(1626 年，統藏 2・14・1)

卷上

如是之人，与談惟心本性可也。談惟心浄土本性弥陀，莫之可也(21)。

弥陀即我之本性，浄土即我之惟心。是以無生而生，生即無生(21)。

……得此為本。然後可以譚惟心浄土，本性弥陀也(22)。

即性具十界，五陰国土，名空如来藏等。然則惟心浄土，本性弥陀……(23-24)。

卷下

唯心浄土本性弥陀之旨，談至此可謂妙絶古今矣(33)。

或有妨云，浄土惟心，誰人不具……(37)。

『阿弥陀経疏鈔』四卷 株宏(1532-1612)(統藏 1・33・2-3)

卷一

心仏衆生一体，中流兩岸不居，故謂，自性弥陀，唯心浄土。

蓋心即是仏，仏即是生。諸仏心内衆生，念衆生心中諸仏也。故云一体。

自性弥陀，唯心浄土，意蓋如是。是則禪宗浄土，殊途同歸(167-168)。

卷二

(鈔)今経言，一心不乱。即自性弥陀，惟心浄土，為一経大旨也(185)。

『同事義』 株宏(統藏 1・33・3)

十種權実浄土。……，第九唯心浄土(251)。

『答浄土四十八問』 株宏(1584 年，統藏 2・13・2)

「序」(192)

若夫悟心外之無土，則一眞湛而万法泯，誰是西方。了土外之無心，則七宝飾而九蓮開，何妨本寂。

「本文」

心浄土浄，語則誠然。但語有二義。一者約理，謂心即是土，浄心之外無浄土也。二者約事。謂心為土因，其心浄者其土浄也(192)。

若云淨土唯心，心体常樂(197)。

『往生集』三卷 株宏(1584年，大正51)

「序」(126下)

而客有過我者……勃然曰，淨土唯心，心外無土，往生淨土寓言也……。

卷二 「王仲回司土」(138下)

而祖師云，心是淨土，不必更求，如何。楊公答曰……。

『雲棲淨土彙語』 株宏(清貞執西・嚴培西錄，統藏2・14・1)

「竹窓二筆」(81)

淨土不可言無

有謂唯心淨土，無復十萬億刹外，更有極樂淨土。此唯心之說，原出經語，真實非謬。但引而擲之者，錯會其旨。

「竹牕三筆」(82)

念仏不見悟人

況實心念仏者，志出娑婆，精求淨土，念念如救頭然，即其悟本性之弥陀，了惟心之極樂。

『淨土資糧全集』八卷 株宏校正，莊広還輯(1594-1600年，統藏2・13・3)

「序」(214)

慨自唯心淨土之旨，不明于世。

卷二 「楊次公」(233)

蓋以唯心淨土，自性阿弥。恐修淨業者，但知西方之有淨土阿弥，而不知吾心之淨土自性之阿弥。

「龍舒淨土起信文」(235)

世有專於參禪者云。唯心淨土，豈復更有淨土。自性阿弥。不必更見阿弥。此言似是而非也。

攷證 唯心淨土。淨土指歸曰，欲達唯心淨土，先了諸法互融……。心外無土，土外無心，此即事之理，唯心淨土也。……，即此土衆生，念彼土之仏，而求往生，此即理之事，西方淨土也。

「蓮池禪師淨土疑弁」(241)

攷證 由是觀之，所謂，微塵国土者，唯吾心中之土也。

卷五 「論一心三觀」(288)

又曰。問，淨土依正在十萬億刹外，何云惟心淨土，本性弥陀…。答，此義須約三諦三觀說之。

卷六 「論数息念仏」(296)

三昧忽爾現前，即是唯心淨土。

『阿弥陀經疏鈔演義』四卷 古德演義，慈帆智願定本(統藏1・33・3-4)

卷一

「科分」 科中通序大意者，含二義。一通序，一經大意以明性贊經。二科，發揮自性弥陀，唯心淨土，為修持之本……(265)。

「註」 此經以自性為宗……。又復經中一切依正，皆彰我自心(266)。

今此念仏往生，必先明自性弥陀為本，然後一心称名，求願往生(269)。

「序」 乃知下，是明理一心境界。匪離四句，正說唯心浄土也(272, cf. 『疏鈔』167)。

通乎事相者，不悟自性弥陀，唯心浄土，但以妄念念仏，離此生彼……(273, cf. 168)。

「註」 事依理起者，事不自事，因理而事。因自性弥陀，故勸人念弥陀。因唯心浄土，故勸人生浄土。理得事彰者，理不自彰，由事乃彰。因念弥陀，方顯自性弥陀。因求浄土，乃悟唯心浄土。由是心是仏，方乃是心作仏。因是心作仏，方顯自心是仏故(273)。

仏以大慈下，双約事理。約事則四十八願……。約理則自性弥陀(275)。

汝若悟心万牛莫挽者，悟心之土，知浄土唯心。生浄土者，非生浄土，生自己心中也(281, cf. 172)。

古云，諸仏心内衆生，塵塵流轉，衆生心中諸仏，念念證眞也。……。今独拳根本自心者，以信浄土唯心，為浄業之独要也(287, cf. 177)。

卷二

又即理五句，是依理成事門。隨其心浄，悟惟心浄土，正所依之理也(296, cf. 185)。

華嚴合論云。……第九唯心浄土(309, cf. 196)。

卷四

又猶予者，利根執自性弥陀，唯心浄土。不信十万億外，有世界極樂。鈍根執事，不信自性唯心之旨。皆猶予也(342, cf. 229)。

『蓮邦詩選』 広貴(統蔵2・15・4)

「西方詠」一元(318)

西方直指易修持 本性弥陀孰得知

「浄土詩」 中峯(318)

即心自性弥陀仏 滿面塵埃又一年

自性弥陀如不念 未知何以敵無常

因忘自性弥陀仏 異念紛馳總是魔

「懷浄土」 楚石(319)

自性弥陀不外尋

「浄土偈」 滿益(319, 321, 324, 326, 334)

西方即是惟心土(16首)

「無量寿仏讚」 大智(322)

八万四千妙相，得非本性之弥陀。十万億刹遐之方，的是惟心之浄土。

「念仏詩」 優曇(325)

自性弥陀見也麼 問他面目是如何

「浄土詩」 楚石(328)

妙喜有云，若見自性之弥陀，即了惟心之浄土……。

有心者，悉当念仏。前所謂惟心浄土，自性弥陀，不出戸庭，夫何遠之有。

「浄土詩」 博山(328-329, 332-333, 336, 337)

浄心即是西方土(17首)

「西方詠」 一元(330)

疑到情忘心絕處 元来自己是阿弥

「懷淨土」 中峯(331)

自性弥陀絕證修 只消扣已便相投

長鯨一吸四溟乾 自性弥陀眼界寬

「懷淨土詩」 蓮隱(335)

淨土惟心好荷擔 四字弥陀窮徹底

『西方合論』十卷 袁宏道(1599年, 大正 47)

卷一 「第一刹土門」(390 中)

二, 惟心淨土者, 直下自證当体無心, 即是淨土。如維摩經云……。夫, 心是即土之心, 土是即心之土, 心淨土淨, 法爾如故。

卷四 「第四教相門」(400 上)

五, 頓悟教者, ……。如觀經中, 是心作仏, 是心是仏等語。皆直指心宗。

卷五 「第五理諦門」(401 下)

一, 即相即心門者, ……弥陀海衆正報之身, 三十二相等, 皆是我心本具, 皆是我心造作……。

卷八 「第八見網門」(412 下)

八, 唯心墮者, 謂自性淨土……何須分別。答。……。是故当知, 諸仏以唯心故, 忻厭出生……。

『淨慈要語』二卷 元賢(1578-1657)(1634年, 統藏 2・13・5)

卷上 「淨土教源」(502)

雖曰唯心淨土, 而不妨有極樂世界, 以世界即一心之所現也。雖曰本性弥陀, 而不妨有極樂教主, 以教主即本性之所成也。

「念仏正信」(502)

所信仏言凡有二門。一信其理, 二信其事。信其理者, 信我心便是淨土, 我性便是弥陀也。信其事者, 信西方果有淨土, 西方果有弥陀也。

「淨土弁疑」(505)

問。唯心淨土, 何用求生極樂乎。答曰。汝謂唯心淨土者, 乃執方寸之心, 為淨土, 而極樂遠在十萬億之外。此全不知唯心之旨者也。

『阿弥陀經要解』 智旭(1599-1655)(1647年, 大正 37)

苟能一念回心決定, 得生自己心中本具極樂, 更無疑慮(364 中)。

奈何舍[離]此淨土, 而別談[譚]唯心淨土(369 下, 『淨土十要』卷一 統藏 2・13・4, 335)。

然有事持理持。事持者, 信有西方阿弥陀仏, 而猶未達是心作仏是心是仏……。理持者, 信彼西方阿弥陀仏, 是我心具, 我心造……(371 中)。

※「刻弥陀要解後序」(374 下)

古人云。念自性弥陀, 生唯心淨土。合而觀之, 則是心作仏, 是心是仏, 心外無仏, 仏外無心之義明矣。後人不達, 捨西方極樂, 而別言唯心淨土。捨万德慈尊, 而別言自性弥陀。不幾心外有

仏、仏外有心耶。吾滿益師深悟心性無外之体。 古吳浄業弟子正知識。

『浄土十要』十卷 成時(1618-1678)(1668年, 続蔵2・13・4-5)

「重刻序」(326)

浄土法門亦如是。自心之阿弥, 還度自心之生死。

卷三 「阿弥陀經行願儀」(358, cf. 337)。

然有事持理持……。

卷八 「靈峰滿益大師西齋浄土詩贊」(409)

成時曰。事理分張惡者, 謂捨西方功德莊嚴之阿弥陀仏, 而別計自性弥陀。捨西方功德莊嚴之極樂世界, 而別取唯心浄土。此則事理乖張成大邪見……。

清代(1616-1911)の唯心浄土思想資料

『浄土晨鐘』十卷 周克復(1659年, 続蔵2・14・2)

「自序」(96)

或曰, 惟心浄土之説, 誠謬乎曰否。究竟只是惟心浄土。

不乱之心, 即是作仏之心, 即是無住平等之心, 即是惟心浄土之心。

從來言者之失徒, 在空談此心耳, 不思惟心浄土, 不可説現成空頭話。須有修為工夫, 在念仏求生浄土。正是修悟自性, 惟心之工夫。

卷二 「浄土啓信」

「浄土脚踏實地不可不信」(107-108)

世有專於參禪者云, 惟心浄土, 豈復更有浄土。自性阿弥, 不必更見阿弥。此言似是而非也。

卷四 「浄土念仏法門」

「攝心調息念仏三昧法門」(117)

三昧忽爾現前, 即是惟心浄土已上蓮宗寶鑑。

「參禪念仏三昧法門」(117)

見性則成仏。畢竟那箇是我本性阿弥陀。……, 豁然明悟, 親見本性弥陀……。

「論約心觀仏」(119)

能了此者, 方可論即心觀仏, 方得云惟心浄土本性弥陀。故天台大師積是心作仏是心是仏二句。

「論一心三觀」(119)

如是修, 如是觀。所謂, 惟心浄土, 本性弥陀。無時不在行者心目間矣。…… 已上纂懷則大師境觀要門。

卷五 「功行法門」(120)

心浄土浄, 斯之謂, 惟心浄土, 本性弥陀。

卷六 「浄土策進」

「策願力」(127)

要人自信自肯, 從這裏入頭, 悟自性弥陀, 達性[惟]心浄土, 入諸仏境界。

卷八 「淨土正弁」

「弁心境非二淨土不可言無」(136)

有謂唯心淨土，無復十萬億刹外，更有極樂淨土。此唯心之說，原出經語……。

卷九 「淨土了俗」

「了邪教之妄」(146)

慈照宗主，欲令大地衆生，見本性弥陀，達惟心淨土，普皆覺悟菩提之妙道。

……，亦教人發願往生，自見本性弥陀，亦教人見本性弥陀，各稟正因，同歸正道。

卷十 「淨土持驗」(148)

今此法門，有心淨土淨之理，而因有安養往生之事。

『淨土全書』二卷 兪行敏(1664年，統藏2・14・3)

卷上 「淨土起信」(215)

世有專于參禪者云，惟心淨土，豈後更有淨土，自性阿弥，不必更見阿弥。此言似是而非也。

「修持要約」(219)

三昧現前，即是唯心淨土。

『淨土警語』 行策(1626-1682)(統藏2・14・2)

「勸發真信」(193)

我是未成之仏，弥陀是已成之仏，覺性無二。

次要信得我雖障深業重，久居苦域，是弥陀心內之衆生。弥陀雖萬德莊嚴，遠在十萬億刹之外，

是我心內之仏。既是心性無二。

「觀仏毫相法」(202)

一切世間中，莫不從心造。故知，弥陀毫相，自是我心本具。定中所現，亦是我心造出。是心作毫相，是心是毫相，不從也得，不向外来。

『淨土旨訣』 道霽(1615-1702)(1681年，統藏2・14・1)

「答龔岸齋居士淨土八問」(88)

問。……。夫參念仏是誰，与看如何是本性弥陀……。答曰。參禪念仏，原非二法，各隨根器……。

「溫陵円行上座請示淨土普說」(90)

但，近代參禪不得旨者，每執自性弥陀唯心淨土之說，不信此淨土法門。

『阿弥陀經略註』 統法(1641-1728)(1700年，統藏1・91・4)

「序」(357)

既以自性為弥陀，還以唯心為淨土。

略註(361)

過十萬億有者，……，表超十界十使十惡十苦，即見唯心淨土，自性弥陀矣。

『西歸直指』四卷 周夢顏(1656-1739)(統藏2・14・2)

卷二(173)

問。淨土攝機，誠哉廣矣。然所謂淨土者，在十萬億刹外。較之唯心淨土本性弥陀之說，似乎

著跡矣。

答。……，則知無一土不依我心而立，無一仏不因我性而現。然則十万億刹外之極樂，独非唯心之浄土，極樂国中之教主，独非本性之弥陀乎。

『角虎集』二卷 濟能(1770年，続蔵2・14・3)

「小序」(250)

大乘起信論，分析三細六麤，旨帰唯心浄土。

永明智覚禪師，……極力主張唯心浄土。故有角虎之喩。

卷上 「楚石梵琦禪師」(252)

「懷浄土百韻詩」

本性弥陀一句子

惟心浄土無高下 自性弥陀不去来

「張商英居士」(253)

公嘗著発願文云。自歎，……本性弥陀惟心浄土，不能悟達。

「永懷濟能禪師」(261)

問。威音那畔父母未生前，亦可名浄土否，亦可名自性弥陀否。

答。威音那畔父母未生前，固是真浄土，真自性弥陀。……，若能胸中無此骨董，自然窮則變，變則通，通処見自性弥陀，即證唯心浄土時節也。

「眞歇清了禪師」(263)

或曰，惟心浄土，人人本具。何不直下承当，反求之於十万億刹之外耶。

師答曰。若会得唯心浄土，豈但十万億国微塵刹土，亦未為遠……。若指心之全体，不但唯心浄土。地獄天宮，唯心所現。

「永覚元賢禪師」(269)

「一浄土教源」

雖曰唯心浄土，而不妨有極樂世界。以世界即一心之所現也。雖曰本性弥陀，而不妨有極樂教主。以教主即本性之所成也。

「二念仏正信」

所信仏言，凡有二門。一信其理，二信其事。信其理者，信我心便是浄土，我性便是弥陀也。信其事者，信西方果有浄土，西方果有弥陀也。

卷下 「雪関智闇禪師」(271)

使知眞禪宗即是眞浄土，惟心之外無別仏。眞浄土即眞禪宗，惟仏之外無別心。以心仏不可岐。

「居士祁浄迢」(275)

大抵引心浄土浄之説，以為惟心浄土已耳。

心浄則山河大地，正吾浄心也。此之謂惟心浄土，而心浄土浄也。

「法雲法秀禪師」(277)

……，自性弥陀愈明，……，惟心浄土愈顯……。只因円満，得個自性弥陀惟心浄土，非別有所加也。

「永明延壽禪師」(279)

問。唯心淨土，周徧十方……。答。唯心仏土者，了心方生……。

「王古居士」(283)

公有云，弥陀心内衆生，新新攝化。衆生心中淨土，念念往生……。念本性之無量光，本来無念。生唯心之安養国，眞実無生。

「陳瑾居士」(283)

常与人談惟心淨土。

「普度優曇宗主」(287)

見性即成仏，畢竟那箇是我本性阿弥陀……。

『阿弥陀經直解正行』 了根(1784年，統藏1・33・4)

然則，世人修入法門，貴乎皈依自性三宝，切念自性弥陀，如是行住坐臥……(374)。

……，何有淨土耶，何有禪耶。今人若能打破此関，即親承親證，弥陀即自性，自性即弥陀(375)。

如果上上根器之人，得聞自性即是弥陀之説(379)。

『無量壽經起信論』三卷 彭際清(1740-1796)(1775年，統藏1・32・3)

「叙」(254)

人人念仏了自性 人人念仏證唯心 乾隆四十年(1775年)羅有高撰

卷下(277)

本来成仏，不於心外，別有信仏之心。如是廻向，是名唯心淨土。

『華嚴念仏三昧論』 彭際清(1783年作，後記1791年，統藏2・9・1)

上根利智，了得自性弥陀，全顯唯心淨土(88)。

『省菴法師語録』二卷 彭際清(1786年，統藏2・14・4)

卷下(313)

都言，淨土唯心，是十万余程是外求。但執妄心居在内，不知眞性体全収。

『重訂西方公扱』二卷 彭際清(1792年，統藏2・14・4)

卷下 「專意一念 虎谿尊者」(344)

只此一念是本性弥陀。只此一念達唯心淨土。

『念仏警策』二卷 彭際清(統藏2・14・4)

卷上 「蓮宗宝鑑 優曇法師」(357, 358)

此則見一切衆生，本性皆同弥陀。

見性則成仏，畢竟那箇是我本性阿弥陀。

豁然明悟，親見本性弥陀。

只此一念是本性弥陀。只此一念達惟心淨土。

「与蘇州劉居士」(361)

若覷破此念起処，即是自性弥陀，即是祖師西来意。

卷下 「淨土法語 幽溪法師」(364)

皆須一一參求，悟極樂原是我惟心之浄土，不是它土。了弥陀原是我本性之眞仏，非是它仏。

「答卓堯之文学 無異禪師」(367, 368)

觀經云，是心作仏。心即仏故，浄土唯心。

但一心不乱，專持名号，喚醒自性弥陀，一切仏菩薩皆影現其中矣。

「示王心葵」(371)

信自性中實有西方現成仏道之弥陀如来，唯心中實有莊嚴之極樂世界。

「答卓左車茶話」(371)

若捨現前弥陀，別言自性弥陀，捨西方浄土，別言惟心浄土。比是淆譌公案。

「西方確指 覺明妙行菩薩」(372)

諸弟子，當知，十方諸仏是衆生心，十方衆生是諸仏心。是故憶仏念仏，則十方諸仏現汝心内。

『浄土聖賢録』九卷 彭希涑(1761-1793)(1783年，『浄土宗全書』卷十八)

卷三 「延寿」(650頁)

問。唯心浄土。周徧十方……。答。唯心浄土者，了心方生……。

「宗蹟」(661頁)

然則，唯心浄土，自性弥陀，蓋解脱之要門，乃修行捷徑。

「道琛」(672-673頁)

作唯心浄土説。略云。或問唯心浄土，本性弥陀……。答曰，當知十界四土，若浄若穢，不離我心，此但直具而已。……，豈心外有法。故曰唯心浄土，本性弥陀也。

書偈曰，唯心浄土，本無迷悟。

「優曇」(686頁)

只此一念是本性弥陀，只此一念達唯心浄土。

「宏濟」(687頁)

俄疾作。即召弟子，示以唯心浄土説。

「妙叶」(692頁)

我心彼仏心，彼仏我心仏，一体無二。故云，唯心浄土，本性弥陀。非謂西方無土無仏，不須求生。但在汝生滅縁影中，名為唯心本性也。

卷五 「景隆」(697頁)

或云，那箇是我本性阿弥陀，謂是摂心念仏，參究念仏。

「性專」(698頁)

余將俾海衆同悟本性弥陀。

「伝燈」(711頁)

悟極樂原是我唯心之浄土，不是他土。了弥陀原是我本性之自仏，非是他仏。

卷六 「智旭」(715-716頁)

有卓左車者，嘗設問言。……冀和尚將向来自性弥陀唯心浄土等語……。

旭答言。……，自應諦信是心作仏，是心是仏。

若捨現前弥陀，別言自性弥陀，捨西方浄土，別言唯心浄土。此是淆譌公案。

「行策」(723 頁)

我是未成之仏，弥陀是已成之仏，覺性無二。

次要信得我雖障深業重，久居苦域，是弥陀心內之衆生，弥陀雖万德莊嚴，遠在十万億刹之外，是我心內之仏。既是心性無二。

「超城」(725 頁)

直下構得，便知自性弥陀，共證藥王三昧。

卷七 「楊傑」(742 頁)

聖凡一体，機感相応。諸仏心內衆生，塵塵極樂，衆生心中之淨土，念念弥陀。吾以是觀之。

「王古」(742-743 頁)

又嘗著淨土寶珠集序云，衆生心淨則仏土淨，法性無生而無不生……。念本性之無量光，本來無念，生唯心之安養國，眞實無生。

「鍾離瑾」(743 頁)

子景融……嘗曰。……不識弥陀，弥陀便在西方外，識得弥陀，弥陀只在自己家。

「江公望」(744 頁)

便成三昧。所謂，自心作仏，自心是仏，自心見仏。

「陳瓚」(750 頁)

有客過之，呵曰。爾不聞大鑿之論唯心者乎。何厭垢而欣淨為。答。唯心淨土，堯之大鑿，而非自大鑿始也。是心作仏，是心是仏，仏固先言之矣。蓋懼人以不淨之心，求淨土也。

卷八 「黃承惠」(772 頁)

承惠曰。爾教我念自性弥陀邪，念極樂弥陀邪。啓初曰。汝將謂有二邪。

『徹悟禪師語錄』二卷 了亮(1810 年，統藏 2・14・4)

卷上 「示衆」 普說(380, 381)

娑婆之穢苦，安養之淨樂，皆唯心現。唯心之穢苦既現，則遭大逼迫。唯心之淨樂既現，則得大受用。

弥陀之所以為弥陀者，深證其唯心自性也。然此弥陀極樂，非自性弥陀，唯心極樂乎。但此心性乃生仏平等共有。不偏屬仏，亦不偏屬衆生。若以心屬弥陀，則衆生乃弥陀心中之衆生，若以心屬衆生，則弥陀乃衆生心中之弥陀……。

卷下 「跋」 淨土津梁跋(389)

夫，唯心淨土當處現成，自性弥陀觀體不隔，乃為是津梁之說。

『徑中徑又徑』四卷 張師誠(1825 年，統藏 2・14・5)

卷一 「起信法」 易行門

樂邦文類。楊次公曰……諸仏心內衆生，塵塵極樂。衆生心中淨土，念念弥陀(419)。

樂邦文類序。明給事中陳瓚……，答曰，唯心淨土，堯之大鑿，而非自大鑿之始也(421)。

明成時淨土十要序曰。……彼心彼仏心，彼仏我心仏，……。故云，唯心淨土，本性弥陀(421)。

卷二 「起信法」 疑誤門

龍舒淨土文曰。……，又曰。世有專於參禪者云，惟心淨土，豈復更有淨土……。此言似是而非

也(422)。

長蘆蹟禪師曰。……，然則唯心浄土自性弥陀，蓋解説之要門，修行之捷徑(425)。

又曰。有謂唯心浄土，無復十万億刹外更有極樂浄土……。但引而擲之者，錯会其旨(425)。

「起信法」 微驗門

蓮池大師往生集序曰。……，勃然曰，浄土唯心，心外無土。往生浄土寓言也……(431)。

卷三 「立願法」 決定門

元優曇大師曰。……，只此一念是本性弥陀，只此一念達唯心浄土(432)。

「勵行法」 精持門

明空谷大師景隆曰。……，那箇是我本性阿弥陀。謂是摂心念仏，参究念仏(437)。

卷四 「浄土雜詠選錄附」

「元中峯浄土咏」

自性弥陀如不念(452)。

「明蕩益」

西方即是惟心土(5首，452)

「自作」 臨時

惟心自性理難明(細註)参禪者每謂惟心浄土，豈復更有浄土……。此言似是而非(455)。

『念仏百問』 悟開(-1830)(1825年，統蔵2・14・4)

「序」(399)

一念念仏，全念是仏，是則名為自性弥陀。觀想西方，依正在觀，是則名為唯心浄土。

道光五年(1825年)江沅。

「天衣云。生則決定生，去則實不去。何謂也」 二十三(402)

若了弥陀即本性，本性即弥陀，而如来者，無所從來，亦無所去。

「又云。自問阿那箇是本性阿弥陀，其法如此」 廿七(402)

若自問阿那箇是本性阿弥陀，未免引起識情湊泊之弊。

「学者皆称……念仏不及参禪」 二十八(402)

達唯心浄土，了本性弥陀。言達言了，豈非悟境。

『浄業知津』 悟開(1829年，統蔵2・14・4)

「念仏進一解説」(398)

夫，即心即仏，仏在心頭，唯心浄土，此等語句，最高最上最第一。

『阿弥陀經要解便蒙鈔』三卷 智旭要解，達默鈔(1850年，統蔵1・91・5)

卷上(443)

喚作唯心浄土，立則立即心之實境。即一句即心之仏号，乃四種唯心之身土。後文云，……奈何離此浄土，別談唯心浄土(cf. 『要解』大正37・369下)。

卷中(479)

(鮮)重重結示(cf. 369下)。

(鈔)仏乃衆生心内弥陀，名為自性弥陀。……，故曰唯心浄土自性弥陀也。

(鮮)柰何離此淨土，別譚唯心淨土(cf. 369下)。

(鈔)別執緣影妄想，以為唯心淨土，自性弥陀。

卷下(487, 504)

(鮮)……，若無信願……(cf. 371上)。

(鈔)若無信願者，不信西方極樂是唯心，弥陀乃自性。但信緣影妄想，為唯心自性。

(解跋)古人云。念自性弥陀，生唯心淨土，合觀之，是心作仏，是心是仏，心外無仏，仏外無心之義明矣。後人不達，捨西方極樂，別言唯心淨土，捨万德慈尊，別言自性弥陀……。

(鈔)古人云，會自性弥陀，生唯心淨土者，乃引祖語，明極樂三界万法，亦皆唯心也。……。

後人不達，……別執緣影妄想，以為唯心仏土……。譬如離器求金，則於仏祖共相違也。

『淨土生無生論會集』 達默(1849年，統藏2・14・1)

偏執無生者，大端墮在緣影妄想，以為唯心淨土，自性弥陀。故題曰，淨土生無生論。正破緣影之虛妄，而立乎淨土之生，即心性之無生也(44)。

蓋諸仏乃悟衆生心內之諸仏，衆生乃迷諸仏心內衆生……(cf. 『淨土生無生論』大正37・382下)。乃悟衆生心內諸仏者，謂法仏乃衆生心內之性體諸仏……。乃迷諸仏心內衆生者，謂菩薩乃諸仏心內無明衆生……(57)。

故古德云。諸仏心內衆生，塵塵極樂。衆生心內諸仏，念念證真……(cf. 382下)。故古德云，引古證也。塵塵極樂者，衆生即仏故，念念證真者，仏即衆生故……(57)。

但隨功行淺深，品位高下耳(cf. 382下)雖見他身，即見自身，自他不二。故曰，唯心淨土，自性弥陀也(58)。

蓋西方極樂世界乃吾心中之一土耳。娑婆世界亦吾心中之一土耳(cf. 383下)。極樂者，乃吾心之淨土，心淨故，所以土淨也。娑婆者，乃吾心之穢土，心穢故，所以土穢也(63)。

「跋語」(65)

自性弥陀，唯心淨土，去則不遠西方極樂……。 道光二十九年(1849年)蓮村氏敬識。

『淨土聖賢錄統篇』四卷 胡珽(道光末1850年頃，『淨土宗全書』卷十八)

卷二 「往生王臣」第三

「張師誠」(830頁)

一云。唯心自性理難明……。自注，……故知唯心淨土自性弥陀。

「章攀桂」(831頁)

自為序曰。淨名云……。華嚴云……。皆唯心淨土之旨也。

若夫唯心淨土，則在當人默契。

『勸修淨土切要』 眞益願纂述(1855年，統藏2・14・5)

參禪人，正好念仏，參禪大悟，……，已識得自性弥陀，然行解相應(458)。

『阿弥陀經註』[修西定課] 鄭澄德・鄭澄源(1861年，統藏1・91・4)

說唯心淨土者，未必能神游仏刹。說自性弥陀者，未必能量同仏身(376)。

『蓮宗必讀』 古崑(-1892)(1868年，統藏2・15・2)

「優曇和尚蓮宗寶鑑」(120)

只此一念，是本性弥陀，只此一念，達惟心浄土。

「幽溪法師浄土法語」(125, 126)

言言開浄土之惟心，句句演弥陀之本性。

悟極楽原是我惟心之浄土，不是他土。了弥陀原是我本性之眞仏，非是他仏。

「信願持名歴九品四土説 靈峰滿益法師述」(127)

自心本具極楽，更無疑慮。

「浄土十要総序 古歙堅密大師撰」(130)

自心之阿弥，還度自心之生死。

『浄土神珠』 古崑(1870年，統蔵2・15・2)

「浄土神珠序」(136)

十万億刹之遐方，的是唯心之浄土。八万四千之妙相，得非本性之弥陀。余從前捨西方極楽，別言唯心浄土。捨万德慈尊，別言自性弥陀。背樂邦之慈父，墮死水之深坑，眞可哀哉。

西方依正，不離本性，廻神億刹，実生自己心中……。 壬申(1872年)芳慧。

「自序」(136)

皆云，唯心浄土，自性弥陀，不可著相。因此雖喜念仏，但只著空而已。後閱台浄二宗，及無生論。始知浄土実境昭彰即是唯心，弥陀眞身顯現即是自性。

「持名方法」(141, 142)

名理一心。須了達法界唯心，心外無境，弥陀相好，元是自心，十万億刹，不踰当念。

四種行人不同。……。四円教人，能達浄土唯心，弥陀本性。

弥陀之相好，乃我本性之弥陀。十万億刹，乃吾唯心之浄土。

「無量寿仏讚 大智律師」(144)

八万四千三妙相，得非本性之弥陀。十万億刹之遐方，的是唯心之浄土。

「浄土神珠後附」(154)

余自慚，……若不逢知識，將唯心本性，細細剖明……。猶且不知唯心本性……。

略引序云，浄土実境昭彰即是唯心，弥陀眞身顯現即是自性。 同治甲戌(1874年)芳慧。

『浄土随学』二卷 古崑(1875年，統蔵2・14・5)

卷上 「念仏偶成」(472)

西方浄土即唯心 欲識唯心須往生 …… 本性弥陀丈六身。

卷下 「浄土神珠序」(480, 前出)

『浄土承恩集』 芳慧(1875年，統蔵2・14・5)

「浄土神珠序」(501, 前出)

「募刻浄土神珠後跋」(502, 前出)

「八要贅言」(505)

行 安知自性有阿弥，從今勿執唯心土。

『清珠集』 治兆(1870年，統蔵2・15・1)

「只此一念」(21)

只此一念……是本性弥陀，是達唯心淨土。

「心息相依」(23)

三昧忽爾現前，即是唯心淨土。

「參念」(24)

見性則成仏，畢竟那箇是我本性阿弥陀。

「著力」(25)

自性弥陀之不現前。

『蓮邦消息』 妙空子(鄭学川，-1880)(1871年，統藏2・15・1)

「性相光明品」第一(42, 46)

本自心中現……念念見仏。衆生心中仏，仏心中衆生，譬如兩鏡交融。

古人云。自性弥陀，恒常清淨。唯心淨土，無有封疆。

仏法都円，則自性弥陀，唯心淨土，明明現在。

『念仏起緣弥陀觀偈直解』 張淵(1874年，統藏2・15・1)

故知，即是本性弥陀，淨土出生，故知，即是唯心淨土(75)。

自然瞥見本性弥陀，自淨土來，自淨土去……。要知，即是本性弥陀。何以故，一切衆生，悉各具有如是自性功德故(77)。

『淨土證心集』三卷 己蓮(1875年，統藏2・15・1)

卷上 「心土不二智者同往」(81)。

既樂土即是吾心，吾知彼之土即知自心，吾念彼之仏即念自心。……心土不二，生仏一致。

「惟心異同」(81)

心大亦然。若了此者，決定無疑，毫無所滯，方可名唯心淨土也。

卷中 「西方殿對聯」(88)

步步過惟心淨土 人人見自性阿弥

「四弘誓願」(93)

願學 淨土唯心離五濁，一心念仏橫超遠。

「十二時念仏歌」(95)

平旦寅 淨土惟心非遠近，能眞見者甚分明。

卷下 「唯心念仏偈並敍」(96, 97)

是故彼唯心之仏，了心者方能繫念，彼唯心之土，了心者方知求生。了且如是。

一念弥陀 弥陀自性…… 一念弥陀 惟心淨土

「淨土要約」(100)

土 西方淨土我惟心。

理 自性弥陀遠訪臨。

『淨土紺珠』 徳真(1880年，統藏2・15・2)

「一念鑿鑿」(176)

畢竟那箇是我本性阿弥陀。……，豁然明悟，親見本性弥陀。

「一息彌陀」(177)

三昧忽爾現前，即是惟心浄土。

「一箇彌陀」(178)

徧法界是箇自己弥陀，盡虚空是箇惟心浄土。

「三道彌陀」(182)

皆須一一參求，悟極樂原是我惟心之浄土，不是他土。了弥陀原是我本性之弥陀，非是他仏。

「三即彌陀」(183)

以弥陀即本性，其為宗也。以浄国即惟心，其為用也。

「十無疑彌陀」(193)

二，修性不二。惟心浄土，是本具之理。……。故經云，是心作仏，是心是仏。

「十只此彌陀」(194)

只此一念是本性弥陀，只此一念達惟心浄土。

『唯心集』 乘戒定慧(統藏2・15・4)

「自序」(338)

頓了目前，所謂自性弥陀，唯心浄土之義也。

「唯心集」(339)

了知自性阿弥陀，那裏工夫有許多。

一念無生真浄土，唯心之旨少人知。

『影響集』 比丘尼量海(統藏2・15・4)

「浄土詩」(341)

成仏以来今十却 弥陀合在我心中 …… 但觀自性弥陀仏

「念仏詩四十八首」(342)

一句弥陀仏慧明 唯心浄土不生生

『蓮修必読』 觀如(1886年，統藏2・15・4)

「析善導和尚念仏偈八首」(368)

不如及早念仏 悟取弥陀自性

「帰元鏡詞曲 智達法師」(370)

須知自性的弥陀須自念

「靈峰宗論 滿益大師」(376)

阿弥陀仏像贊

感応道交，生仏無礙。討甚自性弥陀，只此豈属心外。

「浄土偈有序」(377)

博山禪師，拈浄土偈。每云浄心即是西方土……。

西方即是唯心土(8首)

「語録 省庵法師」(381)

勸修浄土詩

都言浄土唯心是，十万余程是外求，但執妄心居在内。

「遺集 徹悟禪師」(383)

念仏偈

自性弥陀 弥陀自性 執性廢修 因藥成病

極樂唯心 心唯極樂 離土論心 翻然大錯

「唯心集 乘戒大師」(385, 前出)

『蓮修起信録』六卷 程兆鸞(1894年, 統藏2・15・3)

卷四 「往生徵信録」下(224, 226)

我念弥陀，弥陀即心，我登極樂，極樂在心。

君等果能深信，篤實修持，當悟取弥陀即自性也。

『報恩論』卷首一卷，卷正二卷，卷附一卷 沈善登(1897年, 統藏2・15・3)

卷正上 「浄土法門綱宗」(264)

唯心浄土，自性弥陀二語。古人原恐學者高推聖境，不敢承當……。

又痛弁之。謂浄土乃唯心之浄土，實有可到之地。弥陀乃自性之弥陀，實有可見之人。

將此二語，破句詭作何為唯心，則浄土是，何為自性，則弥陀是。

夫所以反覆詳弁唯心自性者，為欲使人依經所說，深知彼土之他仏，即是自仏，彼土有相之他仏，即是自性無相之實相仏，而不礙有他也。

『摩訶阿弥陀表論』 王耕心(1904年, 統藏1・32・3)

惟心浄土，自性弥陀者，無非此衆生之心性(291)。

参考文献

望月信亨『中国浄土教理史』411頁以下。

忽滑谷快天『禪学思想史』下卷 465頁以下。

安藤俊雄『天台思想史』219-319頁。

小笠原宜秀『中国近世浄土教史の研究』171-238頁。

山口光円『天台浄土教史』197-213頁。

張 聖巖『明末中国仏教の研究』386-390, 418-419頁。

荒木見悟『雲棲株宏の研究』122-153頁。

[附] 日本仏教における唯心浄土思想(「唯心浄土」「己心弥陀」『望月仏教大辞典』, 柏原祐義「唯心浄土説の考察」『宗学研究』第20・21合併号, 田村芳朗「本覚思想と浄土念仏」『印仏研』第22巻第2号など)。

『観心略要集』源信(『恵心僧都全集』巻一, 288頁)

我身即弥陀，弥陀即我身……。己心見仏身，己心見浄土。

『自行念仏問答』源信(『恵心僧都全集』巻一, 550頁など)

我已心即阿弥陀，己心即西方浄土也。

『妙行心要集』上之本，源信(『惠心僧都全集』卷二，263頁)

彼仏自性，唯是我心。我心自性，弥陀法界。

同，中之本(338頁)

南無我心本覚阿弥陀仏。

『勸心往生論』忍空(1154年，『浄土宗全書』卷一五，538頁)

我身即是弥陀如来。

『金剛宝戒章』下 源空草(『浄土宗全書』続卷一三，34頁)

弥陀者心之異名。……，即在己心。経云，去此不遠，乃至是心是仏。

『教行信證』信巻序 親鸞(『真宗聖教全書』卷二，47頁)

然末代道俗，近世宗師，沈自性唯心，貶浄土眞證。

『改邪鈔』覚如(1337年，『真宗聖教全書』卷三，84頁)

己身の弥陀，唯心の浄土と談ずる歟。この所談においては聖のためにして凡のためにあらず。

『法華問答』本，存覚(1338年，『真宗聖教全書』卷三，291頁)

汝が所立の西方極楽世界の阿弥陀にあらず，己心の阿弥陀なり。

『教相十八通』巻下，聖罔(『浄土宗全書』卷一二，756頁)

己身ノ弥陀，唯心浄土ナレハ，外ニ求ムヘカラスト云ニハ雲泥万里也。

『大原談義聞書抄見聞』聖聡(『浄土宗全書』卷一四，780頁)

唯心浄土，己心弥陀義，他宗所存也。

『大原談義纂述鈔』巻下，無絃(同，810，812頁)

弥陀在己心者，又有二義……。

又先哲解極楽不遠，弥陀在己心云。唯心浄土，己心弥陀，諸教所談，眞如実相，全是一同也云云。此義不少分相似。唯心浄土者，人人具足浄土。己心弥陀者，箇箇円成弥陀也。

『大原談義選要鈔』巻下，覚誉(同，854，855頁)

然旧解意，極楽不遠弥陀在己心，此理諸教所談，眞如法性義也。

又，因明竹窓二筆云，有謂，唯心浄土，無復十万億刹外更有極楽浄土。

「後序」(『觀經義疏』元照)湛慧(1672年，大正37・305下)

庶繙看之輩。觀解頓発，共游唯心之浄土，願行速就，各見本性之弥陀矣。

『禅祖念仏集』巻上 慧中(1694年，『浄土宗全書』統一五，258，269，272頁)

「姑蘇守訥禅師」……，師有唯心浄土文。

「一元宗本法師」……，蓮宗則曰本性弥陀。

巻下 「鼓山永覚禅師」……，雖曰唯心浄土，而不妨有極楽世界……。雖曰本性弥陀，而不妨有極楽教主。

『諸家念仏集』九巻 懐音(『浄土宗全書』卷一五，660，750頁)

巻四 「禅宗念仏」

「数息念仏」……，三昧忽爾現前。即是唯心浄土。

「参究念仏」……，那箇是我本性阿弥陀。

卷七 「天台念仏」

唯心浄土，本性弥陀。故観経云，諸仏如来是法界身……。

『和語燈録日講私記』巻五，義山・素中(『浄土宗全書』巻九，811頁)

此義の義を以て眞言教所観の己心の弥陀と云ことを分別すへきなり

『即心念仏(安心決定)談義本』霊空(1728年『浄土宗全書』続巻一四，1頁以下)

台宗の教観を学び，唯心の浄土の往生を期すること，忘るゝ日なければ……。

(『同弁惑編』殊意癡，『同弁偽』性慶，『同或問』霊空，『同彈妄録』性慶，『同摘欺説』敬首等参照)。

『教行信證指授鈔』巻五，法海(『眞宗全書』巻三四，162-164頁)

自性唯心ハ聖道門，安心ニシテ，唯心，弥陀己心，浄土ト落居スルナリ。……。

爾レハ自性唯心，我執ヲ折テ，他土得生ノ浄土教ヲ信スヘシ。

就中，数部には中国の唯心浄土思想について論述があり，参考となる。

結 論

本稿は，中国浄土教における唯心浄土思想の総合的成果を意図した。

第一章「従来の見解と問題の所在」では，初めに中国浄土教全体を鳥瞰し，浄土教には広義の諸仏浄土教と狭義の弥陀浄土教があること，後に「唯心浄土，本性弥陀(あるいは自性弥陀)」と連記される唯心浄土思想には本来，唯心浄土系と本性弥陀系の二系統があることを知った。次いで，「従来の見解」では永明延寿をはじめ，四明知礼，慈雲遵式，霊芝元照などの個々の成果は認められても総合的成果は認められないことを確認し，比較的多くの資料を提示する『望月仏教大辞典』「唯心浄土」「己心弥陀」の項目，柏原祐義「唯心浄土説の考察」『宗学研究』第20・21合併号から幾つかの関係資料と問題の所在を見出した。その結果，本稿「問題の所在」として，中国浄土教における唯心浄土思想の研究をその源流としての経典から先行思想と辿り，成立としては永明延寿の浄土思想，さらに確立としては宋代の唯心浄土思想，その継承として元明清代の唯心浄土思想を調査し解明し，それによって総合的成果を意図した。その際，可能な限り新しい資料を調査すること，諸仏浄土と弥陀浄土を峻別し，主眼は唯心弥陀浄土思想であることなどを課した。

第二章「経論に説かれる弥陀浄土思想と唯心浄土思想」では，第一節「浄土三部経に説かれる弥陀浄土の諸相」で浄土三部経と漢訳異本を細部にわたって調べたが，その結果，弥陀浄土教の根本経典『無量寿経』『阿弥陀経』はすべて，『観無量寿経』は「是心作仏，是心是仏」の経文を除いて，ことごとく弥陀浄土は西方有相浄土で，唯心浄土思想の源流・典拠になりえなかった。ここで予測された唯一の例外『観無量寿経』「是心作仏，是心是仏」の経文が唯心浄土思想最大の典拠になることはその後の長い論述の過程が立証したとおりである。第二節「主要な経論に説かれる弥陀浄土の諸相」では，『法華経』『華嚴経』『大日経』『大智度論』『大乘起信論』などに説かれる弥陀浄土の諸相を調べたが，そこでもすべて西方有相浄土の表現で，唯心浄土思想の源流・典拠になりえなかった。そこで，角度を変えて第三節「唯心浄土思想の典拠」を従来の見解から調べると，『般舟三昧経』〈仏立三

味〉、『観無量寿経』〈是心是仏〉、『維摩経』〈心浄土浄説〉、『華嚴経』〈唯心偈〉などである。以上を要約すると、浄土経論に説かれる陀浄土の諸相は、『観無量寿経』〈是心是仏〉を除いて、すべて西方有相浄土であり、唯心浄土思想の源流・典拠になりえない。従って、インド浄土教には唯心浄土思想は無いこと、典拠の経論はいずれも唯心思想で、唯心諸仏系と唯心諸仏浄土系があること、従って、中国浄土教だけではなく、中国仏教全体の流れの中で唯心弥陀浄土思想を探求することなどが知られ、次の課題となった。

第三章「唯心浄土思想成立以前の先行思想」では、先に知られた二系統から第一節「唯心浄土」の先行思想で第一項「中国仏教における主な浄土観」を鳥瞰して関係事項、とくに従来指摘されない華嚴系の浄土観を予測し、第二項「従来の見解で指摘された先行思想」で『釈浄土群疑論』懷感撰を唯心弥陀浄土的思想、『六祖壇経』慧能述、法海集を強力な禅系西方浄土批判説と位置づけた。第二節「本性弥陀」の先行思想では、『観経』是心是仏釈を中心に第一項「善導流諸師の見解」で曇鸞、道綽、とくに善導〈指方立相論〉と唯心浄土思想との関係、第二項「各宗諸師の見解」で浄影寺慧遠、吉蔵、智顛、さらに智顛偽撰『天台観経疏』『浄土十疑論』、加えて初期禅宗の道信、弘忍の関係文を考証した。それによって、唯心浄土思想は中国仏教全体の中で発酵し続けていたことが迎れた。

第四章「唯心浄土思想の成立—永明延寿の浄土思想—」は唯心浄土思想の最初の提唱者とされる永明延寿(904-975)の浄土思想を可能な限り解明した本稿の最も重要な章節である。

まず第一節「従来の見解と問題の所在」では、延寿の唯心浄土思想と言えば必ず指摘される『万善同帰集』第28問答「唯心浄土は周く十方に遍す……。」(大正48・966中下)と従来の見解を紹介し、問題の所在として天台・華嚴・禅系の立場では引用典籍等の詳細な研究があるにもかかわらず、浄土教系には無いこと、唯心浄土思想は『万善同帰集』で論じられても、彼の主著『宗鏡録』百巻での論及は少ないことなどを批判し、延寿の浄土思想、具体的には唯心浄土思想と弥陀浄土思想の解明を意図した。

第二節「永明延寿の唯心浄土思想」では、第一項「唯心浄土の見解」で端的な言及『万善同帰集』第28問答を分析し、すでにそこには諸仏の唯心浄土と中下根の西方浄土往生が認められることを指摘した。第二項「唯心浄土思想に関係する主な見解」では『宗鏡録』『万善同帰集』などから浄土に関する言及(浄土、来迎、念仏、報仏莊嚴など)を抄出し、天台・華嚴・禅系に較べて浄土教関係資料が極めて少なく、諸仏の唯心浄土であることを論証し、それに伴い諸仏の唯心浄土と弥陀の西方浄土を安易に会通してはならないこと、後世の禅浄双修思想(四科棟)の疑義を提起した。

第三節「永明延寿の弥陀浄土思想」では、第一項「弥陀浄土思想関係資料と全体的特徴」で膨大な延寿著述の中から弥陀浄土の見解39文を抄出し、天台・華嚴・禅思想に較べて極めて言及が少なく、彼の思想大系の中で弥陀浄土思想の評価は低いことを知った。第二項「弥陀浄土思想関係引用経論と延寿の見解」では引用経論の内容を調べ、とくに『観経』『是心是仏』による唯心思想と〈九品往生〉による上根、中下根の行業論、並びに『如來不思議境界経』『八十華嚴経』等による唯心[浄土]思想を知った。第三項「中国浄土教関係典籍の内容と延寿の見解」では『安楽集』『群疑論』『浄土慈悲集』『天台観経疏』『華嚴演義鈔』等から弥陀浄土思想の見解を明らかにした。以上で、延寿の浄土思想、具体的には唯心浄土と弥陀浄土は解明されたが、さらに後世の評価として第四項『自行録』に認めら

れる浄土の行業」では著述から知られる延寿の浄土思想と『自行録』の浄土行は相応しないことを指摘し、第四節「中国浄土思想史における永明延寿」では『楽邦文類』『仏祖統紀』で彼の評価は確立するが、しかし、禅浄双修の思想家[永明四科揀]としての延寿像は後世の附会であることを論証した。やや大部になった永明延寿の浄土思想を総括すると、彼の唯心浄土は本来唯心思想による諸仏浄土、その一仏としての上根の唯心弥陀浄土と中下根の西方浄土往生という図式である。彼は天台・華嚴・禅思想などを壮大な唯心思想で統合し、その中の極く一部に唯心浄土思想を主張したに過ぎないのであり、中下根の西方浄土往生思想は彼以前の諸師と何等異なるものでない。以上の論述で従来の見解の幾つかは訂正されたし、新たな諸相も知られたと思われる。

そこで、さらなる課題として「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」を主張する真の唯心弥陀浄土思想家は誰か、その実態は何か、具体的思想形態は何か、それに伴う新たな疑義は何かなどが提起された。

本号第五章「唯心浄土思想の確立」はこうした課題を前提に宋代の唯心浄土思想の資料的思想的研究を意図した。すでに「要結」で述べたので、簡単に辿ると第一節「従来の見解と問題の所在」で本章の課題と論述予定を設定し、第二節「唯心浄土思想の諸資料」で『楽邦文類』の関係文 58 文を指摘し、第三節「唯心浄土思想の形成過程」でその他の関係資料を加えて整理し、それに係わる諸事項と課題を解明し、資料的研究をなし終えた。第四節「唯心浄土思想の諸形態」では、宋代浄土教との関係、「唯心浄土、本性弥陀(自性弥陀)」の有無、天台系と禅系唯心浄土思想と問題点、唯心浄土と西方浄土の関係(浄土観、行業論、機根論)、延寿の影響などについて論述し、それによってまた新たな諸相とさらなる課題が認められた。

第六章「唯心浄土思想の継承」では、時間的紙数的制約から元明清代の唯心浄土思想資料を指摘するにとどめた。

以上の論述によって、中国浄土教における唯心浄土思想の総合的成果は不十分ながらなしえたと思われる。

本稿冒頭で指摘したように、従来の見解には個々の勝れた成果は認められても、経論から清代に及ぶ総合的成果は認められず、それゆえ本稿では最初の重要な作業である関係資料の調査・考証・整理等の基礎的研究に時間をとられ、思想研究の分野は永明延寿の浄土思想を除いて充分になしえなかったし、幾つかの課題も残した。また、前号(1990年3月)から本号まで諸般の事情で4年余を経過した。その間に推敲の変化もあって、処々に再説・重出も認められる。添削に苦慮したが、各章はそれだけで独立した分野でもあり、敢えて再説をとどめたのは考察の経緯を示すためである。

最後に、処々に提起したが、残された主な課題としては、唯心浄土思想に限ると多くの瑕瑾補正はもとより、新たな資料調査と諸師夫々に微妙に異なる思想形態の解明、とりわけ今回なしえなかった元明清代の思想研究であり、それと深く係わる禅浄双修思想の総合的研究がある。さらに日本仏教における唯心浄土思想も「己心弥陀」の用語が気にかかり、加えて現代的意義がある。

再び中国浄土教に立ち戻り、唯心浄土思想から照射された課題としては、まず中国浄土教の概念規定である。日本で言う「阿弥陀仏の極楽浄土に往生し成仏することを説く教え」(『岩波仏教辞典』)の概念はどうも唯心浄土思想にはそぐわない。このことは所謂、善導流浄土教の再検討を必然

的に要求する。中国浄土仏教では善導流の諸師を史学としても教学としても日本浄土教とは違った高僧とみていたようである。われわれは中国浄土教を日本浄土教の立場だけで見ていないか。唯心浄土思想はその端的な一例である。なすべき課題は多い。